

Trial #143

—— 空位の騎士 ——

麦 (穀物 P)

目次

第一章	孤独な怪物と孤独な姫	4
第二章	駆け出しのお姫様	44
第三章	クラシック級	76
第四章	エリザベス女王杯	104
第五章	最後の春の始まり	136
第六章	決戦旅行前夜	166
第七章	告白	182
第八章	西への航海	210

第九章	世界の架け橋	232
第一〇章	旅路、そして日常を続ける覚悟	246
第十一章	高みへと至る姫	268
第十二章	騎士離任	304
最終章	前編 Trial#14：—新たな世界で—	326
	後編 Trial#143：—遠い世界への手紙—	338

第一章 孤独な怪物と孤独な姫

残念ながら、この世界でも失敗してしまった。

早々に世界脱出の条件を満たせなくなったことから、アタシはもう全てを諦めた。諦めて、また次の繰り返しに飛ばされるのを待つだけ。それが今日なのか、明日なのか、それとも六年後なのかはわからない。もうレースに出る意欲もなく、かと言って諸国放浪するような、自分の気を紛らしつつやり過ぎするための行動をする気力も消えていた。

先週、トレーナー契約は解消した。あいつはなんとかアタシを引き留め、寄り添おうとしてくれた。でも、あいつを無間地獄に引きずり込むわけには行かない。なんとか説き伏せて、アタシの素行不良、トレーニング拒否、敢闘精神に欠けるレースなどの「罪状」を

並べ立てた契約解除届を書かせた。でも、どうしても印鑑を捺しながらなかったので、最後は印鑑を取り上げて代わりに捺し、理事長のもとに持っていった。理事長やたづなつちは全てを見通しているようだったが、特段止められることはなく、契約解除は成立した。

アタシはそれから、授業に出なくなつた。もちろん度重なる警告が来た。しばらく経つと生徒会から呼び出しがあり、

『ゴールドシップ、我々はそろそろ重要な勧告を君に伝えねばならなくなる』

と、暗に退学を示唆する宣告を受けた。学園をクビになるなら、どうせこの世界から弾き出される運命なら、世界をめちゃくちゃにかき回してやろうと、仄暗い感情を抱いた。

いろいろ考え、学園内の人間関係をズタズタにしようと企てた。この世界でのアタシは奇々怪々とした面を一切出さず、いたつて真面目な美人を演じていたから、他の生徒から距離を置かれることが少なかつた。時折不良に類する振る舞いをしていたため、G I級のレースに真剣に取り組む上位層はアタシに近づかなかつたが、それ以外の多くの連中とはむしろ近い関係を築けていた。そこで、自他ともに認める美貌を悪用し、ありていに言えば愛の泥沼に墮とした。ちよつと気がある風な言葉を囁き、好意を向けさせた。あとは

勝手に墮おちた。彼女たちが寄せる好意や恋愛感情は、空からつぽのアタシの心を一時埋めた。

一年が経ち、学園の全生徒のうち六割がアタシの「モノ」になった。世界三大美人に並ぶ四人目の傾城けいせいと言つても過言ではないと思つてしまふくらいだった。

もちろん、それによつて敵意が生み出された。多感な年頃のウマ娘が集う学園だから、お互い親しくなる生徒の中には恋愛感情にまで発展するようなカップルも多数いた。しかし、アタシの活動でそうしたカップルの多くが破局はきよくした。アタシに愛する相手を取られた奴らは当然アタシを敵とみなした。直接抗議ちやくせつこうぎに来たり、切つた張つたの乱闘らんとうになることもあった。

一方、アタシが墮おとした方の生徒も、アタシからの好意を一身に受けるのは誰かと争いになったり、あるいは嫉妬しつと心が転じたりして、結局は敵となった。自分の方を見ないアタシの存在は可愛かわいさ余あつて憎にくさが百倍、人に取られるくらいならともに地獄へ逝ゆこうと、いろいろな物を持ち出して向かつてきたり、自らの膂力りよりよくでもつてその思いを果たすべく首を絞しめ上げてきたりと、アタシに対する暴力沙汰ぼうりよくざたが横行おうちようして学園内は大きく混乱した。

このことは、生徒とトレーナーとの関係にも悪影響あくえいきやうを及およぼした。自分の思い人を取られ、嫉妬しつとに狂つた生徒がトレーナーの指示を無視してトレーニングをサボり、アタシや相

手との果たし合いをしに来た事例は数え切れず。また、トレーナーと担当生徒との間に恋愛感情めいたものがあつた事例では、生徒がアタシにうつつを抜かすようなことが多発したらしい。

生徒会や教官陣の介入、アタシを物理的に隔離する処分が行われたことにより、最終的には遠くから悪意や敵意を向けられるだけの状況に落ち着いたが、事態を收拾するのには半年近くかかった。その過程でアタシの退学処分も検討されたらしいが、アタシの行動を学園の規則で退学処分とできるような条項が無かつたようだった。一番近いとされた「学園内の風紀を著しく乱した」という条項も、職員会議や理事会がこれを適用可能か検討しても議論が紛糾した^{ふんきゆう}こと、また、無理やり処分しようとすると全生徒の九割を処分する羽目になるとのことで、表だつた処分が行われることは無かつた。騒動が外に洩れて週刊誌に載ることも度々あつたが、学園がURRともども事実無根であると主張すること^{じじつむこん}でうやむやにされた。

これらの悪行三昧を働いた結末として、アタシは学園のアンタツチャブルな存在と化した。大部分の生徒のみならず、トレーナー陣ですらも面倒が見切れないと遠巻きにするようになった。学園の不良達すらも恐れをなして近づかなくなつた。授業に出ない素行不

良を続けても、処分の声すら聞かれなくなつた。後から聞いた話では、理事長の専決処分せんけつしよとがんでアタシへの処分や退学勧告を却下きやうかしていらしい。なんでそこまでしてアタシを守つたのかは分からないが、もしかしたらアタシがこの世界から弾き出されるまでの行方と、なけなしの成果を予見していたのかもしれない。

四月も半ば、G I レースに向け最終調整をする前途有望ぜんとゆうぼうな選手達や、入学したてで基礎トレーニングが始まつたばかりの新生を見ながら、グラウンドの土手のところに寝そべつていた。この時期になるとアタシの悪名あくみやうは新生にもきつちりと広まり、彼女たちはちらりと視線を寄越よこしては、アタシが気づくとさつと顔を背けるのが様式美ようしきびとなつていた。

ただ、空むなしかった。輝かがやいている連中をうらやむ気持ちも消えて久しく、新生にちよつかいをかける気も起こらなかつた。視界に映る空は抜けるような青さで、日にあたつていと暖かさを通り越して少々暑あついくらいだった。

寝ているのも飽あきたので、身体を起こして立ち上がり、あてもなく学園の中をさまよひ歩いた。授業中なのもあつて、誰ともすれ違ふことのないまま噴水ふんすいと三女神さんめがみの像がある広

場にたどり着いた。じつと像を見上げたが、かつて春先にこの像と向かい合つて得られた力の予兆よちょうもなく、像が語りかけてくることもなかった。三女神もアタシのことを見放みはなしているに違いない。見放しているなら見放しているで、即刻この世界から叩き出してくれたら、全てを置き去りにして脱出の手掛かりが得られるのに。あるいは、アタシに罰を与えするために、この世界に半永久的はんえいきゆうてきに留めようとしているのかもしれない。それならそれで良かったかもしれない。この世界の片隅かたすみで、罰を受けながらただ朽ち果はてるのを待つだけだった。

もう家に帰ろうと思つてふと視線を落とすと、真新しいスケッチブックが落ちていているのに気づいた。表紙や裏表紙には名前などは特に何も書かれていない。誰のだろうか。スケッチブックを開くと、生き生きとしたウマ娘達が描えがかれていた。速さを研ぎ澄すまし、ただひたすら前へ進むために全力を振り絞る姿、休憩時間きゆうけいじかんに和氣藹々わきあいあいとしている姿、これは結果が出なくて悔くやしがっている姿か。今にも飛び出してきて動きそうな秀逸しゅういつなスケッチにただただ圧倒された。

「あ、あの……！」

おどおどした声が聞こえたので顔を上げると、一人のウマ娘が立っていた。目が合った瞬間、彼女はびくつと震えたように見えた。

「そ、それ、あたしの……」

「おう、そこに落ちてたぞ。なくさねーようにな」

彼女にスケッチブックを渡した。ふと思いついて、足早に去ろうとする彼女の背中に声を掛けた。

「すげーいい絵描^かくんだな」

「見たの？」

「わりい、誰のか名前でも書いてあるかなって思って、つい」

「そう……」

「なあ、もし良かったらだけど、アタシも描いてくんねーかな」

「え？ あ、その……」

彼女は迷うそぶりを見せた。それもそうか、アタシは学園一の危険人物だしな。関わりが合いになりたくないのは当たり前だ。

「……いや、忘れてくれ。早いとこ帰った方がいい。アタシと一緒にいたつてろくなこと

にならねーから」

手で追い払うジェスチャーをしたけど、返ってきた言葉は意外なものだった。

「描いてもいいよ。いつなら空あいてる？ あたしは放課後なら大体大丈夫だけど」

「アタシはいつでも空あいてるよ」

「そう……じゃあ早速だけど、今日の放課後はどうかな？」

「いいぜ。グラウンドの土手のところで寝てるから、声かけてくれ」

「わかった」

彼女はぺこりと頭を下げて歩いて行った。……たぶん二度とアタシの前に現れることはないだろうなと思った。まわりの人間が必死になって止めるはずだ。せつかく久し振りに誰かと話せたけれども、これつきりになるだろう。寂さびしいがこれも自業自得じごうじとく。少し舞い上がってしまったけれど、アタシはもう永遠ひとに独りぼっちだと思つて生きるしかなかった。

それでも一縷いちるの望みを抱いだきつつ、グラウンドの土手のところに来てしまった。我われながら滑稽こっけいだったけど、少しくらい夢を見てもいいだろ？

放課後になつてしばらく経ち、グラウンドに三々五々トレーニングをするウマ娘達が集

まってきた。……もうこの時間なら来ることはないだろう。これ以上ここにいても惨めなだけだ。

起き上がって帰ろうとしたところで、背後から声を掛けられた。

「お待ちせ」

あのときの彼女がそこにいた。ちよつと急ぎ気味だったのか、肩で息をしていた。その姿を見た瞬間、思わず口にした。

「本当に来たのかよ」

アタシの言葉に、彼女は少しムツとした表情で返してきた。

「なんで来ないって思ったの？」

「アタシのことは知ってるだろ。誰も止めなかったのか？」

「あたし、友達いないから」

彼女の独白に、しばし言葉を失った。友達が、いない？

確かに、学園のウマ娘達には独りで活動する奴もいたりする。アドマイヤベガはその筆頭だった。どこか思いつめたような表情で、孤独に走り続ける光景をずっと見てきた。

ただ、目の前にいる彼女は、別に孤独が好きそうな感じでもなさそうだった。友達が欲

しいけどできない、そんな寂しさが表情に滲み出ていた。そんな彼女との出会いは、少し面倒な、何か漫画か小説のストーリーでよく見る展開に似ていた。これで彼女がお嬢様だったら王道のストーリーが完成してしまうな。

彼女を見つめること数秒、百年近くループしてきた中で、彼女によく似た子のことが思い浮かんだ。その子は、今までの世界ではアタシとの縁が特に深かったわけではなかった。目の前にいる子が、かつて会った子と一緒に存在なのか気になったので、他に何か特定する材料がないか、彼女が身につけていたアクセサリを眺めた。青緑色の耳飾り。それはかつてアタシと一緒に過ごしてきた別の子のアクセサリに似た色をしていた。

最後の確認として、ひとつ単刀直入な質問をした。

「そう言えば聞き忘れてたけど、名前なんてんだ？」

「——ベル」

名前としてはあり得るが、十中八九大事なところを省略していそうな返事だった。名前を聞いて、隠された部分を埋めるためのピースが今揃った。彼女は確かにあの子だ。でも名乗りをわざと変えたということは、本名を知られたくないのだろう。変につつくとお互いにとって悪い。知らぬ存ぜぬを貫くか。

「ベルちゃんか。アタシはゴールドシップ。まあ今日いっぱい覚えててくれると嬉しい」
「うん、よろしく」

どのポーズで描いてもらうかはあまり悩まなかった。今のアタシのいつものポーズ、ずつと寝そべって空を見てるだけのポーズを取った。横でベルちゃんが鉛筆を走らせて描く音がかすかに聞こえる。コースでトレーニングをする子達の声も交じる。

小一時間ほど経ち、少し眠りかけていたところに、ベルちゃんから声を掛けられた。

「できたよ」

「速かったな」

「まあ、うん」

見せてもらったスケッチは、アタシそのまんまだった。語彙力が足りなくて当たり前なことを言った感じになってしまったけど、雰囲気までもが写し取られているみたいに感じられた。

「どうだった？」

「最高だぜ。ちよつと写真で撮ってもいいか？」

「いいよ」

スマートフォンを取り出してスケッチを撮った。いいね、いつでも目に入るようにしたいくらいだ。

「ありがとな。アタシの突然の願いに付き合わせちゃまって」

「気にしないで。あたしも暇ひまだったから——しばらく何もすることがなくなっちゃったから」

それから少しだけ、ベルちゃんと世間話せけんばなしをした。

ベルちゃんはあるベテラントレーナーのもとでずっとトレーニングをしていたけど、先日そのトレーナーが倒れてしまい、トレーナー業を引退することになったらしい。聞いたことを総合すると、アタシが過去のループで出会った婆ばあさんトレーナーに違いなかった。何回かはその倒れた現場に居合わせたこともあったな。でも過去のループでは、婆さんが倒れてもサブトレーナーがいて、ベルちゃんの指導はそいつに引き継がれたはずなんだが。

「それで、新しいトレーナーを探さなきゃなんだけど、いろいろあって、見つかってない

んだ」

「トレーナーがついてた生徒なら、すぐに後釜あとがまに名乗りを上げるトレーナーがいてもおかしくはないんだがなあ」

「……あたし、男の人が苦手で、でも女性トレーナーつてとても少なくって」

「あー……」

思い出した。ベルちゃん男が苦手だったな。

「直前に脚あしを傷いためたのもあって、次のトレーナーが決まるまでは休養きゅうぎょうするように、つて先生から言われた」

「まあ、休養しろって言われてんなら休養するしかないだろうなあ。下手に自主トレやって怪我けがしたら目もあてられねえ」

「うん……でも、そろそろメイクデビューに出ないと間に合わないから」

メイクデビューへの出走しゅつそうを急ぐ理由、それはおそらく本格化の始まりのタイミングだろうと察しがついた。理想的には本格化が始まったあたりで身体づくりを仕上げて、トウインクル・シリーズを走るのがいい。でもそう上手うまく事が運ぶのは極めて稀まれだった。

全盛期ぜんせいきが重要なレースにうまく合わないだけならまだ良くて、トレーナーがつかなかった

り、今のベルちゃんみたいにトレーナーが途中で退任する（とちゅう）ようなことがあるとタイミングを逃し（のが）、まともに活躍（かつやく）できないまま終わることもしばしばある。

もつとも、トレーナー探しについてアタシが言えることや力を貸せることは無い。アタシが起こした事件以降、全ての（すべ）トレーナーがアタシを明確（めいさく）に避（さ）けていた。契約（けいやく）をアタシの方（かた）から無理（むり）やり解消（けいしょう）した元（もと）トレーナーは、アタシが学園（がくえん）を崩壊（くわくわい）させ始めて間（ま）もなく、実家（じけ）の事情（じけい）とやらで退職（たいしょく）していた。あいつは面倒見（めんどうみ）が良かった（よ）から、ベルちゃんを任せ（まか）すかったんだが。力を貸（か）せないとなると、もうあとは当たり障（さわ）りのないアドバイスしかできなかつた。

「まあ、トレーナー探しは一朝一夕（いちつちせき）にはできないからな、ひとまず今日は甘い（あまい）もんでも飲み食（のみ）いたらいいんじゃないか。続き（つづき）は明日（あした）考え（かんが）えたらいい。生徒育成（せいとくせい）支援課（しえんか）あたりから案内（あんい）来て（き）ただろ？」

「うん。明後日（あした）に第一回（だいいちかい）の面談（めんだん）がある」

「そこでいろいろ聞（き）いたらいい」

「ありがとう。じゃあ、また」

「じゃあな」

今度こそ今生こんじょうの別れ、多少は相談に乗ったことで徳とくが積めてたらいいけどな。がんばれよ、ベルちゃん。

何日か後の昼休みの時間。他の生徒に会わないよう敷地の隅すみつこで、にんじん畑のにんじんの葉の数を数えたり数えなかつたりしていたら、視界に曇くもった表情のベルちゃんの顔が映った。

「なんだ、ベルちゃん。また来たのか」

「うん……」

「アタシに近づくと永久えいきゆうに友達できねえぞ」

「うん……」

なんでアタシのところに来ようと思ったのかはよくわからなかった。そもそも畑を管理するおつちゃん以外は来そうにない、こんな隅すみつこにどうして足を運ぼうと思ったのか。まあ、前回から数日で友達がすぐにできるとは思わないし、輝かがやかしいまでの戦績せんせきを誇るべルちゃんの親戚しんせきのお歴々れきせきにも話せないとしたら、多少は話したことがある学園の鼻つまみ者のアタシを見つけて、道端みちばたの石ころ代がわりにしてもおかしくはない。ないが、アタシ

と親しくしているのを誰かに見られたら、いくら名家めいに連なるウマ娘つらといえども将来に影響えいきやうが出る。——いや、人のためなんて嘘うそをつくのはやめよう。単にアタシが面倒めんどうなことに巻き込まれたくないだけだ。

「まあ、いいさ。そんなしょぼくれた顔の奴を追い返したら逆にどこかから文句を言われるしな、アタシのことはたまに喋しゃべる地藏じぞうだと思つて何でも吐はいちまえ」

「ありがとう……」

しばらくすると、ベルちゃんがぼつりぼつりと話し始めた。

「一昨日おとといの面談で、育成支援の先生が新しいトレーナーを紹介してくれた。新人さんなんだけど腕は確かだ」

「良かったな」

「でも、男の人だった」

「まあ、ライセンス持ちの人数比からしてそうなるだろうな」

まだまだトレーナーライセンスを持つ人の大部分はヒトの男性で、ヒトの女性やウマ娘のトレーナーは少数派だ。

「どうだ、仲良くできそうか？」

「それが……『ごめんなさい無理です』って反射的に追い払っちゃって……あとであのトリーナーさんとなら一緒にやっついていけるかもって思ったんだけど、もう破談だよね……」
耳もぺたんとなつてしまいうくらいに落ちこんでいたベルちゃんに活を入れた。

「学園のトレーナー舐めんな、あいつら変態揃いだぞ。担当のためなら怪しい薬を叩つて七色に光るのも日常茶飯事、あるいは見えない世界の人ならざる者とも渡り合う豪胆さ持ち、担当のジェットストリームアタックすら軽くないなす超人、日々担当を模した着ぐるみを着て広報に精を出すぶつ飛び野郎。そこまで行かずとも思春期の女子、特にウマ娘の指導法や付き合い方を叩き込まれてるんだ、ベルちゃんのツンデレくらいかわいいもんだ」

「ツンデレ？」

ん？ ベルちゃんがいる界限なら三ミリ秒で通じると思ったが。あれか？ この世界のベルちゃんはあまり創作活動の方に親しんでいない？

「いや、こつちの話だ。とにかく、あつちはめげずにコミュニケーションを取ってくるはずだから、次にきちんと向かい合えばいい」

「そう……ありがとう。次は頑張ってみる」

「ところで、よくこんな辺鄙な場所まで来たな。畑仕事をするおつちゃん以外誰も来たこ

とがない場所なんだが」

「なんでかわかんないけど、この場所に惹かれたみたいな感じ」

「そうか。何にせよもうアタシには近づくな。選手として活躍し始めたら、いつ誰がこれをダシにして足を掬いに來るかもわからん」

トウインクル・シリーズを走るウマ娘は、アスリートであるとともにアイドル的存在でもある。後ろ暗いアタシのような奴との関わりが明るみになったら、それだけでも失脚させるための材料にされかねない。特にベルちゃんみたいな家の子なら、一族もろとも巻き込まれることもある。

「あなたしか話せる人がいないのに。……また来てもいい？」

「警告はしたぞ。次はここにいないかもしれない。探したければ勝手に探せ」

あつという間に懐かれてしまったみたいだ。さすがベルちゃんの本当の名前の通りだ。いや、でもあの種類とはちよつと違うか。チワワか？

なんでもいいが、ベルちゃんに悪評が立つことだけは避けないといけない。これからもうちよつとうまく隠れるか。

「じゃ、また明日」

「もう来んじやねえぞー」

最後にダメ押しで来ないよう言ったものの、まあ無駄だろう。それよりも、木陰こかげに隠れている保護者ほごしやさま様に多少は小言をくれてやらなきゃならん。

「その保護者さんよ、保護者ならきちんとアタシみたいな悪い虫から守ってやれよ」

「なあ——メジロライアン」

「やつぱり、バレてたんだね」

一人のウマ娘が苦笑くしやうしながら姿を見せた。

「まずは、ありがとう。ゴールドシップ」

「礼を言われるようなことをやった覚えはねえ」

「道を見失いかけてたドーベルの話聞いて、アドバイスをしてくれた。それだけで十分過ぎるくらいだよ。……あの子は、家族にも弱音よわねを吐かない」

「家族内のコミュニケーションを見直すべきだな」

「はは……耳が痛いや」

メジロライアンがさらに苦笑した。

「あいつにはアタシに近づかないようよく言つとけ。メジロ家のスキャンダルになるぞ」

「大丈夫だよ。もう外ではゴールドシップの一件の報道は無かったことになっている。学園の中は、あたしと家族みんなで何とかするさ。だから」

家族を、メジロドーベルを支えてやってください。そのように頭を下げられてしまった。

「めんどくせえ。アタシが支える代金がわりにドーベルを食っちまったらどうすんだよ」

ベルちゃんに対してそのような真似をする気は一切なく、何ならさして興味も無かったが、あえて露悪的な物言いをして、アタシを遠ざけるよう暗に促した。でも残念ながら効き目は無かった。

「ハハッ……本当に襲う人間はそういうことを言わないもんだよ。あと、ドーベルならたぶん大丈夫だって信じてる。いろいろな意味で」

「ケッ、さつさと帰んな」

ライアンの後ろ姿を見ながら、どうしたもんかと考えた。

一番いいのは、アタシがこのまま学園からバックレることだ。未来があるベルちゃんに余計な悪意を向けさせないためにはそれがいい。トレセンでタダ飯を食らい続けてきたが、そろそろ限界を感じていたところだ。区切りをつけて稼かせぎに出るべきだな。一応いつでも出ていけるように荷物をまとめていたが、いよいよ実行に移す時か。退学届は……長いこと持ったままだったが、日付を書いて出しに行こう。

一旦家に戻って退学届を引つ張り出して学園に舞い戻り、あまり人に会いたくなかったので、授業時間中を見計みはからって理事長室に押しかけ、理事長に直接押し付けた。

「じゃあな、世話になった」

「待ってくれ、ゴールドシップ」

あのちんちくりんはいつもの口調をどこかに忘れてきたらしく、とても深刻そうな声こゑで引き留めの言葉を発した。

「んだよ、厄やっかいもの介者が辞めてやるってんだから止める義理ぎりなんざねえだろ」

「ゴールドシップさん。少しお話を聞いていただけませんか」

横にいた緑の悪魔さえも、アタシを止めようとした。

「その必要はない。すぐに受理しろ。……いや、理事長が受理しなくても良い。はんこを捺して勝手に事務室に持つていく」

決裁印を奪おうとしたところで緑の悪魔に物凄い力で押しとどめられ、そのまま理事長室の外に連れ出された。扉が閉まる直前、理事長は静かに「この届は私が預かる」とだけ言った。

「どうしてそこまで辞めるのを止めるんだ？ もう走るわけにもいかないし、トレーナーや他のウマ娘関係の仕事をする気もないアタシはもう要らない人間だ」

「ゴールドシップさんには、是非ともしていただきたい仕事があるのです。どうか再考を」

「金輪際やらねえ。……アタシが何かやつても刺されるか殴り殺されるのがオチだ」

「この学園を巡っているいろいろ起きたことは事実です。しかしそれはゴールドシップさんの責任ではありません。……トレセン学園は、いつでも貴方を待っています」

「気が向いたら戻ってやるよ」

そう言つて、学園一の世話焼き理事長秘書の手を振りほどき、帰宅して家を引き払う最後の準備をした。

翌日早朝、朝日を受けたトレセン学園の校舎を最後にひとしきり眺めた。当分、いや、アタシが次の世界に飛ばされるまで永遠に帰ってくることはないだろう。いろいろあつたが世話になった。

「じゃあな。次のループになったら戻ってきてやるよ」

踵を返した時、目の前にパジャマ姿のウマ娘が立っていた。

「——待つてよ」

「……なんでベルちゃんがここにいんだよ」

「寮の窓から、見えたから……」

髪はボサボサに乱れ、足元も寮の玄関から適当にパクってきたようなサンダル履きという、お嬢様どころかレディにあるまじき姿だった。彼女の目についてのか涙が浮かび、ポロポロと零れ出していた。

「すまんが、電車の時間があるんだ。じゃあな」

アタシがベルちゃんを避けるように歩を進めたところ、服の裾を掴まれた。しゃくり上げる声も耳に届いた。

「行かないで……あなたがいなくなったら、また独りぼっちになっちゃう」
両親や、ライアンをはじめ一族の連中がいるのに独りぼっちとは大袈裟じゃないかと思つたが、そんな突つ込みさえ許されないような泣き方をされては宥めることも無理だった。

「……せめて着替えてこい。さすがにその姿で置き去りにしたらアタシの一生の悔いになる」

アタシの言葉に、ベルちゃんは首を振つた。

「あたしが寮に戻っている隙に逃げる気でしょ……」

「逃げねえよ。だから安心しな」

それでもなお彼女は渋っていたが、なんとか説得して寮に送り返した。

実を言うと、彼女の言う通り本当にこの隙に逃げようと思っていたが、なぜか足が動かなくなつてしまっていた。全部捨てたはずなのに未練が残っていて、それが今まさに現れたのだと悟つた。

……ああ、ちよつと踏ん切りがつかなくなってきたな……

着替えてきたベルちゃんを連れて、近所のファミレスに入った。こんな早朝じゃお洒落しゃれなカフェなんて開いているわけがない。もちろんコンビニの前に屯たむろするのも却下。

「ごゆつくりなのー」

ホール係はアイネスフウジンだった。アタシに対して態度を変えことなく接してくれる数少ないウマ娘だ。ベルちゃんを連れているのを見て一瞬驚いた後ニヤリと笑い、さらに意味深いみじんな目配めくばせをしてきた。なんもねえよ。

「ねえ、どこ行くの」

上目遣うわめづかいで、さらにか細い声で尋ねられ、思わず罪悪感ざいあくかんに駆かられてしまった。別に悪いことをしようとしているわけでもないし、ベルちゃんとはいろいろ話したとはいえ、ただか数日の立ち話程度の仲。でもなぜか、長年交際していたカップルの別れ話の場面並みに重苦しい雰囲気になつていた。

「ちよつと自分の力で稼かせぎたくなつてな、北海道で働くことにした」

これは半分本当で半分嘘。初手で北海道には行くものの、それからは転々として生きるつもりだった。その言葉に対するベルちゃんの返答は本日二度目の涙だった。

「やだ、置いてかないで」

懐かれているどころか本当に別れ話のワンシーンみたいになってしまつてるじゃねーか。いやどうする。どうすると言つても困る。とにかく、ベルちゃんに悪い噂うわさが立つ前に離れなければならぬ。ベルちゃんとアタシのこの光景を最初に見ることになつたであらうアイネスフウジンは口が堅かたいものの、いつどこで別の学園生徒が見ているかもわからない。ここはとにかく心を鬼にしないと。

「いや、もう決めてるからな」

「じゃあ一緒に行く」

とにかくそつげなく返したのに、それに対する返事があまりにも突とつ飛び過ぎて、一瞬思考がフリーズしてしまつた。ベルちゃんのこの態度はさすがに何かヘンじゃないか？酒を飲んでいることは方に一つもありえないが、頭がロクに働いていないことは明らかだつた。

「ちよつと落ち着こうな。たぶん睡眠すいみんと糖分とうぶんが足りてない。すみません、チーズケーキセットを二つ、ホットコーヒーで」

「はいなのー」

ほかに客がいなかつたせいとか、数分ほどであからさまにニヤニヤした顔のアイネスフウ

ジンがチーズケーキセットを運んできた。チーズケーキを食べ、コーヒーを一口飲んだべ
ルちゃんの目がトロンとした状態から覚醒し、すぐに顔を真っ赤にして俯いてしまった。

「もう生きてけない……消えちゃいたい……」

「突然穏やかじゃないな。消える前に北海道に行くべきだ」

「おすすめの逝き方つてある……?」

「北海道への行き方の王道は飛行機だが、函館までは新幹線でも行ける。フェリーも
ある」

「ごめん……そつちじゃなくて……あの世への……」

「察したからせつかく話を逸らして流そうとしたんだがな。ゴルシ流処世術だが、こう
いう時は自分を消す方じゃなくて相手の記憶を吹っ飛ばす方針で行け。ウマ娘パワーなら
素手でやれるぞ」

「そうなんだ……」

「そこでアタシを据わった目で睨まないでくれ。できれば物理的ツツコミじゃなくて、関
西流ツツコミが欲しい」

「思いの外ボケボケなベルちゃんを相手にしていると、なんかこのまま置いていくのが危

なつかしくて、ますます決心が揺らいでしまう。捨て犬を拾ったら責任を持つて飼えという、あの感じ。自分と歳が近そうなウマ娘をワンちゃん扱いするのは良くないが。

「いつ帰ってくるの」

「本当は三年後と言いたいところだったが、たった今気が変わった。半月出掛けってくる。ゴルシウィーク明けには戻ってくる」

「ゴルシウィークって、何それ……フフツ」

「全国各地のお客様に北海道から産地直送のお礼をばらまくウィークだ、覚えておくといい」

無事ベルちゃんに笑顔が戻った。結局ここを引き払うことはできず、また戻ってくることになってしまったが、それでもいいやと思う気持ちが生まれた。

「産地直送のお仕事？ なんだかよくわからないけど、頑張ってるね」

「おう！ 土産を大量に持って帰ってくるから、リヤカーを用意しとけ」

「わかった。リムジ……ううん、何でもなし。運べるようちゃんと準備しとく」

何を言いかけたかは察しがついたが、詮索せず流す。アタシはベルちゃんがお嬢様であることを知らない。ベルちゃんはただの後輩でしかない。そういうことになっている。

会計の時もなぜかアイネスフウジンがレジの前に立ち、「ごちそうさまなのー」とアタシだけに聞こえるように言ってきた。だから何もねえって。

初っ端はじめばなからグダグダになってしまったが、ベルちゃんに見送られて出発して、電車とフェリーを乗り継いで北海道へ到着した。

北海道ではスペ——スペシャルウィークの実家の世話になった。スペのお母ちゃんに約二年ぶりに会い、日頃ひごろの不義理ふぎりを詫わびた。スペのお母ちゃんとはちよつとしたこと出会ったのがきっかけで交流が生まれ、思えばアタシが学園を壊し始めた時、スペがアタシに何かを尋ねてくるよりも先に、どこからか聞きつけてきたのか、何かやってないかとメッセージを送ってきたのがスペのお母ちゃんだった。当時はいろいろはぐらかし、学園やURAも問題をもみ消して回っていたことからそれ以上追及ついきやうされなかつたが、はじめをつける時が来た。

近況きんきやうを聞かれた時に、今までの悪事をすべてを洗いざらい話した。スペのお母ちゃんはずつと黙だまって聞いてくれ、アタシが話し終わつた後に頭に鉄拳てつけんを一発落とした。そして抱きしめてくれた。アタシは幼い子どものように大泣きした。長く孤独こどくだった人生に、久

しぶりに温かい手が差し伸べられた気がして、とてもありがたかった。

翌日から、スぺの家で仕事の手伝いをしつつ、特産品をいろいろ手配して全国各地の知り合いに送りまくった。金を使い切った後はバイトをして貯め直した。帰りに苦小牧港からフェリーに乗る前に、苦小牧の街を巡ってホッキ貝とハスカップを買い込んだ。ついでにその宣伝をしていたロコドルのウマ娘に、トウインクル・シリーズに出て走るともつと苦小牧を有名にできると吹き込んでおいた。確か、彼女の名前はホッコータルマエつと言ったか。

フェリーの旅を終えて大洗港おおあらいこうに着くと、ターミナル待合室にベルちゃんの姿があった。確かにフェリーでこの時間に着くとはメッセージを送ってたが、本当に来るとは思わねえだろ。

「久し振りだね」

「お、おお、まさかここまで来てくれるとは思わなかった。どうやって来たんだ？」

「電車を乗り継いで来た」

自慢気じまんげな顔で胸を張って答えたが、本当にお嬢様にここまで公共交通機関を乗り継いで来るだけの力があるのか？ 嘘つけと思つてターミナル周辺を見渡したものの、メジロ家

のリムジンの姿はなかった。さらに、アタシが信じていないことを見透かされたのか、むつすーとした顔をしながら見せてくれた財布の中身の惨状から、本人が言い張ったことは事実だったと証明された。ベルちゃんは意外にも電車で使えるICカードも持っていたが、念のため残高を確認すると見事に中身がすつからかんだ。カード残高ゼロに現金もからつぽ。大洗からどうやって帰る気だったんだ。お嬢様のプラチナカードパワーで大洗から府中までタクシーか？

このまま放置したら、ベルちゃんは間違いなく路頭に迷う上に、メジロ家から刺客が差し向けられかねない。尻尾をぶんぶん振るわんこは連れ帰らねば。

帰りの電車の中でぼつぼつと話していたものの、いつの間にか静かになった。

「なあ、アタシとすれ違って大洗で取り残されたらどうやって帰ってくる気だったんだ」

「……すー……」

寝てた。慣れない電車での遠征で疲れたんだろうな。しばらく肩を貸してやりたいが、あいにく府中までには何回か乗り換えがある。乗り換え駅に着くたびに起こして無事帰還した。

数日後、メジロ家からと書かれた菓子折が届いた。かなり高級そうで、しかも重く、お

菓子が入っている層の下に上げ底でまだ何かある感じだった。謎の取っ掛かりから底が開き、厚めの封筒が現れた。中身は案の定、著名な人物の肖像画しょうざうがが描かれた手頃なサイズのアレで、明らかにその量がベルちゃんベルちゃんの交通費分より多すぎたためライアンライアン経由で返そうとした。しかし受け取りを断られたため、ベルちゃんベルちゃんに後日還元かんげんすることにした。

その後、理事長とたづなつちのところへ行つて詫わびを入れた。両方ともとてもニコニコした顔で許してくれた。やっぱり敵かなわねえな。アタシはバカみたいに突つ走つただのバカだった。

それから、相変わらず授業に出ずブラブラしていた。ベルちゃんとはより仲良くつるむようになつた——わけではなかった。いくらメジロ家の力とて、アタシが一年かけて学園を壊し、学園中にばらまいた多くの生徒たちの恨うらみみつらみは一朝一夕いちじついつせきに消えるはずもなく、アタシに執しゆ着ちやくするごく一部のウマ娘ウマ娘がベルちゃんベルちゃんを快こころよく思わないことは十分に考えられた。そのため、できるだけ会わないよう頭をひねりにひねつて学園内を逃げ回つた。でも四回に一回は発見された。

「いた」

「つたく、どうやって見つけたんだよ。アタシが考え抜いた一級品の隠れ場所だったのによー」

「乙女の勘？」

嘘つけ。絶対メジロのSPが入れ知恵してらあ。アタシとベルちゃんを会わせたい時に正確な居場所を教えているに違いない。視界の端、百メートル向こうに隠れている黒服の背が高いウマ娘がサムズアップした。余計なことすんな。

「はあ……で、今日はトレーナーと仲良くやれたか？」

「うん。今日は全体的に見てもらって、体調やフォームが万全に整っているって褒められた。これなら週末のメイクデビューで十分力を発揮できるだろうって」

「よかったな。新潟で走るんだったか」

「うん。明日の新幹線で行く」

「頑張れよ」

「……見に来てくれないの？」

「いや遠いし」

そう答えた瞬間、ベルちゃんがみるみるうちにシユンとなった。耳も尻尾も力なく垂れ

下がり、泣きそうになっている。ちよつとこれはまずい。

「あー、その、ちよつと恥ずかしくて秘密にしてただけだし、アタシURAのレース場まだ出禁でまけんになつてんだよ」

「どうして？」

「アタシを恨うらんでいる奴はまだ多い。一般人やテレビ中継が入るレース場で不測の事態が起きるのはまずいんだと」

「そっか……」

「だからテレビの前で応援しといてやる」

「ありがとう」

そして、ベルちゃんにひとつ重要なことを問わないといけない。別に問う必要は無いかもしれないが、彼女がアタシに対して名前を隠ひそしていることを思い出させる必要がある。名前はレースの前、パドックに出る時に否応いやおうなく明らかになる。レース前に気づいて動揺どうようするより、今のうちに自覚させておいた方がいいと思つた。

「それで、だ。アタシは一体誰を応援したらいい？ 土日の新潟レース場メイクデビュー

戦の出走リストに『ベル』って名前が入る子は三人いた」

「そんなの——あつ」

ベルちゃんがはつと気づき、顔を赤くしたり青くしたり、急にあたふたとし始めた。そう、彼女はアタシに対して『ベル』としか名乗らないまま三か月経ち、ここまで来た。この問いに動揺しているあたり、本人はすっかり隠していることを忘れていて、しかもこの先もまだ隠すつもりだったのだろう。もちろんテレビにベルちゃんの姿が映れば本当の名前がバレるし、GⅢよりも上の重賞レースならもう隠せない。もしかだしばらく隠していたかったら、そもそもどこで走るかすら言っではいけないかった。

長い沈黙の後、彼女は観念したように口を開いた。

「……メジロ、ドーベルです」

「メジロドーベルか。さすがメジロのお嬢様らしい、いい名前だな」

「驚かないの？」

「知ってるかベルちゃん、驚きが極限に達すると逆に反応が鈍くなるらしいぞ」

口から出まかせを言っつて、さもたつた今知つたかのように装つた。

「そつか……今まで隠しててごめん」

「まあ、誰にだつてあまり話したくないことはあるもんさ」

「これからも仲良くしてくれる？」

「正直超のつくお嬢様とのお付き合いは超怖いけど、嫌だつつつて逃げてでもベルちゃんの
ことだから探し当てに来そうだしな」

「重い女みたいじゃない。でもそうするかも」

「お手柔らかに頼むぜ」

ベルちゃんの頭を撫でて、送り出した。

週末土曜日、新潟レース場メイクデビュー戦。芝1000m。アタシは朝からテレビを眺め
つつ、このレースを待っていた。

『ゲート番号四番、メジロドーベル。四番人気です』

『良い雰囲気です。好走が期待できます』

「あいつならやれる……!」

テレビから流れる実況と解説の声に対する返事が、無意識のうちに漏れていた。

全員の準備が整い、スタート。URATウインクル・シリーズで施行される最短距離、

1000m のレースは一分かからずに決着する。良い位置につけたベルちゃん最後の直線で他の子達を離し、見事出走初勝利を果たした。夕方から行われるウイニングライブも見事堂々とした姿で歌い、舞い、やり切っていた。出禁になっていなかったら是非とも現地で観たかった。

月曜日。にんじん畑でかかしの役目を果たしていたら、ベルちゃんがとことこと歩み寄ってきた。

「いた」

「よう。メイクデビューで初勝利だな。おめでとう」

「ありがとう」

尻尾がぶんぶん振っていて、本当にわんこみたいになっている。

「今はしっかり休め」

「うん」

「まだ先の話だけどき、クラシック級の方向性はどんな感じにするんだ」

「うん……トレーナーと話をしたんだけど、ティアアラ路線に向かおうかな、って」

「おう、いいな。オークスは今よりも距離がかなり長くなるから、ぼちぼち中距離走破の力をつけてけ」

「そうするつもり」

別れ際にベルちゃんが少し見せた微笑みに思わずどきつとした。いやいや、相手は年下年下、しかもお嬢様。たとえアタシが男だとしても、こんなロクデナシが近づいていいよ。うなお方じゃねえ。在学中はそれとなく交流して、徐々にフェードアウトするのが最善策だ。アタシの本来の目的だったループ脱出が失敗してしまっている以上、どうせ近々別のループに弾き飛ばされる。あまり関わり合いになるべきではないかもしれない。

でも、この世界のベルちゃんといずれ遠く別れることになるのを、残念だと思いう気持ちがあることに気づいてしまった。体感的には百二十年を生きてきて、それだけ精神が成熟……でもないな、老化してしまっていたから、この気持ちは何であるかはすぐに悟った。物語の朴念仁な主人公のふりをするには歳を取り過ぎた。

ベルちゃんに、恋をしてしまったのかもしれない。

それは、決して叶うことのない恋。あるいは一時的に叶えられても、必ず引き裂かれる

ことになる恋。恋をするだけ無駄かもしれない。
でも、止めるのは無理そうだった。

「あー……人生うまくいかないもんだなー……」

第二章 駆け出しのお姫様

時は下つて七月、まさに夏まっさかり。アタシの学年は合宿がっしゆくに参加するやつがほとんどだが、行っても焼きそばを売るくらいしかやることがないので引き続き学園にいた。いや、焼きそばを売りに行ったら逆にアタシの方が鉄板てつばんに載のせられてジューシーな感じに焼き上げられかねない。

合宿期間明けに開催かいさいされるベルちゃんベルちゃんの次のレースは、いつもなら新潟にいがたで開かれるところ、レース場工事による開催場所変更の連鎖れんさで、今年は中山レース場で開かれることになっていた。八月三十一日をもつてアタシの出禁処分は解かれるので、そのレースは一応見に行くことはできる。たづなつちからはもし行くならVIP用指定席を割り当てる、セキリティは万全ばんぜんだが、念のため変装へんさうして行つてくれ、なんなら防弾ぼうだん・防刃ぼうじんチョッキも用

意すると言われた。さすがにそこまではいらなだろうと思つたものの、マジトーンで言われたので、アタシの存在がバレたらマジで血祭りコースなのかもしれないなかつた。

さしあたり、こう暑いとプールで潜水修行をしたくなるが、学園のプールに行くのははばかられるし、あまり行く気もない。市民プールでくらげごっこでもするか。

「暇ひまそうあつで暑あつそうな顔してる。うちくる？」

「いきなり出てきて何を言ってますのベルちゃん」

メジロ家の一員であると明かしてから、ベルちゃんはわりとナチュラルに家に誘さそいに来ようになつていた。超大きな本邸ほんていほどではないにせよ、ベルちゃんも結構立派たつぱだというのは以前調べて知つている。

「うちならほら、涼すずしいし」

「涼しさだけ求めるなら富士山のとつぺんにでも行つてくらあ」

「じゃあ富士山行く？ 一緒に行こ？」

「行くならマンハッタンカフェに山登りの稽古けいこをつけてもらえ。いきなりは無理だ」

「そう……」

不服そうな顔をしてベルちゃんが隣に座つてきた。

セミすらも鳴くのを諦めるような酷暑、さすがに日陰でも暑すぎる。ゴルシの姿煮ができてしまう前に家に帰るか。

「じゃ、アタシは帰るわ。熱中症で倒れないようにしろよ」

「うん」

さて何すつかな、変な都市を作り上げるか、気合入れて塗りまくるか、一人ランプの新ゲームを開発するか。……後ろをトコトコとついてくる謎のウマ娘Bのことは気にしない気にしない……

「ただいまー」

「お邪魔します」

「後ろについてきてたのを知りつつ、ツツコミ入れるのを我慢した結末がこれか……」

礼儀正しければ勝手に入ってきてもいいわけじゃねえぞ。追い出してやろうかと思ったが、その瞬間SPに急襲されそうなのでやめた。

「お土産はもうすぐ宅配便で届くから」

「どうやって住所をつかんだかは聞かないが、ちゃんと正規ルートでアタシに直接聞け」

そう待たずに高級そうなアイスクリームのセットが届いた。スチロールの箱入りでドラ

アイスを使つて冷やされたアイスが十個くらい入つていた。二個をテーブルに置き、残りは冷凍庫に入れ、さつそくベルちゃんと一緒に食べた。

その味は、アタシのバカ舌とバカ頭じゃ「超絶うめえ」という表現しかできないのが悔しくなるくらいだった。

アイスを味わつた後、お茶を飲んで一息入れ、何をするか尋ねた。

「あたしはここでぼーつとしててもいいんだけど」

「じゃあぼーつとするか」

二人並んで座つているうちに、いつの間にか寝てしまつていたらしい。気づくと一時間ほど経つていた。左肩の方にはベルちゃんもたれ掛かつてすやすやと寝ている。髪からいい匂いがする。一匹狼いっぴきおおかみ気取つてなんとかこの世界をやり過ごそうとしてたけど、かわいいベルちゃんともう少し一緒にいるのも悪かねえな。

「かわいい子との夏の過ごし方、ねえ」

学園の生徒を墮おとして回つていた時の夏、多くの子から夏の遊びに誘われたのを思い出した。水族館デート、プールでのデート、海でのデート、毎日別の子と遊びに行っていた。髪や水着が乾く暇がないくらい、というと少々言い過ぎかもしれないが、遣り場のな

い衝動しよどうを発散はつさんさせるためだけにあんなことをやっていたのは異常だった。もしベルちゃんどこかに行くなら、できれば昔のことを思い出さないようなことをしたかった。

「となると、プールや海は除外か。……でもかわいいベルちゃんのかわいい水着は見てみたいしな……」

下心したうしん丸出しのことをつぶやいたけど、なんかベルちゃんのことをそういう目で見ちゃいけない気がした。

もう少し寝ようと身体からだを動かしたとき、ベルちゃんがピクリと動いた。自然な寝息も消え、顔が赤くなっているのが見えた。

「起きてたか」

「寝てた。さつきまで」

「かわいいのは本当だぜ？」

「殺し文句はするい……」

いかなな。初恋の中高生みたいな雰囲気になっちまった。色恋沙汰いろこいざたはなんもわかんねー。仕切り直しの仕方がわからないまま、しばらくそのまま座っていた。

「かわいい水着、買つとかないとね……」

ベルちゃんのつぶやきは聞こえなかったふりをした。

結局、この夏はアタシの安全確保と、ベルちゃんが騒ぎに巻き込まれないようにすることを優先したため、どこかに出かけることはなく、水着姿を拜むこともなかった。

夏休みシーズンがあつという間に過ぎた九月一日昼過ぎ、中山レース場前。ベルちゃんはまだ選手控室せんしゅひかえしつに行っているはずだった。アタシもそろそろ入場ゲートはものをくぐって観客席かんきやくせきに行こうと思つたが、そうもいかないようだった。——右後方、刃物はものを持った怪しい人物がいる。あの感じはウマ娘だった。その人物を群集ぐんしゅうから引き離すように人気ひとけのないところへ徐々に移動する。そろそろ仕掛けてくるか……？

「——ッ！ うわああああああッ！ ツ！ ゴフッ！」

襲撃犯しゅうげきはんは、アタシのところにとどり着く前に黒スーツのウマ娘達に取り押さえられていた。その中の一人がこちらに駆けてくる。

「ゴールドシップ様。お怪我は？」

「何ともない。ありがとな……ライアンの指示か？」

「はっ、ドーベル様の大切な御方おかたを護まもってほしい、と」

腕を切られるくらいは覚悟かくごしていたけど、メジロのSPのおかげで助かった。レース場から離れるべきか迷ったが、SPの勧めすすもあり、学園が手配した警護けいご万全ばんぜんなVIP席に行くことにした。SPにはくれぐれもベルちゃんの耳に襲撃しゅうげき未遂みすいの件を入れることのないよう頼んだ。

コースからはるか遠く離れた高さにある、レース場の上層階観覧席から見下ろしつつ昨年の自分の愚行ぐこうを呪のろった。余計なことをしなければ、今頃もつと近いところで気楽にレースを観て、応援できたのにな。

しばらく経たった頃、スマートフォンに着信があった。

『……もしもし』

「おうベルちゃん、飯食ったか？」

『少しだけ』

「食べたならよし」

『うん……あたし、走れるかな』

「大丈夫だ。アタシとトレーナーと、今までの自分を信じろ」

『うん、ありがとう。……行ってくる』

もうすぐベルちゃんのレースの入場と選手紹介がある。G III・新潟ジュニアステークス、早くに本格化した選手達がしのぎを削るため、勝つのはなかなか難しい。通常の新潟レース場開催なら、メイクデビューで走った分、会場への慣れが活かされたかもしれないが、ここは初めて走る中山レース場。さてどうなるか。

『五番、メジロドーベル。三番人気です』

『力強さを感じます』

パドックに立つベルちゃんの表情が少しこわばっている。雰囲気のに吞のまれているかもしれない。ゲートへ向かう足取りもぎこちない感じがした。

全員がゲート入りして間もなくスタート。途中までは良いところを走っていたものの、他の選手との関係で最後のコース取りがうまくいかなかったものもあり、五着だった。メイクデビュー後そう置かずいきなりG IIIで入にゅうちやく着したのだから、十分過ぎるほどの力を示したと言ってもいい。そのことはトレーナーも言うだろうし、次頑張ろうと後で会ったときげんぱいに激励するか。

帰りは襲撃されることもなく、スムーズに府中まで帰り着いた。ちょっと買い物をして家に行くと、案の定ドアの近くに誰かが座っているのが見えた。早速お嬢様と出会える

とは。

「よ、お疲れ。ちょうどシュークリーム買ってきたんだ。中入れよ」

「うん……」

疲れたような表情の中に少し悔しさをにじませたベルちゃんを家に招き入れた。

もくもくとシュークリームを食べるベルちゃんは小動物っぽさがある。エネルギーがゼ口から二くらいになったところを見計らって声を掛けた。

「GⅢでの入着おめでとう」

「ありがとう……でも」

「二戦目でGⅢに出て入着だから大したもんだ」

「トレーナーもそう言ってくれた」

「ま、次は行けるさ。バカみたいに突き進むのが新人の特権だ」

「なにそれ」

ベルちゃんがクスリと笑った。ちよつとは元気を取り戻せたみたいだ。寮りょうはすぐ近くだけど、もう日が暮れかかっていたので送って行った。

それから相変わらず、週に一、二回は会って——というか隠れているのを発見されては話すなどしていた。SPにこつそり話を聞くと、最近は独力で発見しているらしい。こわいな。SPいわく、友達も多少はでき始めたらしい。

近頃の戦績はとてもすごく、なんと三連勝した。そのうち直近の一勝はGI・阪神ジュベナイルフイリーズだった。いやあ、早速GIを勝っちまったんだなベルちゃん、すげえ。この時はたこ焼き作りの修行がてら一か月大阪にいて、その瞬間を現地で見届けた。メジロ家御一行様とはかなり離れた場所で隠れるようにして見てたけど、ベルちゃんは目ざとく見つけて手を振ってくれた。

「ようゴルシ、アツアツやな！」

突然隣に現れたのはタマモクロス大^{だい}師^し匠^{しょう}だった。背中をビシバシ叩いてくる。

「なんかうまそうなもの持つとるやないか」

「アタシとベルちゃんのアツアツパワーでホカホカのたこ焼きつす！」

「いやそれ保温パックのおかげやないかい！ たしかうちに転がったなそのパック！」

そう、この一か月の修行先は大師匠の家だった。学園内での居場所を無くして彷徨^{さまよ}っ

て、腹を空かせて倒れそうになつていた時、飴玉あめだまをくれたのをきつかけに仲良くなつた。今回、大阪の方へ貧乏旅行びんぼうりょこうに出ると話した時に、実家に滞在たいざいするよう提案してくれた。最初はそれは恐れ多いと断つたけど、大師匠が目の前で電話したと思つたら「すまん！ たつた今お母ちゃんおははちゃんが全身筋肉痛きんにくつう頭痛づうず腹痛ふくせつ関節痛くわんせつ坐骨神経痛ざこつしんけいづう目の痛み鼻の痛み爪先の痛みかかとの痛みでひっくり返つてしても、このままじゃ仕事も家事もようできひん。……頼まれてくれんか？」

そこまで言つてくれたのに断つては女がすたる、荷物をまとめて翌朝すぐに大師匠の実家に駆けつけた。もちろん大師匠のお母ちゃんはピンピンしていて、ちみっこ達も元気一杯だつた。ただ居候いせうかうするだけでは申し訳ないと、修行を兼ねてたこ焼き作りを身につけ、ちみっこ達と近所のおちちゃんおばちゃんに免許皆伝めんきょさいでんをもらい、名誉看板娘めいよかんばんむすめとして認められた。いや店ちやうねんけど。

「この後どうする？」

「大師匠の家で明日までお世話になつて、それから走つて帰ります」

「アスファルト 511,000m、一人立てでレース不成立やな」

「途中で飽きたら新幹線で帰るつす」

「そうか……寂^{さみ}しなるなあ」

二人でしみりしていると、メッセージが入った。

『いろいろな話をつけて集まりを抜け出せるようになったから、この後会えないかな？』

「お、愛^{いと}しの嬢ちゃんからのメッセージか？ 顔がニマニマしてるで」

「ノーコメントで」

すぐに打ち返した。

『大丈夫』

『良かった。今夜は泊まるの？』

『タマモ大師匠の家に明日まで世話になる』

『お邪魔してもいいかな。ご迷惑でなければだけど』

「大師匠、ベルちゃんが大師匠んちに来たいって言ってますが、いいつすか？」

「ええよ。お母ちゃんにご飯百人前用意せい言うとかわ」

「あざつす」

「ねえねお帰りー！ あとゴルシ！」

「なんかさつきゴルシに会いに来たきれいなねーちゃん上げといた！」

「来ちゃった。直接会うのは久しぶり」

「おう。元氣そうで何よりだ」

ベルちゃんと久々の直接対面だった。もつとも、三日に一回はカメラつけてビデオ通話
はしてたんだが。

「なあなあ、このねーちゃん、今日おやつの時間にあつとつたレースで観た気すんねん
けど」

「おう、よく似てんだろ？ 名前だつてそっくりなんだ。レースに出てた超有名人はメジ
ロドーベルつて言うんだが、この子はベルつて言うんだぜ」

「へえーつ、なあベルねーちゃん、明日の商店街のそっくりさんコンテストに出えへん？
優勝間違いなしや！」

「だろ？ ソックリ度564%だから絶対勝てる！」

「あ、あの、あたしは本物——むぐつ」

大師匠がベルちゃんの口を押さえ、耳打ちした。

「ベルちゃん、ここはそっくりさんつてことにしとき。チビたちが本物のベルちゃんがい

るって言いふらしたらえらいことなるで」

「……それもそうですね」

しばらくすると大師匠のお母ちゃんが帰還した。

「ただいまっ。百万人前運んできたで！」

「おおきに、これでオグリが一人押しかけても大丈夫やし、向こう千年困らんわ……つてそないな量どこに置くんや！　うちが頼んだ量の一万倍買ってきおつて！　冷蔵庫も千台買わなあかんなる！」

「冷蔵庫はその電器屋から明日届くで」

お母ちゃんと大師匠の漫才まんざいを真まに受けたのか、ベルちゃんがしきりにアタシの袖そでを引く。

「食材百万人前と冷蔵庫千台つておうちに入るかな……？」

「ご覧ベルちゃん、あれが一流の漫才つてやつだよ。ちゃんと人数分だから安心してなつて」

追加でポケるとベルちゃんが目を回しそうだったので、早めに本当のことを言っておいた。

「あら、そちらがゴルシちゃんの彼女さん？」

「か、彼女……」

「おう、前世ぜんせいから来世らいせいまで一緒にいると約束した、最上級の彼女だけ」

「そうなの!？」

「かのじよ!？」

ちみつこ達が目を輝かがやかせる一方で、ベルちゃんは顔を赤くして俯うつむいてしまった。悪い、ついノッてしまった。でも、まあ、少し、ほんのちよつぴりだけ？ 本心があつたりなかつたりなかつたりあつたり？

夕食はアタシの一か月にわたる大阪居候の締めくくりということもあつて、とても豪華な鍋になった。こんなに食い切れるのかと思つたけど、ちみつこ達が「万歳」人前と半分ずつ食べてくれたので、アタシ、ベルちゃん、大師匠、お母ちゃん、各一人前ずつ食べてきれいに片付き、満腹まんぷくになった。お父ちゃんの一人前は横に分けてラップをかけておいした。大師匠のお父ちゃん今日も仕事で遅いみたいだった。

「タマ、彼女さんの布団ふとんと毛布もうふ用意して！ 彼女さん先にお風呂入っちゃつて！ 狭せまくて申し訳ないけど!？」

「いやベルちゃんは——」

「はい、一晚お世話になります」

へ？ お嬢様どこに寝かすんで？ ちみつこ達と大工匠とアタシが寝てる部屋にさらに一人押し込んで雑魚寝するしかないんだが。いや待てそもそもいつそんな話がついたんだ？

「悪いなゴルシ！ ベルちゃんがうち来る言うた時に、泊まる方向で手配してくれってお母ちゃんに言うといたんや」

「そうっすか。ところでベルちゃん、もともとホテルとか手配してあつたんじゃないのか？」

「夕ご飯の前に、ライアンに今日はこちらのお世話になるって伝えておいた」

「ドヤ顔すんな。それでいいのかよお宅の一家は……」

滅茶苦茶だが、家主と親族がいいと言っているのにアタシが追い出すわけにもいかない。お嬢様に下々の暮らしを体験してもらおうか。

カポーン、という温泉旅館や銭湯のシーンにありがちな謎の効果音が背景に出ているか

もしれないこの状況。何の因果かベルちゃん二人、同時にお風呂場にいた。

「なんでや！」

「どうしたの、突然叫んで」

「あ、いや……」

原因は明らかだった。大師匠が突然「すまん！ いろいろと用事思い出してさつさとチビたち寝かしつけないあかん！ さつさと風呂入れなアカンから、ゴルシとベルちゃんまとめて入ってくれんか？」と言い出し、半ば強引に蹴り込まれた。洗い場も浴槽も小さいので、交互に使わなければならない。ベルちゃんはわりと自然にお風呂に入っていたけど、アタシは何だ、その、こう、妙にドキドキしまつて、ベルちゃんの方をまともに見ることができない。

「いいおうちだね。タマモ先輩のところ。ワイワイ賑やかな家って、うちと対極っぽいから」

「なんだ、ベルちゃんちはキンキン冷蔵庫か？」

「ううん、そういうわけじゃなくて。両親とあたし、家族みんな仲はいいんだけどさ、両親がどちらも仕事が忙しくて、小学生のころはちょっと寂しかった。トレセン学園に来て

からはあたしの方が寮生活だし、実家に帰るのも月に一回くらいになったから、あまり交流ができてないというか」

「そっか」

「あなたのおうちはどうだったの？」

「国家機密だ！ というと秘密主義が過ぎるな。実はこう見えてやんごとなき家のお嬢様なんだぜ？ もう堅苦しいのなんの。親兄弟も何もない、部屋も独り、外でも独り、嫌気が差して全部他の連中に押しつけて逃げてきた」

「独りぼっちなんだ……」

「冗談冗談。親父は日々最高のネジを研究開発して世界の産業を支配するべく暗躍して
るネジ職人だ。母ちゃんはその会社の社長」

「どっちが本当なの？ なんかどっちも嘘くさい」

「どっちかは本当だぜ？」

とつさに嘘をついてしまったけど、どちらが本当でどちらが嘘かは蟹の味噌汁。いずれにせよ、今のアタシは独りぼっちかもしれない。ただ一人、世界から浮いてしまって、いづれつ別の世界に弾き出されてしまうかもわからない。一度は全部失われた人間関係も少しは

新たに生まれつつあるものの、そう遠くないうちに全て無になる。

「まあいいか。何にせよ今あなたがここにいる。それだけでなんだか安心する」

ベルちゃんが髪を洗い終え、タオルでまとめた。場所を譲ろうと上がりかけたけど、なぜか制止され、ベルちゃんがそのまま浴槽に入ってきた。

「狭いね」

「そりやそうですわよお嬢様。大きさ控え目な風呂桶に二人も入ったらギツチギチだぜ」

「ふふつ、わかってた。でもこうしてると、人との触れ合いを感じられて好き」

「お、おう」

密着する肌を感じて、さらに心臓がバクバクし始めた。静まれアタシの内なるガイア。

これはきつトラブコメ王道ストーリーの役得シーンというやつだが、ここで出てくる三択の選択肢を間違えると、真夜中にメジロのSPに拉致されて本邸でメジロにされちまう、そんな究極の選択シーンにもなっているに違いない。心頭滅却心頭滅却般若心経……

アタシが必死に精神統一しようとしているのを知ってか知らずか、不意にベルちゃんがつぶやいた。

「あたし、本格的にティアラ路線を進むことにしたんだ」

「そっか。確かに今日のレースを観たら誰だつてその道を信じて疑わないだろうな。アタシも思うぜ、ベルちゃんならやれるつて」

「ありがと」

「となると、次は三月のチューリップ賞か？」

「その予定」

「じゃあ今月はちよつとゆつくりできるな」

「うん」

一日くらいはベルちゃんと遊びに行けるかな、などと考えていたらちよつとのぼせてきた。

「ゆでゴルシちゃんになりそうだから、ちよつと先にかかるわ」

ギツチギチの浴槽から抜け出して風呂場を出て、脱衣所だいつせよで少し身体を冷やす。ちよつどちみつこ達が顔を覗かせた。

「ゴルシあがった？ かのじよさんは？」

「まだ中だ」

ベルちゃんにそろそろ上がるよう声をかけ、パジャマを着た。

雑魚寝部屋にはベルちゃん、アタシ、ちみつこ達、大師匠の順で川の字になって寝ることになった。部屋一杯に敷き詰められた布団を見て、お嬢様は目をキラキラ輝かせていた。まあ、寮暮らしだとベッドだからこんな光景は合宿の時くらいしか見ないしな。

「こんなふうに寝るのもいい感じ。今度みんなでやってみようかな」
「たまにやるにはいいかもな」

この一か月雑魚寝を続けてきたせいで、明日からまた一人で寝起きするのが想像できなかった。家で誰か一緒に寝てくれる人が欲しいけど、人を連れ込むわけにはいかないから、なんかぬいぐるみでも置いておきたい。

翌朝、みんなで朝ご飯を食べ、大師匠一家に見送られて出発した。地下鉄御堂筋線——なんとかマッスルラインとも読めそうだな——で新大阪駅に行き、とてもうまい豚まんとかチーズケーキを買い占めて新幹線で東京に向かう。月曜朝のビジネス客にまぎれているので、若干場違い感がなくもない。京都駅を出てしばらく経った頃に寝てしまつたらしく、目を覚ましたら富士山が見えた。

東京に着いた後、さらに電車を乗り継いで府中に帰り着き、ベルちゃんと寮の前で別れ

て家に向かった。

家に近づいたところで、玄関先に誰かがいるのに気がついた。その姿はとも見慣れた人物で、でもこのループでは未来永劫現れるはずのない人で、しかも以前会った時と比べると見る影もないほど変わり果てた人だった。

「あら、大阪からの帰りはずいぶん遅かったんですね。何をしていらつしやったのかしら。いいえ、知っています。私のみならず、私の大事な家族を誑かして食い散らかそうとされていたのですよね？ 今すぐ冥土に送って差し上げますわ。ゴールドシップ」

整った顔を歪め、恐ろしいまでの敵意と怨念がこもった言葉を投げかけてきた。どういうわけか、まるで山の中を駆けてきたかのように薄汚れた服や手足と相俟って、さながら夜叉のようだった。その姿に本能的に足がすくんだ。今すぐにでも逃げ出したい。でも、かつてのわずかなアタシの過ち、それにより生じた誤解を自ら真実にしてしまった責めは受けなければならぬ。

何もかもが変わってしまったその人相手に、ただ呆然として彼女の名前をつぶやくしか

なかった。

「マックイーン……」

このループでの失敗は、開始早々にマックイーンと仲違いなかつたがしてしまったことであつた。今までの経験で、アタシがここに飛ばされて来た時に、アタシと関わりのある人には矛盾むじゆんが起きないようにアタシの存在が差し込まれて、記憶が改変されることを掴つかんでいた。ただ、その改変にはコントロールできないランダムな要素があり、今回悪い方向に発現したものがマックイーンとの関係だつた。

マックイーンには、アタシと「特別な関係」にあるという記憶が差し込まれていた。単なる大親友とかいう話を超えた「一心同体」というものだつたらしい。かつてアタシが経験したどこかのループで、マックイーンが自分のトレーナーとの関係を喩たとえた言葉とそっくりだが、ここのアタシとここマックイーンの関係は、おそらくはそれとは似ても似つかないドロドロとした色恋関係だつたんだろう。その関係性を把握するのが遅れた。いや……おぼした忘つたと言つていい。その先にあつた、アタシのほんの数秒の振る舞いがマック

イーンとの関係にとどめを刺した。

スマートフォンに届いたマックイーンからのメッセージに適当に返事をし、ループ脱出を探るべく、手元のメモをもとに今まで会った人々を訪ね歩いて、仲良くなったりしているときに、マックイーンがやって来た。

「——でさー、あ、おう、マックイーン」

「ごきげんよう、ゴールドシップさん」

「あ、じゃあ私はこのへんで」

「また連絡するぜー」

話していた子と別れて二人きりになったあと、マックイーンは笑みを浮かべたままこう言い放った。

「私のことはメッセージ一言で雑にあしらいながら、他の女性とはずいぶんお親しくしていらつしやるのですね」

「お、嫉妬しつとかマックちゃん」

「嫉妬？ そんな生易なまやきしいものではありませんわ——」

視線が鋭すろとくなり、アタシを刺すように見つめてきた。

「ここ半年以上にわたる悪行あくぎょうの数々をすべて思い出しなさい。その恨みうらみはここで晴らします。ともに地獄へと参りましょう」

刹那せつな、視界がひっくり返った。地面に叩きつけられたとわかるまでに少し時間がかかり、後から猛烈な痛みがやって来た。さらに上にのしかかられ、再び鋭く睨にらまれた。

「ま、待つてくれマックちゃん、話を」

「私はかつて二十三回、貴方あなたに弁明の機会を与え、赦ゆるしてきました」

そして不意に微笑ほほえみ、アタシに向かつて宣告せんこくした。

「二十四回目の裁きはともに受けましょう。私もすぐ参ります」

マックイーンの手がアタシの首元に伸び、その後のことは覚えていない。意識を取り戻した時はメジロの屋敷にいて、執事とライアンから謝罪を受けた。マックイーンのことについて多くは語られず、こちらから詳しく聞くこともしなかったが、『あなた様とは今後長らく相見えることがないよう取り計らいます』

とのことだった。

後になってメッセージを見返すと、アタシが雑な返信をする前に、大量のマックイーンからのメッセージが溜たまつていた。この中身をきちんと確かめていたら、マックイーンに

あのような思いをさせ、事に及ばせることもなかったかもしれない。せめてもの償いとして、マックイーンに酷い罰が与えられることのないよう、ライアンに言付けた。アタシにはこれくらいのことしかできなかつた。

マックイーンが去つたことは、ループ脱出の有力な鍵が失われたことも意味した。その後のアタシは、まさにマックイーンが言つたとおりの奴に自ら堕ちてしまった。後ろめたさもあつてメジロとは距離を置くよう努めてきたが、ベルちゃんとかかわりでもそれもなく崩しになつた。マックイーンの耳に入るのは時間の問題だつた。

マックイーンがアタシの前に立つ。

「たとえ他のすべての子が貴方を赦したとしても、私は永遠に赦すことはありません。非道の極みを我が家族に対して為すならば排除するのみ。……ようやく隙を突いてここまで来ることができました」

「……申し開きはしない。ひと思いにやつてくれ」

そう言つて、マックイーンの前に跪いた。

「命乞いはなさいませぬのね」

「結局、アタシはマックイーンの言うとおりの奴に落ちぶれてしまった。断罪だんざいされるなら、マックイーンにされるのがふさわしい」

「さいご最期の心がけは天晴あつぱれと評しましょう。それでは」

目を閉じる。マックイーンの変わり果てた、骨だけになつてしまつたような手がアタシの首にからみついた。奇くしくも、かつて狩られた時と同じ方法だった。首に力がかかる。このまま絞められるか、それともひと思いに折られるか。いずれにせよ、あと数秒の命だった。

その時。

「マックイーン！ やめて！」

後ろから叫び声が聞こえた。その声の主は彼方かなたから瞬時しゆんじにアタシの横まできて、マックイーンを突き飛ばしたようだった。アタシの首から手が外れ、それから目を開けると、尻餅しりもちをついたマックイーンとの間にベルちゃんが立ち、アタシをかばうように対峙たいじしていた。

「ドーベル……」

「ベルちゃん……」

「寮に帰ったけど、なんか胸騒むなさわぎがしたから、前来たときのことを思い出しながら来た。そしたら、声が聞こえたから」

肩で息をするベルちゃんの表情は見えない。一瞬呆ほうけたように見えたマックイーンの表情が再び険けわしくなり、ベルちゃんに声を投げかけた。

「ドーベル、そこをどきなさい」

「いや」

「これは貴方あなたのためなのです……!!」

「あたしのためって何？ マックイーンは何をしようとしているの？ 勝手なことしないでっ！」

アタシが今まで見たことがないような語気の荒さで返すベルちゃんに、マックイーンが激昂げききようして叫んだ。

「ドーベルツツツ!!」

マックイーンは立ち上がって一步を踏み出したものの、そのまま倒れ込んでしまった。

その時になってようやく気づいた。マックイーンは完全に痩せ細ってしまったていて、もはやウマ娘たる力を出すことができないのではないか。

なおも身体を起こしてこちらに迫ろうとするマックイーンに対して、ベルちゃんは静かに語りかけた。

「マックイーンはそれでいいの？ マックイーンがやりたかつたことつて、本当にこんなことなの？」

「それは……私は……何の……」

マックイーンの身体から力が抜け、今度こそその場にうずくまった。まもなくメジロのSP達も車で駆けつけてきた。マックイーンを車に乗せ、ベルちゃんに一言二言告げて足早に立ち去った。後に残されたアタシとベルちゃんは、しばらく沈黙していた。

やはり、アタシは誰かと付き合うのにふさわしくない奴だ。こんな奴がベルちゃんのそばにいていいわけがない。

「アタシは、噂通りの、そしてさつき見たように、マックイーンからあれだけのことを言われる最悪な存在だよ。あの言葉に嘘はない。マックちゃんや、他にも大勢不幸にしちまった。……もう、これつきりにしよう」

「やだ」

「分かってくれ」

ベルちゃんにはアタシの前に回り込み、アタシの目を覗き込んだ。

「あたし、初めて会った時から全部知ってた。マックイーンがあなたのことを好きだったことも、その後こじれて事件になったことも。……マックイーンが長期静養と称して別荘で軟禁されたから、そこから調べた。その後の学園のことだつて知ってる！ あれはみんなが勝手に狂っただけ！ あなたは悪くないっ！」

涙をこぼしながら抱きついてきた。

「なんでベルちゃんが泣いてんだよ……全部アタシのせいじゃんか……」

泣き続けるベルちゃんにポケットティッシュをいくつか押し付け、改めて寮まで送り届けた。寮長のヒシアマ姐さんに乙女を泣かせた罰を食らいそうになったので慌てて逃げた。

その週は学園には行かず、ずっと家に引きこもっていた。一か月にわたる不在で溜まっていたもろもろの家事などを片付けていたのもあったが、旅の疲れ、そして事件の疲れも

大きかった。それを慮おもっんづかつてくれたのか、ベルちゃんは簡単なメッセージを送ってくるだけで、家に押し掛けてくるようなことはしなかった。

年末年始は、ベルちゃんの方がメジロ家のもろもろの行事で忙しくしていたが、その後少し会ったり、学園の中で一方的に見つけられたり、ゴルシ先生のお悩み相談室を開いたりしていた。一月は行き、二月は逃げ、三月は去るといふ語呂ゴロ合わせの通りに一月と二月が過ぎ、春が訪おとずずれる。

クラシック級の戦いが本格的に始まる。

第三章 クラシック級

クラシック級の三月に開かれるレース、チューリップ賞。ベルちゃんにとっては三か月ぶりの阪神レース場だった。前回の阪神ジュベナイルフィリーズ、および来月開かれるテイアラ路線の始まり、桜花賞おうかしやうと同じレース場である。しかもチューリップ賞は桜花賞と同じ距離を走る、いわゆるトライアルレースだった。このレースで三着までに入ると桜花賞の優先出走権ゆうせんしゅつそくけんを得られる。

初めは遠く府中から応援しようと思っていたものの、前日のメッセージのやり取りの時、来るのが当然と思っていたらしいベルちゃんやアタシが来ないのを知って急に元気をなくしたため、レース当日の朝に新幹線で大阪に急行し、阪神レース場に出向いた。今度はコース間近まぢかに陣取った。

レース前解説によれば、前回の勝利が好感されて一番人気を獲得かくとくしていた。遠目に見ても気迫は十分……いや、なんか少し気負いすぎているか？ もつとリラックス、リラックス。念を送ったが届いていないみたいだった。

果たして、結果は三着だった。桜花賞に出られるようにはなつたものの、課題がいくつもある。まあ、そのあたりはトレーナーがきちんとやつてくれるに違いないので、そちらに任せればいい。アタシは後で差し入れでも持つて行くことにしよう。よもぎを限界まで入れた濃い緑のよもぎ餅もちでも作るか。

府中に戻った後、少し元気がなかったベルちゃんによもぎ餅をプレゼントしたら結構喜んでくれた。友達の分も持たせてやった。なんかやつてるのがオカンみたいな気がしてきたけど気にしねえ。

四月、トレセン学園の新年度が始まった。

とはいえレーススケジュールは一月スタートで組まれているため、デビュー後の生徒にはあまり四月始まりの新年度という感覚はない。アタシに至つては一月も四月も七月も十月も関係なく、もはやなぜ学園に居続けられているのかわからない始末だった。スケ

ジュールをとやかく言われなからこそ自由自在にベルちゃんのレースを観に行けているし、その恩を学園に還元すべきかもしれない。

そう思つて、平日は学園農場でにんじんの世話をしたり、学園食堂でキャベツや玉ねぎを一時間に十キログラム分刻きどんだりする勤労活動に参加したりするようになった。今もウマ娘の大部分やトレーナー・教官陣からの評価は相変わらずで、どちらかと言えば悪いものだったけど、もともとアタシが引き起こした騒動とあまり関係がなかった学園職員とはかなり仲良くなった。

四月最初の週末、桜花賞を観るため、このループのアタシにとつては三度目の阪神レース場に向いた。阪神レース場は自分で走る分にはかなり好きなコースで、気が散つてやらかした時を除けばだいたい勝つてきた。

今日の天気は雨、ずっと降り続いていたためバ場状態は不良となつた。毎週きつちりレース日程が決まっているため、雨天順延うてんじゆんえんと行かないのがレースのつらいところもある。選手たちはもちろんずぶ濡れで、勝負服も雨に濡れて重そうだった。とはいえみな闘あう志しにあふれている。

ベルちゃんの枠は大外おおそと十六番、二番人気になる票を集めていた。一番人気の子はさらに

外側の十八番。十八人で走るレースのためこれ以上外側にはいない。

スタート。ベルちゃんは道中後ろの方につけて走っていた。ただ、途中でちよつと外を回ってしまつたかのように見え、それが響いたのか、最後のコーナーでスパートをかけるも、先頭に立つた一番人気の子に追いつくことができず、四バ身差の二着となつた。ティアラ三冠への道は一戦目にして破れてしまつた。

夕方のウイニングライブはずつと笑顔でやり切っていた。その後控室^{ひかえしつ}へ行き、トレーナーと入れ代わる形でベルちゃんに会つた。ベルちゃんは氣丈^{きじょう}に振る舞おうとするも失敗して、すぐにしゃくり上げ始めたので抱き締めたら、そこから大泣きに泣いた。勝負は常に勝てるわけではない。突然無情にも夢が絶たれることもある。とはいえ、大怪我でもなければ次が狙える。ベルちゃんにはそれだけの力がある。もつと女王様然として構えてもいいと思つたけど、今はもう少しだけ、自分の胸に顔を埋めて涙を流す、ひとりのか弱い女の子のことを愛^{いと}おしく思つていたかつた。

学園に戻つてからのベルちゃんは、すぐに翌月のオークスに向けてのトレーニングを始めた。

距離が1・5倍の2400mになるため、スタミナをつけたり、ペース配分を見直したりするなどの対策が必要となる。オークスは学園すぐそばの東京レース場で開かれるため、学園組は移動による緊張や疲労が起きず、どの選手も本来の力を発揮しやすい。

アタシにできるのは相変わらず相談役と食堂の裏方と差し入れくらい。スタミナをつけるにはニンニクがいいと思って、ド平日にニンニクマシマシのガーリックチャーハンを作って持つて行ったら、とても困ったような笑顔でやんわり断られてしまった。清楚なベルちゃんに強烈なガーリック・フレグランスはやはり合わないなと反省した。ちなみにチャーハンは他の子達が殺到して求めたのであつという間に完売してしまった。食堂のレギュラーメニューに加えてほしいとのアンケートが多数寄せられたらしく、アタシが調理番に任命されるきっかけになった。

五月下旬、オークス。十六人立て十六番、今回も大外になった。学園の生徒も多数押し掛けるため、観客席は大盛況となっていた。こんな時、他のループのアタシは特製焼きそばを売り捌いて小遣いを稼いでいたけど、今回は一秒たりとも見逃すことができないため売らなかつた。

集合時刻の少し前にベルちゃんの控室を訪問して、お守りを持たせた。アタシは東京

レース場ではどのループでもあまり勝てなくて、ひどい時には後ろから数えた方が早い惨敗を喫したこともある。そんな奴のお守りなど縁起でもないかもしれないが、こゝは執念による後押し効果ということのひとつ。

事前にベルちゃんから聞いていた、トレーナーから伝授されたという作戦によれば、人の多さで過度に緊張しないよう、出走前はできるだけ目を閉じて精神統一するよう心掛けることにしたらしい。アタシはそれに追加して、昔から言われている対策「観客をみんなにんじんと思え」作戦を伝えていた。ゲートに入り、前を見据えたベルちゃんは落ち着いていて、良い感じに気合がみなぎっているように見えた。これは勝てる。

オークスのゲートが開き、選手が一斉にスタートした。ベルちゃんは後方に位置を取って走る。前回と違って気負ったり焦ったりする様子もなく、良いペースで走っていた。

そして、ベルちゃんは最後の直線で一気に前に出て、先頭でゴールを駆け抜けた。ついにテイアラの一冠を獲れた。こつちを見たベルちゃんが弾けんばかりの笑顔で大きく手を振ってくれた。アタシもそれに負けなくらい大きく手を振った。

テイアラ路線のレース勝者だけに許されたウイニングライブの曲『彩 Phantasia』のセリターを務めるベルちゃんはとても輝いていた。アタシはわりと前の方で観ている、ベル

ちちゃんと目が合った時に手を振ったらウインクで応えてくれた。ハートを射貫かれてしばらくぼーっとしていたのはここだけの秘密。

オークス当日の夜から何日かは、メジロ家一同による祝賀会や方々へのあいさつ回りがあつて大変だったらしい。翌週の木曜日くらいににんじん畑の片隅に来てくれた時には少々やつれていたように見えた。

夏の合宿シーズンはベルちゃんは丸ごと夏休みとなつた。しばらく姿を見かけなくなり、一か月ほど経つて不意に食堂に現れたので尋ねたら、メジロ家の別荘に遊びに行つていたらしい。

別荘と言えば、昨年末に衝突し、また去つたマックイーンが長期滞在という名で幽閉されてはるはずだった。ベルちゃんからの知らせによればかなり落ち着きを取り戻しており、アタシに対する後悔と贖罪の念を口に出しているらしかった。なんでマックイーンが苦しむんだよ、苦しむべきはアタシなのにさ……。

ベルちゃんはティアラ路線の締めくくり、秋華賞の前にオールカマーに出る予定だったため、八月後半からトレーニングを再開した。

休み明けでだいぶすつきりしていて、これはオールカマーでも、その次の秋華賞でも勝ると確信した。そして、久々の中山レース場で勝利を飾り、その後すぐに西へ向かい、翌月の秋華賞に向けて調整をしていた。アタシは学園からエールを送り、秋華賞前日の京都……は宿が超高かったので大阪へ乗り込み、例によつてタマモ大師匠の家に転がりこんだ。

秋華賞当日、大師匠一家とともに京阪電車で京都レース場へ。レースの日は最寄りの淀駅まで急行電車がダイレクトに結んでくれるそうで、車内は観客で混んでいた。昼過ぎくらいにベルちゃんと同面越しに会い、アタシや大師匠一家でエールを送った。ベルちゃんの表情は力強く、十分に力を発揮できるに違いなかった。

そして本番。晴れ渡る空にもターフにもベルちゃんを遮るものは何もなく、文句無しに勝利を得た。アタシたちはスタンドのずっと上の方から、この時のために一人一個用意した双眼鏡そうがんきょうでレースをずっと見つめていた。さすがにここまで遠いとベルちゃんからは見えないうなと思うていたけど、双眼鏡越しに目が合い、こつちに向けて手を振ってくれた。その顔は涙でくしゃくしゃになっていた。視界がぼやけ、大師匠から差し入れられ

たポケットティッシュを三つも四つも使い切ってしまった。

ベルちゃんは年末のファン投票で第三位に選ばれ、それを受けてトレーナーと話し合い、年末の有馬記念に出走することにしたと聞いた。

オークスよりさらに距離が延びる未経験の領域なため、用意周到よういしゅうとうに準備をして臨のぞんだが、最後はどうしても力及ばず、八着に破れた。

今ままで最低の順位、かつ初めて掲示板を外した自分が許せなかったのか、ウイニングライブ終了後ほどなくして中山レース場から行方をくらませてしまった。真っ青になったトレーナーがアタシのところに来て、それからトレーナー、アタシ、アタシが一報を入れてすつ飛んできたライアンとメジロのSP団、さらにレース場のURA職員とで大捜索さうさくすることになった。

結局、ベルちゃんはレース場最寄り駅の隣の西船橋にしふなばしの駅前、少し離れた緑地りょくちで途方に暮れているところを保護された。身ひとつで走ってきてしまったため、スマートフォンも手元に無ければ、電車に乗ったり飲み物を買ったり、公衆電話こうしゅうでんわで連絡するお金も持っていなかったらしい。

保護の一報を聞きつけてすぐに現場に駆けつけると、髪がぐちゃぐちゃ、さらに子どもみたいに泣きべそをかけたベルちゃんがいた。会ったら一発入れて説教しようと思つていた気持ちがあつという間に消えてしまった。アタシの姿を見た瞬間、胸に飛び込んできてさらに泣きじゃくつたため、それ以上何かすることはできなかつた。ベルちゃんが一番反省しているだろうし、お説教役はトレーナーに任せることにした。

中山レース場に戻つて詫びを入れた後、ベルちゃんの慰めついでに、トレーナー、アタシ、ベルちゃんとそのへんの適当なファミレスに入った。相変わらず暗く沈んだままだったので、頭を撫でたり、頬をつまんでうみよーんと伸ばしたり縮めたりしたら、少しは持ち直した。

帰りは遠回りながら電車一本なので助かる。揺られているうちにみんなして寝てしまつて、目が覚めたら西国分寺まで瞬間移動していた。

新年、シニア級一年目は日経新春杯に出たものの及ばず八着。次は春の大阪杯を目標にトレーニングをしていくことになった。次の大阪杯はベルちゃんが尊敬するエアグルーヴが出るので、何回か併走をしてもらつたという。

併走の時はアタシがいるとエアグルーヴが説教をしに走ってくるので絶対見つからないように隠れている。女帝陛下は恐ろしくてたまらないけど、こんな何もかもを捨てたアタシに面と向かつて説教をしてくれるのはアイツくらいなので、見捨てない姿勢はちよつとありがたいとも思った。でも怒られたくないから逃げる。

大阪杯はベルちゃんにとつてあまり得意ではない展開になったものの、女帝陛下にあと少しのところまで迫つての二着を記録した。このままよい調子で行けるかと思つたものの、目黒記念では及ばず五着。再び阪神に戻つての宝塚記念では、大逃げをぶちかますサイレンススズカのはるか後方二番手を走り続けたものの、最後に猛烈な追い上げを見せた女帝陛下を始めとする後続に追い越されて五着に終わった。

次は秋のGⅢ・府中ウマ娘ステークスを経てついにエリザベス女王杯に挑戦すると聞いた。その前にリフレッシュを兼ねて、しばらくメジロの本邸がある北海道へ旅行することとで誘いがあつた。

ベルちゃんは全日程一緒に行動する前提の計画を立ててきてめっちゃ目を輝かせていたけど、さすがにそれをするとう金が尽きてしまうし、学園の食堂の一大戦力に数えられる

までになったため若干抜けにくい。なにより、その日程の半分は本邸滞在となっていた。いくらライアンが取り成してくれているらしいとはいえ、お嬢様のくつき虫かつマックイーンとも因縁のあるアウトローなど、敷地に足を踏み入れた瞬間八つ裂きにされて洞爺湖に打ち捨てられても文句は言えない。とところどころ付き合うことにして計画を立て、食堂のボスにシフトの申請に行った。

ボスがシフト申請を見るなりアタシに喝を入れ、ベルちゃんの旅程全日程について有給休暇を職権で入れられた上で事務所から蹴り出された。『バカヤロウ、大事な女を放置して働く腑抜けはいらんわッ』とおば様の声は食堂中に響き渡り、しばらく噂になってしまった。

ちなみに、どう見ても二か月も有給休暇があるはずがなかったので、同僚のおばちゃんにこっそり聞いたら、「うちのボスは休暇日数を無限に増やせる権力を持っているんだよ」とのことだった。

荷物を整え、羊蹄山の麓で散る時のために辞世の句をしたため、ベルちゃんと羽田空港から新千歳空港行きの飛行機に乗り込んだ。飛行機の中でこの先の運命に震えて顔が青く

なつていたせいか、キャビンアテンダントさんにとっても心配された。

新千歳空港からは用意されたリムジンで一路メジロの本邸へ。助けてくれ。

「本当に大丈夫？ 飛行機の中からずっと顔が青いけど具合悪いの？ 本邸にお医者さんがスタンバイしてるからすぐ診てもらつて」

「お、おお、大丈夫だ。たとえ命が散つてもベルちゃんのこととは忘れないから……」

「何の話？」

門をくぐり、玄関前に車が横付けされた。アタシ達の荷物を持つ係二人と、老執事ろうしつじが出迎えた。

「お帰りなさいませドーベル様。ゴールドシップ様、遠路はるばるお越しくださりありがとうございます」

「ありがとうございます」

「こここここのたびはお招きいただきだたき」

壊れたおもちゃみたいな声が出たところで、ベルちゃんがそつと手を握つてくれた。

「大丈夫。あたしがいるから」

その様子が見えたのか、老執事が表情を緩め、中に案内してくれた。

「ゴールドシップ様はこちらの執事がご案内いたします。ドーベル様は私が。大奥様がお呼びです」

ベルちゃんと別れて、若い執事の後をついて歩く。ヒトの女性で、アタシと近い身長だった。

「こちらがゴールドシップ様のお部屋となります。一通り整えてございますが、各種御入用ようの際は遠慮なくお呼びください」

「ありがとな」

執事がすつと踵かかとを返したところで、ふと思いついて声を掛けた。

「あのさ」

「はい」

「つかぬことを聞いていいか？」

「なんなりと」

「その、アタシはさ、メジロといろいろあつたというか、ひと思いに斬り捨てられても仕方がないというか……」

しどろもどろになりながら説明すると、執事が微笑んで話してくれた。

「結論から申し上げますと、メジロ家一同はゴールドシップ様とともにあります。……もちろん、マックイーン様も」

「！」

驚きのあまり声を失っていると、執事が続けた。

「詳しくは大奥様が自らお話ししたいとのことでした。後ほどご案内いたしますので、今はしばしお休みください」

一時間ほど経った頃、執事が迎えに来て、大奥様、すなわちメジロ家の当主の部屋に案内された。

「大奥様、ゴールドシップ様をお連れしました」

「どうぞ、お入り下さい」

部屋の中、執務机しつちうきの脇に、車椅子に乗った年老いた女性と、世話係とおぼしき女の人うなががいた。促されてソファに座ると、その向かいに車椅子が押されてきて、当主と向かい合う形になった。

「ようこそ、お越しくございました。ゴールドシップさん」

「お、お世話になります」

「どうぞ、楽になさって」

「はい……」

出された紅茶に手をつけたけど、アタシ自身でもわかるくらい手がガタガタ震えていた。

「まずは、ゴールドシップさんには謝罪をしなければなりません。マックイーンがあなたに対して行った数々の非道、メジロ家の当主として……あの子の祖母として、お詫びいたします」

「いえ、あれはアタシが！」

「マックイーン自身をはじめ、多くの方々から話を聞きました。その上で申し上げます。全ての責は私達にあります」

マックイーンが悪いなんてあり得ない。全てはアタシのせいだと言おうとしたものの、声にならなかつた。

「多くの取り返しのことがありました。本来であればさらなるご迷惑をおかけするわけにも参りません。しかし……不躰ごしづけなお願いなのは承知ですが、もし、私の願いを聞

き入れてくださるなら、マックイーンに少しだけでも、会っていただきたいのです」

「……全部、アタシのせいです。マックイーンに謝らなければいけないのは、アタシです。だから、会います。会わせてください」

「ありがとうございます。マックイーンは離れています。後で案内させます」
マックイーンに会う、その覚悟を決めた。

「そして、あとひとつ。ドーベルのことなのですが」

「なんかアタシまずいことしたっけ。思い返すと途中からまずいことしかしてない気がしてきた。今度こそ土下座しないと。」

「ドーベルもゴールドシップさんにとってもお世話になって、たくさんご迷惑をお掛けしたそうで、ごめんなさいね。そして、ありがとうございます」

「え、あ、いや、アタシはただ適当に答えたり適当に差し入れ持ってたくらいで」

「ドーベルと、ドーベルのトレーナーさんから聞きました。あなたのおかげでここまで来ることができた」と

「アタシ本当に何もしていないんで……」

「なんでもない一言のおかげで道が開けることもあります。……どうか、ドーベルのことをよろしく願います」

「……わかりました」

メジロの当主直々じきじきにお願いをされてしまつては、もはや断ることなどできなかつた。

当主の部屋を後にして、執事の案内で離れに向かつた。建物の裏手へ向かうと、遠くにウマ娘の姿が見えた。外のテラスの椅子に腰掛け、こちらに背を向けて遠くを見る彼女の姿は、かつて見慣れた凜りんとした雰囲気はなく、ただ小さく丸まった寂しいものだった。アタシの方も悲しくなつてしまつて崩れ落ちそうになつたけど、勇気と力を振り絞つて一歩ずつ近づき、彼女を背中から抱き締めた。

「ゴールド、シップ……さん……？」

「ごめんな……マックイーン……」

マックイーンを壊してしまつたことはもう取り返しがつかない。アタシ自身もいつこのループから弾き出されてしまうかわからないまま。でも、この世界にいられる限りは、ともにいようと思つた。

マックイーンは引き続き離れに引きこもろうとしたけど、アタシが駄々をこねて本邸の元の部屋に引きずり戻した。見る影もなく痩せてしまった身体がもとのもちもちマックイーンに戻れることを期待して、まずはタマモ大師匠から旅行出発前に貰っていた飴ちゃんを渡した。飴を口の中で転がしているときの表情を見ると、やはり親戚だからか、ベルちゃんに似たものを感じた。

マックイーンの部屋を出ると、すぐ横にベルちゃんがいた。なんかほつぺたがぶくーつとふくらんでいるように見えた。もしかして、少し怒っていらつしやる？

「……うわきもの」

「えっあつ」

「ふふつ、冗談——とまでは言えないね。ちよつとマックイーンに嫉妬しちやつたかな」

「ああアタシは誓つて浮気はしてないぞ！」

「わかっているって。……あたし、たまに自分の親戚と破局して失恋したあなたを、その親戚から奪い取った泥棒猫みたいだなって思ったりするんだ。……これって物語じや最上級の負けフラグだね」

「自分から泥棒猫なんて言っちゃいけないえ、ベルちゃんはティアラ二冠なんだ。立派な女

王様だ」

少し自嘲気味につぶやいたベルちゃんに、ほとんど反射的に返した。

「そうかな」

「そうだぞ」

「じゃあ、あなたは何になるのかな。女王と結婚した人はなんて呼ぶんだろ……」

「落ちて着こうベルちゃん。キミは今冷静さを欠こうとしている。アタシはそのへんの石で十分だ」

「女王に石じゃ釣り合わないよ。そうだ、騎士はどう？ その……いっぱい守ってくれたし」

「守られてばかりな気もするけどな。まあ、ベルちゃんに釣り合うような騎士を目指そうじゃないか、期待しとけよ、ベルちゃん」

「よろしくね。明日から予定もりだくさんだから」

「任せろ」

何を任せろなのかアタシ自身もよく分かっていないまま、胸を張って答えた。

ベルちゃんの予告通り、レースの間の休養という建前を完全に棚に上げた休暇が始まった。まずは道内で行けるところの隅々まで行き尽くした。北の宗谷岬、南の白神岬、東の納沙布岬、西の奥尻島、えりも、知床、オホーツク。地名の響きが気に入った音威子府などなど。メジロ本邸の近場（当社調べ）だと、登別に行つてクマに対抗しようとして逆に友好条約を締結したり、苦小牧でホッコータルマエに再会したりした。彼女はあのとときアタシが吹き込んだのをきつかけにトレセン学園に来て、とまこまい観光大使としての活動をしつつ、デビューに向けてトレニンングを重ねているらしい。この日は地元での活動でトレーナーともども帰つてきていて、お互い日程に余裕があるからと、苦小牧の観光案内をしてくれて、さらに一緒に樽前山にも登つた。

本邸にいる時は時間を贅沢に使つて、庭の芝生の上を隅々までゴロゴロ転がり、ベルちゃんに寝るなら転がらずに一箇所だと叱られた。時にはマックイーンと一緒に寝転んだりして一日を過ごした。

八月に入るとメジロ家のウマ娘達が本邸に集結した。最初はラモーヌの凍てつく視線が怖くてベルちゃんに仕えるメイドのフリをしたけど一瞬で看破され、思わず土下座してしまった。しばらく一緒にいると、ラモーヌはレースに真摯で、時々（わりと？）気ままな

存在だと分かってきた。でも妹のアルダンと違つてめっちゃ雰囲気怖い。助けてくれ。こいつら本当に姉妹なのか？

九月、北海道だともうだいぶ涼しくなつてきたころ、学園からベルちゃんのトレーナーが来た。メジロ家への挨拶と、秋の戦いに向けて函館はこだてレース場を使ってトレーニングをするためだった。アタシも函館に少し立ち寄りつつ、学園に帰ることにした。函館レース場は、アタシがきちんとデビューした回のループでは、メイクデビュー戦に出るために必ず訪れていた。ここの風呂は近くの湯の川温泉から引いてきているから結構重宝ちようほうした。

函館から府中へ帰る時には、新幹線じゃなくてフェリーとバス、鉄道を乗り継いで観光しながら帰ってきた。函館からまず向かった大間では腰をいわしたじいちゃんの手助けでマグロ漁に加わり、大物を釣り上げた。超高値がついたので御礼おれいもろもろを打診され、船に乗ったアタシの像を港に建ててもらふところまで手を打った。そう遠くないうちにアタシがこの世界から消えたとしても、もしかしたら謎のウマ娘像として残つてくれるかもしれない、ベルちゃんがアタシのことを忘れてしまつていても、それを見て何かを感じてくれない。

大間からはひたすら海沿いを下り、三陸や松島、福島の浜通りを通つていわき、そこか

ら中通りへ。とある場所をこつそり敵地偵察しようとしたら普通にバレた。追い回されるかと思つたら歓迎されたので少し泊まつていると、たまたまここに来ていたトーセンジョーダンに出くわしたので、アツい肉体言語を駆使して挨拶をした。

いろいろ寄り道をしていたら、結局ベルちゃんよりも帰り着くのが遅くなつてしまい、家の前でほつぺをぶくぶくさせながら座つていたベルちゃんをなだめる羽目になつたりした。

十月、府中ウマ娘ステークスでは圧倒的の一番人気に推され、二着の子にギリギリまで迫られるも先頭で行き、秋華賞以来約一年ぶりの勝利を挙げた。例によつて後ろの方から腕組みをしつつその結果に頷いていたら、なんか遠くから「うっひょおおおおあああああッッッ！これが後方、彼、氏、面ッッッ!! あゝ幸せでした、カフツ」という叫び声と誰かが倒れる音がした。間違いなくアグネスデジタルだ。まさか今ここにいたとはな。勝手に彼氏にすんなコラ。

いよいよ次は今季の最大目標、エリザベス女王杯。女帝陛下・エアグルーヴが参戦を表明しており、これで四回目の対戦となる。ベルちゃんは今まで四回ともエアグルーヴに先

んじることはできていなかった。今回はエアグルーヴに勝つだけでなく、もちろん一着を目指す。心身の調整は順調で、これならGIでも安心して全力を発揮できるといえるまでになっていた。アタシはGIレーススラッシュによる食堂の特別シフトに加わって、朝から晩まで大鍋と格闘し続けていたけど、休憩時間の時にベルちゃんの様子を見に行つた。

おおいちばん
大一番に備え、ベルちゃんとトレーナーは一週間前には京都に行くとのことだった。アタシは直前に行こうかと思つていたところ、ベルちゃんは早く行くんですよと休憩時間に話したのをボスに聞かれてしまい、またしても臨時有給休暇を突っ込まれて蹴り出された。今度彼女をないがしろにして働こうとしたらクビにするぞと学園一の実効権力を持つおば様の威厳いげんをもって宣告されたら、これはもう従わなければ居場所がなくなる。自分も早く行くことにしたとベルちゃんとトレーナーに伝えたところ、めっちゃ喜ばれて宿の予約を追加しておいたと連絡が来た。アタシの分はベルちゃんのトレーナーが全額奢おごつてくれるそうなので安心して行けるな。

「……えーと、ベルちゃんとそのトレーナー」

「どうしたの？」

「どうしましたゴールドシップさん？」

「こんな超高級旅館だなんてアタシ聞いてないんだけど」

みんなで新幹線に乗って京都に着き、送迎車として待っていたのがハイヤーだったからちよつと怪しんでいたところ、着いた先がとんでもなく高級なところだった。

「うん。言わなかったよ。だつて言っちゃつたら絶対タマモさんの家に逃げ込んだでしょ？」

「逃げねえよ。……でも大師匠のちみつこ達が足の小指を絹ごし豆腐にぶつけた痛みで倒れたつてたつた今テレパシーを貰もらったからちよつと様子を見に行つてくらあ」

「元気だつてさ」

なんでこの短時間で大師匠んちに電話してんだこのウマ娘は。いつの間に連絡先聞いたんだ。

『よーゴルシー、かのじよさんとでーとしてこいよー』

『ウチににげてきたらひやくまんねんできんにするではらあくくれ、つてねえねとかーちゃんが言つてた』

「わーつたよ、アタシが悪かった」

逃げ道は見事に封じられた。覚悟を決めたので、用意された部屋が二部屋で、トレーナーが一部屋、アタシとベルちゃんの一部屋になっていることには文句はつけなかった。布団がダブル一組だったことも気にしないことにした。

ベルちゃんの最終調整を見たり、息抜きに近場を観光したり、温泉に入ったり、美味しい料理を味わったりして、ここ最近働き詰めだった疲れが一気に取れた。フリーダムの化身だと自分で思っていたこのアタシが真面目に勤労しているから、他のループの連中が見たら病院に閉じ込められるに違いない。

戦いの前日、最後の温泉を楽しんで英気を養い、部屋でベルちゃんと並んでリラックスしていた。

「いよいよ明日だな。ずいぶん遠くへ来たもんだ」

「長かったような、あつという間だったような。あたし達が出会ってもう三年近く経つんだね」

「だな……あの頃のアタシが今のこれを見たらどう思うだろうな」

「真面目過ぎて別人だっと思うんじゃないかな。あの頃はヤサグレ全開に見えだし、声の

かけ方を少し間違うとシメられそうだった」

「そんなアタシによく声をかけようと思ったな」

「前も言ったとおり、あなたのことはマックイーンの話を通して知ってたから。根は悪くないって信じてた」

「買いかぶりはよせよ。あの頃のアタシはゴリゴリの悪の塊かたまりだよ。ベルちゃんを襲って食い散らかしてたかもしんねえ」

「……あなたなら、もしそうだったとしても、よかつたかも」

そう言うと、ベルちゃんはアタシの向かいにすると移動し、じつと目を見てきた。

「嘘じゃない。あの時もそう思ってたし、今ならなおさら」

返答に困っていると、ベルちゃんが宣言した。

「明日、絶対勝つから。……ウイニングライブの後、あたしに時間をちょうだい。聞いてほしいことがあるから」

エリザベス女王杯がまもなく始まる。

第四章 エリザベス女王杯

『聞いてほしいことがあるから』

これに対して「どんなことを話してくれるんだろう」と無邪氣むじやきに思えるほど朴念仁ぼくねんじんでもなければ、だいぶ前のループで世話になったトレーナーがアタシに隠れてやっていた謎の恋愛ゲームの主人公みたいな鈍感野郎どんかんやろうでもない。たとえループを繰り返して百二十年を過ごしてきたスレたウマ娘でなくともそのくらいは想像がつく。

ここ数か月ずっと目を逸らし続けてきたアタシの感情と、ベルちゃんの様子、二人の関係と向き合うべき時が来た。アタシとベルちゃんはそのくらいの関係になつてしまつていた。今までなあなあにしてきたけど、タマモ大師匠とそのお母ちゃんから言われた通り、

腹を括らなければならぬ。

思い込みでも何でもなく、ベルちゃんがアタシに好意を抱いているのは明らかだった。今までのループで出会ったベルちゃん、男性トレーナーに対してはかなり高い割合で恋愛感情に近いものを抱き、女性トレーナーとも大いに親しくなる傾向があった。今回はそれが全部アタシの方に向いているに違いなかった。過去のループでこうした関係になったことがなく、今回のループでは仲良くなるどころかほとんどの奴から敵視されていたので、こんなことなど今までに経験が無い。正直どう振る舞ったらいいかわからない。

今隣ですやすや寝息を立てている子のことを改めて意識して、顔が熱くなり、心臓の鼓動がさらに速くなった。

……ああちくしょう今度こそきつちり認めてやるよ！ ベルちゃんが、メジロドーベルが好きだ！

自分でもなんでこうなったかがよく分からない。いや分かってる。スレきつたところに距離感がバグったみたいに近いところまで踏み込んできて、ちよつと声を掛けてくれてその上懐いてくれたからだ。そんな可愛い健気な女の子にコロツと落ちたチヨロチヨロのチヨロいゴルシさんだぜチクシヨウ。

隣に寝ているベルちゃんを改めて視界に入れた。今アタシのこの両手で抱き締めて、抱き締めて……いかん、想像した先はマジで襲つてめちやくちやにしてしまえそうだ。最大の決戦の前にそんなことをやったらマジで公開処刑される。G I レース覇者はしやを傷物きずモノにした世紀の極悪人として討たれて、二条河原なんじょうがわらで晒し首さらしにされることは容易に想像がついた。これ以上はもう止めることができない。何かを起こしてしまふ前にここを抜け出して、洛中らくちゆうを走り回つて煩惱ぼんのうを滅却めつぎやくせねば。

こつそり布団を抜け出し、着替えて部屋を出ようとしたところで、布団の方から声が出た。

「どこ行くの？」

「え、ああ、ちよつとトイレにな」

「部屋のトイレにそんなランニングフル装備に着替えて行くの？」

起きだしてきて布団の上で正座せいざしたベルちゃんがジト目でこちらを見る。これが噂うわさに聞く目ジトドーベルか。ちなみに噂の発信元はベルちゃんのトレーナーとブライトだった。

「少々緊急事態が生じてな、ここから二十キロ離れたトイレじゃないといけないんだわ、

ハハハ……」

どうせ何の取り繕つくろいにもなっていないことはバカでも分かるくらいひどい言い草だったが、ともかくにもベルちゃんから距離を取らないともう理性を失いそうになっていた。

アタシのただならぬ雰囲気を察したか、ベルちゃんは軽く息をついて、少し恥はずかしそうな感じさえ見せながら話し始めた。

「自意識過剰じいしきかじょうだけどさ、寝る前にあたしが色々言っただよね。あなたが動揺どうよくしていることくらいあたしにもわかる。……そのくらい、ずっと一緒にいたから」

「……そうだな……そこまで分かっちゃったか。とはいえアタシもベルちゃんがどんなことを思っているそうか分かるくらいにはずっと一緒にいた。だから、実はもうどんなことを言われそうか見当はついてる。それこそ自意識過剰のかたまりだけどさ」

ベルちゃんの目をじつと見つめた。たぶん、それで全部伝わったに違いなかった。

「なによ、それじゃせっかく今日の夕方まで時間稼ぎしようとした意味がないじゃない……」

「そうみたいだ。——ぶつちやけて言うよ、まあその、つまり、もう同じ布団にいたらやばいことになってしまってきそうなんだ。このままだとベルちゃんを手籠てごめにしてレースどころ

じゃなくしてしまいそうだった。だから部屋を脱走しようとした。察してくれ」

「そっか、そこまで……フツツ、……何でだろう、涙が出てきた」

ベルちゃんが笑いながら目をうるませ、そうしないうちに嗚咽おえつに変わった。涙がぼろぼろとこぼれて掛け布団に染しみを作るのが見えた。ベルちゃんに数歩近付き、軽く肩を抱いた。

「泣くなよ、アタシまでもらい泣きしそうだ」

「だって……ヒツ、うれ、嬉し、いつ、から……っ！」

思わずそのままベルちゃんを抱き締めてしまった。ベルちゃんに直接触れて理性が飛びつつあるのを感じた。これ以上衝動が起きないように鋼はがねの意志で抑え込まねば。桐生院きりゅういんトレーナーに弟子入りしてスキルを獲得かくとくしとけばと思ったが、もちろん手遅れだ。

「悪い、このままじゃ本当にベルちゃんを押し倒してめちやくちやにしそうだ。まだアタシの理性があるうちにアタシの手足を縛しばつてその柱に結びつけてくれ。頼む」

「結びつけてって、ここ縄なわもガムテープもないし……だいたいあたしに人を縛る趣味はないから……」

「わかった。ちょっと岩にヘディングして精神を強制鎮圧ちんあつしてくる」

「やめて」

バカみたいな押し問答をしているうちに、だいぶ気分が落ち着いてきた。

「あー、だいぶ欲望が発散されたな。でかいレース前なのに気持ちみだを乱すようなことやっちまつてごめん」

「ううん。あたしもなんかすつきりした。心置きなくのびのびと走れそう」

「そりゃあ良かった」

時計を見ると午前一時を回っていた。レースで活躍するウマ娘達は基本的に超朝型なので、わりと起床時刻まで間がない。例外として、ゴールドシスターみたいに超寝坊するタイプもたまにいます。ちなみにアタシは今回のループでは若干朝は遅いものの、きちんとした時間に登校して学園の敷地内で寝転がっていた。学園食堂で働き始めてからはさらに規則正しくなった。

「さて、寝直すか」

「うん……つて、どこ行ってるの。ただの畳たたみの上でゴロ寝する気？」

「今日だけは許してくれ。同じ布団に入ったら今度こそケダモノになっちまう。精神を落ち着けるためにその桂川かつらがわに石を抱いて自沈じちんしなきゃならなくなる」

「船が自沈しちやまずいでしょ」

「ああ、だから今日は、な？」

「わかった。じゃああたしも畳でゴロ寝する」

「それは自重じよんじゆうしてくれ頼むから。背中が痛くて出走取消しゆつしゆじゆとかやらかしたらマジでアタシが抹殺まつざつされる。そこ、ほつぺぶくーつとしない！」

「むー」

変にわがままなお姫様の相手も大変だなと思いつつ、それが一層楽しく思えた。

翌朝、旅館をチェックアウトして、ここから京都レース場までは再びハイヤーで移動。

アタシは川沿いを適当に歩いて本番直前にレース場に着くようにしようかと考えていたけど、トレーナーからベルちゃんのリラックスのために協力してほしいと耳打ちされたので従った。今日真夜中のアレで、ベルちゃんはたぶん人生で一番メンタルが安定してるんじゃないかとも思っただけど、迂闊うかつなことを言っつて今バレルのは少々まずい。バレルならせめてレース後がいい。

いろいろ考えているうちにレース場が近づいてきた。ベルちゃんを選手の集合点呼に送

り出し、ひとまずレース前まではトレーナーと一緒に関係者席に陣取ることにした。そういえばこのトレーナーとレース場で一緒に行動するのは始めてだった。

京都レース場では間もなく第一レースが始まる。今日もトウインクル・シリーズを走る多くのウマ娘たちがしのぎを削る。その中で今日勝てるのは、レース一つにつき一人だけ。ベルちゃんみたいに初っ端から勝ち続けるなんて超のつく逸材だ。アタシは……ループによつては超強いけど、平均的には半分勝つくらい。今回みたいにそもそもレースにない時もある。

「なあトレーナー」

「どうしましたゴールドシップさん」

「アンタ、どうやってベルちゃんと出会ったんだ？ 本人からは学校から紹介されたみたいなことは聞いた覚えがあるんだが」

このトレーナーは、もともとベルちゃんの面倒を見ていたチーフトレーナーの婆さんの後を引き継ぐ形で就任していて、確か婆さん退任から一か月近く空いていた。

「実は、あの時はまだトレーナーとしてまだ独り立ちしたばかりで、それまでは別のトレーナーのところサブトレーナーとして活動していました。選抜レースを観たりして、

どの生徒さんをスカウトしようかと考えていた時に、生徒育成支援課の方から彼女を推薦すいせんされました」

「へえ、支援課の方だつて適当に推薦はしないだろうし、アンタの腕をよつぽど見込まれたんだな。決め手はなんだつて？」

「その、サブトレーナーをやつてた時の生徒さん達とのうまい付き合い方、だそうです」「うん？」

「ご存じかとは思いますが、ドーベルさんは男性が苦手です、支援課としては人当たりがよく、ギラギラしていないトレーナーをまずリストアップしたそうです」

「若い男に対する評価基準としては微妙なアレかしんねえな」

「もちろんそれらだけではなくて、きちんと育成の腕も評価してもらつてますよ？ そのリストから、思春期の女性への適切な応対ができていると、相互評価や生徒さんからのアンケート評価を受けている点で声をかけた、と聞いています」

「確かに、トレーナーの中には悪い方向で変なヤツも多いし、たとえ評価が良くても生徒からのアタックで陥落かんらくしてしまうものもあるしな。ベルちゃんを支えるささならそのへんは健全けんぜんかつ頑丈がんじょうでなきゃいけないえ」

「声をかけてもらってから、ドーベルさんを引き受けようと決意したのはわりとすぐでした。決めてからは、先代のトレーナーさんのトレーニング記録を見て勉強して、支援課の方も交えた三者面談に臨みまました。一回目は『ごめんなさい無理です』って即答されてしまいました」

「なんだ、そんな感じだったか。ベルちゃんからは回し蹴りで追い払ったって聞いてたから」

「彼女はそんなことしませんよ」

「ごめん嘘ついた。でも初手で断ってしまったってのはその時に相談されてな、トレーナーがつく話が破談になったらどうしようってオロオロしてたな」

「そうだったんですね」

「で、トレーナーな舐めんな、七色に光ったり怪奇現象と付き合ったり、担当をキャラクター化した着ぐるみ着て活動してるんだぞ、絶対また話をしに来るはずだって言っていた」

「あのあたりの規格外超人な先輩方を引き合いに出されても困ります……」

「でも実際そのあときちんとトレーナー契約を成立させたんだろ？」

「二回目はむしろドーベルさんの方からトレーナー室に来てくれました、すぐに話がまとまりました」

「へえ」

「それからはずっとトレーナーとしてトレーニングを見てきました。担当する生徒さんはドーベルさんだけだったので、実質専属ですね」

「ベルちゃんの面倒見るの大変だったろ？」

「そうでもありませんよ。きちんと数字を見て話して、アドバイスを適宜^{てきぎ}反映して伸びてくれますし。メンタル面はゴールドシップさんがずっとついていてくれたおかげで非常に安定していました」

「アタシ何もやってねえぞ」

「ご謙遜^{けんそん}を。時々ですが、ドーベルさんがあなたのことをキョロキョロと探していたので、居場所を教えたことがあります。当時のドーベルさんはあなたと会っていることを私はじめ他の人みんなに隠したがっているのは知ってましたから、さりげなく誘導するのは苦労しました」

「やけに見つかると思ったたらアンタのせいもあつたのか」

「ええ。ゴールドシップさんのところに行つた後のドーベルさんは、いつもとてもすつきりした表情で明るくなつていて、まるで憧れの^{あこが}の人と話^{おとめ}ができた恋する乙女^{おとめ}のようでした」
トレーナーの言葉に、アタシは一瞬ドキツとした。アタシとベルちゃんの関係性を始めから見通していたかのようにだつた。

「今日は一段とすつきりした感じに見えました。……ドーベルさんのこと、これからもよろしくお願ひしますね。ゴールドシップさん」

「……ああ、この身ある限り、ずっとベルちゃんと一緒だ」

レースまであと二時間ほどとなつた頃、出走前の選手控室に、トレーナーとアタシとで改めて^{げきれい}激励^いに行つた。

「放送席^{ほうそうせき}、放送席。エリザベス女王杯で見事勝利をつかんだメジロドーベルさんへのインタビューです」

「いきなりどうしましたゴールドシップさん」

「そりやもちろんレース後の取材リハーサルだ。トレーナーもきちん^{きちん}と準備しとけよ」

「大丈夫です。昨日寝る前に勝利インタビューのスピーチ案を三つほど仕上げました」

「なんかあまり準備されてると、ちよつと緊張しちゃうかも……」

「大丈夫だ。アタシとトレーナーがついている。さすがに併走はできねえが」

「いつもの所で見えていますから、そこだけに意識を置いて。私達以外でスタンドにいるのはよく声が出るにんじんの束です」

「そうだ、食つちまう勢いで走れ」

「……ありがとう、行つてくる」

スタンドに戻り、今回も来てくれていたタマモ大師匠一家と合流した。ちみつこ達が出会つて早々に突撃してきた。

「ゴルシー、かのじよさんとデートしたかー？」

「昨日の今日だぞ、まだ準備中だ。あ、でも結婚はしたぜ？」

「けっこん!? すげえ」

「ねえねえ、けっこんしたらうえでいんぐけーきたべるんだよね? しゃしんとつてきて! うちのかみだなにかざるから!」

「こらチビどもゴルシに変なモンたかるな! ……なあゴルシ、本当は何したんや?」

「その、ベルちゃんが今日の夕方時間くれて昨日の夜言つたんすが、その前の話の展開

から何の話かもう分かっちゃったじゃないですか。真夜中に荒ぶる銀河系コスモを平定へいていするために部屋を抜け出そうとしたらいろいろあつて……時間稼ぎも何もあつたもんじやないあれつす。……お互い自爆したようなもんつす」

「あー……そうか。すまん。……えーとな、御祝儀家ごしゅうぎに置いてきたわ。ちよつと銀行からピン札引き出して、あと祝儀袋買ってこな。お母ちゃん今からパーマ屋さん行つてき」

「落ち着いてください大師匠、ベルちゃんのレース観なきや」

「あかんあかん、肝心なこと忘れよつたわ。で、その後結婚式か？」

目をぐるぐるさせた大師匠が正気に戻るには、大師匠のお母ちゃんの張り手が必要だった。

エリザベス女王杯、京都レース場・芝2200m・外回り。ベルちゃんのゲート番号は一番、一緒に走る十四人のうち最も内側からスタートする。一番人気は女帝陛下・エアグルーヴで、圧倒的な支持を受けていた。ベルちゃんは二番人気につけていた。やはりGIともあつて会場の熱気や歓声かんせいはひときわすごく、今日一番の盛り上がりとなり、場数を踏んでいるはずの選手十四人も若干圧倒されているように見えた。落ち着いているのはエア

グルーヴとほか数人くらい、ベルちゃんは……やっぱりちよつと緊張が見えるな。

気持ち良く晴れ渡った空のもと、発走委員が台上がり、旗の合図とともにG I ファンファーレが演奏された。ファンファーレ後に会場の歓声が一層高まった。

スタート。全員出遅れなく一斉に飛び出した。ベルちゃんは中国あたりにつけたものの、最初はちよつと焦りが見えていた。ただそれはほどなくして収まった。リラックスの念を送ったのが効いたのかもしれない。すぐに良い感じの走りに戻り、最終コーナー。内側をついて前に出た。速い。

「がんばれーベルちゃん」

「いつけえええそこ突き抜けやああつ！」

「よっしゃあつそのまま走れえええええつ！」

会場の応援の声がどんどん大きくなる。アタシも渾身の力で叫んだ。

「そこだー！ ツツツツツ！ ドーベル！ ツツツツツツツツツツツツ！！」

ゴール板を駆け抜けたベルちゃんの姿は文句なしの先頭だった。掲示板の一番上に灯る「1」の数字がそれを証明していた。

走りきったベルちゃんは、会場の大歓声に顔を上げ、掲示板の方を見た。少しして笑顔を見せ、そして涙。

まず別の方角、おそらくメジロ家のみんながいる方に手を振り、そしてアタシ達の方にも手を振ってくれた。髪も顔もくしゃくしゃだったけど、およそ一年前、街の中で独りべそをかいてうずくまっていた姿とは全く違う成長を感じられた。

ウイニングライブでの『Special Record!』のライブでも最後方……なんてシケた真似はしない。事前にアグネスデジタルに聞いて対策した通り、レギュレーションで許される限り最大限の武装で最前列を取って、ベルちゃんの姿を目に焼きつけた。

アタシと目が合った時、特別なファンサをしてくれた気がする。少なくとも途中のサビで標準振り付けにない投げキッスをくれたのはアタシあてのはず。そうに違いない。うん。

——なんで振り付けを知ってるかって？ いやさ、ここまでのループで基本的に宝塚記念に出ることになってたから、練習は今回のループ以外めっちゃしてたし、だいたいの場合でシニア級一年目と二年目の宝塚記念では勝ってセンター務めてたし。

ライブ終了後、トレーナーと一緒に花束を持ってベルちゃんの控室に押しかけた。すで

に花で埋めつくされた部屋の中にさらに花を贈りに行ったからすごいことになって、自分たちのを含む花一式を生花の輸送サービスの窓口へ持って行く手伝いに加わった。あ、もちろん手に持って帰ってもらう分はアタシとトレーナーから一輪ずつ別に贈ったぞ。

今日のアタシとベルちゃんの宿泊地は例によつてタマモ大師匠の家にしてただけど、たぶん大丈夫じゃないよな……？ 一応大師匠とお母ちゃんに確認したところ『どんと来いやあ！ そつくり度334%のそつくりさんでシラを切り通したる！』とのアツい返事をもらった。となると、問題は大阪までの移動手段なわけだけでも。

「その駅から電車に乗れば着くんでしょ？ 普通に乗ればいいじゃない」

「こんな時に世事に疎いお嬢様のふりをしないでくれよドーベルさんや。下手すりやパニック起きるぞ」

「いや、むしろ本人にそつくり過ぎて本人と思われないかもしれません」

「トレーナーも正気に戻つて？」

押し問答すること十分。

アタシ達は京阪淀駅のホームで電車を待っていた。

「なんでや！」

「シッ！ 静かに！」

人がかなり捌さばけた時間帯に、一応私服、帽子、伊達眼鏡だてめがねとそこそこ気合を入れて変装して駅に行ったものの、まわりの視線からして秒でバレているに違ちがいなかつた。それでも不躑ぶしつに声を掛けてくる奴やつがいないのは、さすが訓練された淀よどに集う民か。この時間ともなると臨時電車もないので、途中で特急に乗り換えて行くか、のんびり進むか考え、人混みを避けるため乗り換えないことにした。

「ご飯はどうするよ？ 大師匠からは家でも、どこか店に行くのでもいいって連絡が来てる」

「そうだね……おうちにお邪魔してもいいかな」

「よし送った」

「さて、私はどうしましょうかね。鶴橋つるはしで一人焼肉でもしますかね」

「トレーナーも来いや」

一人追加するというメッセージを送り、大師匠の家まで連行した。

「ベルちゃん、エリザベス女王杯勝利おめでとう！」

「ありがとうございます」

「あ、そうだゴルシ、かのじよさんとけっこんおめでとう！」

「おめでとう！」

「へ？ ……ねえ、なんの話？」

「えっと、これは言葉の綾あやで」

「ベルちゃん、このスカポインタンがスタンドでお母ちゃんとチビたちと一緒にだった時にいらんことフカしよったんわ」

「スマン、ベルちゃん」

「ぼかん、としていたベルちゃんが真っ赤になり、ふるふる震えながらジト目でこちらを睨にらんできた。本日二回目の目ジトドーベル頂きましたありがとうございますごめんなさい。」

「……ぼか……」

「本当にすみませんでした」

本日のメインはお好み焼きだった。アタシのたこ焼き修行のときにお好み焼きの修行もしたので、焼く要員として参加した。ゴルシちゃんスベシャル！

「ゴルシいい焼き方しとるで。前よりずつと腕上げたなあ」

「学園の食堂で仕事するようになってかなり経つたし、いろんなものを一気にたくさんおいしく作る技を会得えとくしたつす」

「てことは、ベルちゃんはゴルシの手料理を食つとつたかもしれないなあ」

「手料理……」

ベルちゃんがまた赤くなつた。確かにそう言われたらそうだけど、でも何百人前作つてそこから少しというのは手料理なのか？

「まあ、手料理ということでもいいんじゃないでしょうか。そうすると、私は妻の手料理を結婚の五年前から食べていたことになりましたね」

「なんだオメー結婚してたのかよ」

「はい、一昨年結婚おととししました。学園のトレーナーは薄給はつきりあげきむ激務なせいではなかなか結婚できない人が多いので、私は珍しい部類ですね。学園食堂の担当との会議の時に会つて、それからお付き合ひをして結婚という感じでした。妻は今も学園食堂の調理部門で取りまとめ

をしています」

取りまとめ？ まさかな？

「彼女が主食課のチーフで、さらに彼女のお母上が食堂調理部のトップをしていて、日々生徒や教職員の食を守るべく采配さいはいしています。最近聞いたのが、付き合っている彼女をないがしろにする腑抜けふぬめスタッフに職権で有給休暇をマシマシにした上で割り当てて、そのスタッフを彼女と一緒に旅行する期間中現場から追放したのだとか」

トレーナーが面白いものを見るような笑みを浮かべてアタシを見てきた。チクシヨウ、最初から全部筒抜けつづぬめだったか。

「ゴルシやるなあ。お好み焼き食うより倍のペースでお腹いっぱいになってしもたな。ごちそうさん」

「ねえねもつとたべないと大きくなれないよ？」

「ゴルシくらい大きくなろうよー」

「やかましわ」

食事の後は例によつてベルちゃんと一緒にお風呂に蹴り込まれた。もう二回目だから動

じゃないぜ。

「背中、流そうか？」

はいごめん無理でした鼻血吹きそう。湯気越しに見える身体は刺激が強すぎた。笑いたきや笑え、アタシは意外とチキンハートなんだよ。

「お、おう……頼む」

非常に優しい感じで背中を柔らかいボディスポンジでこすられるので、くすぐったくて仕方がない。気を抜くと恥ずかしい声が出そうなアレだ。

「ぬおお……」

「どうしたの？」

「世界平和について考えている」

わりと本気の答えだったが、ベルちゃんからは呆れ度1000%の返事が返ってきた。

「どこか頭ぶつけた？」

「ベルちゃんや、アタシのことを何だと思ってるのさ」

「元不良、学園の生徒のほとんどを誑かして壊した悪魔、授業サボり魔、学園のアンタツチャップル不可侵領域」

「ひでえ奴だなそいつは。面を拝んでみたいもんだ」

「そこに鏡あるよ」

「ぶー」

「そして、あたしに絵を描いてくれて言ってくれた最初の人、家族以外で話したはじめての人、あたしにいろいろ道を示してくれた人、レースをいつも観てくれた人、一緒に旅行してくれた人、そして」

「あたしが、初めて好きになった人」

ハートを文字通り射貫かれ、ベルちゃんに対してできた返事は非常に間が抜けたものだった。

「……そうか」

「反応が淡泊すぎてちよつとむかつく」

「知ってるかベルちゃん、驚きが極限に達すると逆に反応が鈍くなるらしいぞ」

「それ、だいぶ前に同じこと言ったよね。あたしの名前を明かさないといけなくなった時

だったっけ」

「ああ、そうだったな」

自分でも驚くくらい平静さを保った喋りができているものの、これはあと一步で気絶する。ここまで弄もてあそばれると、少しばかり仕返ししたくなつた。

「なんかくやししいから、アタシもベルちゃんについてどう思っているか洗いざらいぶちまけてやる」

「ひどいこと言つたら泣くから。そしてタマモさんに成敗せいばいしてもらうから」

「ぼ、暴力と脅迫きょうはくには屈くつしないぞ！」

「ふふつ、冗談。何でも話していいよ」

「覚悟しろよ」

泡を流してもらつた後、今度は入れ代わつてベルちゃんの背中を流す。

「ベルちゃんは初対面しよたいめんからかわいかつたな」

「あたしを心臟発作しんぞうほつさで殺す気？」

「そこまで反応してくれたら嬉しいけど死ぬなよ。経緯はアレだけど、学園でほぼ孤立状

態だったアタシに声を掛けてくれた数少ない女の子だった。突然頼んだけどその後綺麗な絵を描いてくれた。追い払っても追い払ってもとことこアタシの所に現れるのはわんこみたいだった」

「むー」

「アタシが旅に出ようとした時にパジャマ姿で止めに来た時はかわいすぎて死ぬかと思った」

「忘れて」

「写真に撮りたかったけど、もしそれをやってたら今頃アタシは昇天してこの世にいなかったかもしれない。死因はデジタルと同じ尊死」

「忘れて……」

「ドロップアウトしたアタシと違ってレースも頑張ってるすごいと思った」

「うう……」

「去年の有馬の時、公園の片隅で髪ぐちゃぐちゃ、べそべそ泣いてうずくまって震えていたのを見た瞬間、実は温かく抱き締めようか欲望のまま襲おうか迷ったのはここだけの秘密だ」

「もしもしポリスマン？」

「勘弁してくれ女王様」

「騎士なんだから不埒ふちやちな真似はしないで」

「おう、騎士のこと覚えててくれたか」

「うん。でも、騎士に守られるだけのか弱い女王じゃなくて、ともに立ち、ともに守る対等の存在でありたい」

「ベルちゃんはアタシのことを十分すぎるほど守ってくれてる」

「そう、かな」

「そうだぞ」

心の底からわき出すままにつらつらと喋ってきたけど、これをはつきりと言いたい。

「そしてさ、そんなベルちゃんを、好きになつたんだ」

「……そう、なんだ」

「なんか、反応が淡泊すぎてちよつとむかつく」

「知ってる？ 驚きが極限に達すると逆に反応が鈍くなるらしいよ」

「……フツ、ハハツ、アハハハハツ」

「ふふつ、ふふ、あははつ」

ふたりして笑い合っていたらちよつと湯冷めしたので、一緒にお湯に浸かった。ぎゅうぎゅうのお風呂でびったりくつついていて、足を伸ばしてリラックスなんてあったものではない。でも心はリラックスできていた。

「えらい長かったなあ。次うち入るんやけど、風呂に水入れてお湯冷さました方がええか？」

「ゴルシとかのじよさんほかほかー」

大師匠の冷やかしを軽くないなせるくらいには余裕が出てきた。

夜、例によつて雑魚寝で、アタシとベルちゃんは今度も隣どうしだった。

「隣どうしで並んで寝る、夜中、何も起きないはずはなく……」

「別に何も起きなかつたよね。一週間同じ布団で寝てたけど」

「前提が変わつちやつたでしょうが女王様」

「まあ、確かに今日、お互いの気持ちは確かめあえたかな」

「そうだな」

さてどうしたものか。

「ベルちゃんや。実はアタシ、今めっちゃギラギラして内なる衝動と闘たたかってんだ」

「どんな衝動？ だいたいわかるけど」

「小悪魔め。……ぶっちゃけベルちゃんを襲襲いたい」

「おおかみ」
狼おおかみにジョブチェンジ？」

「熊くまかもな」

「ふふ……実はあたしも同じだつて言つたら驚く？」

「——ハッ！ 驚き過ぎて魂があべのハルカスのでっぺんまで飛んでつた」

「戻つて来られてよかつたね。……そうだね、あたしも心の衝動を解放したら、あなたを

襲襲つてめちやくちやにするかもしれない」

「それは恨うらみみで八やつ裂さきにしたいというやつか？」

「違うよ。知つてるくせに」

「知つてたぜ」

「この衝動は、たとえばなら私の名前の由来、犬のドーベルマンが外に向けるものに似て

いるかもしれないね」

「ほう」

「でもね、ドーベルマンは、家族と認めた人には優しいんだって」

「なるほどな。ベルちゃんにとってアタシはどっちだ？ 衝動を向ける『外』か、それとも優しさを向ける『内』か」

「……両方、かな」

「その心は」

「こう、ふんわりとした、いつまでも寄り沿っていたい気分と、欲望に突き動かされるままに荒々しくすべてを手にしたい思いと、その両方を一緒にあなたに向けている感じ」

「なるほどな……じゃあアタシも一緒だ」

「そう、なんだ」

「でもビックビクさ。何かの拍子ひょうしにもう一押しがあつたら、もうベルちゃんを襲っちゃつて、その先はどうなるだろうな、メジロの追手おうてにやられるのが先か、世界的に誰も手出しできないようになるのが先か」

「うちからの追手は来ないよ」

「ええ？」

「あたしとあなたの関係は、もうおばあさまも公認だから」

「ええええ？？」

なんかとんでもないところまで話が進んでいたみたいだが。

「でも、まだ公の場で私達付き合ってますアピールを堂々とするのは待て、だって」

「うっす」

「ところで、もし今あなたにもう一押ししたら、どうなるのかな」

「そりやあもちろん……ベルちゃんに触れて……触れた瞬間鼻血吹いて気絶する」

「へたれ」

「そういうベルちゃんはどうなんだ」

「もちろんあなたに抱きついた瞬間に恥ずかしさマックスで気絶ね。多分朝まで起きないと思う」

「両方気絶して無様な姿をさらすカップルとはな」

「はじめてでもないはずの夜、一瞬で気絶した二人の間に何も起きるはずがなく……ふ」

「ふっ」

「なさけねー」

揃いも揃ってへっぽこを極めた新カップル。しかし、これはいつまで続くか全く分からない。もしかしたら明日までかもしれないし、年末まで、来年まで、再来年まで、十年先までかもしれない。皆目見当もつかない。

でも、ベルちゃんと一緒にいる時は、この先に待ち構えている、確実に来る永久とわの別れへの恐怖を忘れていられた。

第五章 最後の春の始まり

翌日、ベルちゃんはメジロ家の迎えで伊丹空港へ行き、北海道のメジロの本邸へ飛び立った。GI制覇を重ねるにつれて、もろもろの挨拶回りが今まで以上に立て込んで大変らしい。アタシもぼちぼち学園に帰り、仕事に精を出した。

年末に向けて、毎週のようにGIのレースが各地のレース場で開かれる。学園に流れるピリピリした雰囲気やわが和らいでいる唯一の場所、食堂の安心安全快適を守るために奮闘した。

「へえ、有馬のファン投票で三位？」

「はい。今回も選ばれました。ドーベルさんは出場すると決意表明してくれましたので、

私はそれを尊重し、支えます。勝つ実力はあると信じています」

「今回参戦を表明しているのはエアグルーヴに……おう、ブライトも出るか。こっちは投票三位と」

「ドーベルさんにとつては、エアグルーヴさんとメジロブライトさんが意識する選手の筆頭になりますね」

「ひとつ下は……セイウンスカイ、グラスワンダー、キングヘイローか。セイウンスカイの菊花賞はすごかったなあ」

「ええ。悔れません。グラスワンダーさんは長期休養明け後二戦の成績がなかなか伸びませんが、昔ここでトレーナーをしていた伝説の評論家がトレーニングの見学に訪れて『あの子は完全復活するよ』と仰っていたのが気になりますね。キングヘイローさんはダービーこそ大敗ですが、あとはきっちり掲示板入りしています」

他の選手が気になるとはいえ、最後はベルちゃんの力がモノを言う。アタシにできるのは料理人と相談役。それを果たすのみ。

「ベルちゃんは明日帰ってくるんだったな」

「はい。帰ってきたら調整しつつ、あと半月で万全の状態にもっていきます」

「じゃあアタシはその辺をうろつきつつ料理を作る役で」

「よろしくお願ひします。年末、祝杯しゆくはいをあげられることを願つて」

クリスマススイブ。有馬記念が三日後に迫り、リラックスがてらベルちゃんのトレーナーの部屋でささやかなパーティーを開くことにした。さつそく準備をしようとしたが――

「なんでトレーナーはベルちゃんをそのままくっつけてここまで来るんだよ……」

「すみません。ドーベルさんのご友人への根回しが間に合わず」

「あの、もしかしてあたしがいちやまずかった……?」

しゅんとした顔でたたずむベルちゃんの頭をわしわし撫なでて、半ばやけくそになって袋の中からクラッカーを取り出して盛大に鳴らした。

「クリスマスだオッラーン！ 食堂から手作りケーキ取ってくるから待つてろ！」

「ええ……」

「ゴールドシップさん、食堂の冷蔵庫を使うのは職権濫用しよつけんらんようなのでは……?」

調理場に駆け込むと、最強のおば様・食堂調理部のボスが仁王立におうちしていた。

「ゴールドシップ……食材を勝手に使つてケーキを作り、冷蔵庫を占拠せんきよした罪……貴様の愛に免じて許す。次はないぞ？」

「押忍おす！」

温情に感謝して、ケーキを持つてトレーナー室に駆け戻つた。

「えつと……この大きさのケーキを手作りしたの？」

「おう、全部作つたぞ」

「これだけの材料、いつの間に揃えていたんですか？」

「国家機密だ」

「……まあいいでしょう。他に何か買つてきましたか？」

「心配ない。そろそろ届くはずだ」

しばらくすると、トレーナー室のドアをノックする音が聞こえた。来たようだな。

「こんにちはー、メジロドーベルさんのトレーナーさんの部屋はここで合つてますか？」

「おう、ここだよ！」

アタシが返事をする、と、ぞろぞろと十数人の生徒が入つてきた。

「みんな！ どうして？」

「ゴールドシップさんに声をかけられて、クリスマスパーティー兼ドーベルちゃんの壮行会を開くって聞いて」

「ベルちゃんめっちゃ頑張ってるでしょ？ せっかくだし何か応援できたらなって」

「これプレゼント！」

ベルちゃんのクラスメイトにパーティーに来ないかと声を掛けておいたのだった。初めはアタシみたいなのが近づくと思はれると怖がられると思っていたけど、イメージ改善は思ったよりも進んでいたらしい。

ベルちゃんのクラスでのアタシは「クラス一可憐で強い女王様に仕える美しい騎士にして食堂の姉御」という、喜ぶべきかどうか少し迷うイメージがついていた。そのためかかなりフレンドリーな感じで接してくれて、アタシの誘いにクラスのひとつ、というか今日用事がない子は全員来てくれた。さすがベルちゃん。

「ありがとう……」

ベルちゃんが感極まって泣きそうになったので、ここはクラスメイト諸君へのリップサービスも兼ねてあれをやるか。

「ベルちゃん、泣くにはまだ早いぜ」

パチツ、と指を鳴らして空中からハンカチーフを出現させ、さらにその中からガーベラの花束を取り出した。——フジキセキに弟子入りしてずっと練習してたけど、無事二段構えの技が成功してほっとしたぜ。

「ほらよ、アタシからのプレゼント」

色とりどりのガーベラ十一本で作った花束を差し出す。まあ、いろいろと調べて意味を込めたり込めなかったりしたけど、すぐに伝わらなくてもいいや、むしろ恥ずかしくなる。

「あ、ありがとう……」

この感じ、伝わって……はないな。ちよつと残念なような、ほつとしたような。でもなんかまわりの連中には伝わってしまったみたいだった。ベルちゃんのクラスメイトたちがめっちゃ興奮して声を出さずにはしゃいでいるし、横のトレーナーも憎^{にく}たらしいくらいニコニコしてやがる。でも肝心の本人には、なあ。

気を取り直して、高らかに宣言した。

「よし、じゃあパーティーいくぞー！」

「かんぱーい！」

トレーナーのミスで時間がかかり繰り上がってしまったけどまあよし。ここはいつちよ隠しておいたワインでも――

「ゴールドシップさんは未成年ですよね？」

「実は百二十歳だって言ったらどうする？」

「学園や警察は自称の年齢を考慮こうりよしてくれませんよ。書類の通りに処理しますんで」

「ちえっ」

「第一、今のあなたなら酔っ払わなくても楽しいでしょう？」

「それもそうだな」

クラスメイトと楽しそうに笑うベルちゃんの姿を見ながら、有馬記念に向けてアタシも気合を入れ直した。

翌日、仕事が休みなので学園をぶらついた後ベルちゃんのトレーナー室にしけ込んでいたら、ベルちゃんが来た。ベルちゃんはアタシの姿を見た瞬間、顔を真っ赤にして目を背けてしまった。

「……花束の意味、後で友達に教えてもらった……ありがと」

「おう」

「よかったですねゴールドシップさん。無事伝わって」
「うるせえ」

十二月二十七日、中山レース場。この一年を締めくくるGIレース・有馬記念には例年通り多くのファンが詰めかけていた。会場の熱気は午後になるとさらに増し、それに比例するように選手控室の側の緊張も増していた。アタシとトレーナーはベルちゃんの控室で念を送っていた。

「あの……二人して何やってるの？」

「念を送っている」

「念を送っています」

「逆に緊張する」

「じゃやめよう」

緊張すると言いつつ、ベルちゃんの表情は結構落ち着いているように見えた。でも外は今年もすごい雰囲気だしな。とはいえ、あとは全力を傾けるだけ。かたむ

「ベルちゃんの力はこのアタシと、トレーナーが保証する」

「全力を發揮するだけです、行きましょう」

「……うん」

力強く握手して、ベルちゃんを見送った。

最高潮に達した熱気と、ともに漂う厳かな雰囲気の中、第十一レースが始まった。

発走委員が壇上だんじょうに上がるだけで歓声上がり、旗が掲げられてファンファーレの演奏が始まった。自然に手拍子てびょうしが広がり、演奏後の大拍手とともにひととき大きな歓声が上がった。十六人の選手がゲートへ向かい、待機する。ベルちゃんは大外の十四番からのスタートだった。双眼鏡越しに見えるベルちゃん表情はやや硬いけど、これは会場の雰囲気相応なので問題はないはず。

「トレーナー、ベルちゃんはいけそうか？」

「信じます」

「そうだな」

ゲートが開いた。外回りコースむしろうじょうめん向正面からすぐに第三コーナーに達し、第四コーナーから最初のスタンド前。歓声が大きくなる中選手が駆け抜けて行く。セイウンスカイが先

頭をいき、ベルちゃんはやや前寄りにつけていた。表情の硬さは変わらず、……また焦りが出ています？ 隣にいるトレーナーの表情もやや硬かった。

「どうだ？」

「少々、念を送り過ぎたかもしれません」

「まじか……」

ベルちゃんは第三コーナーあたりから最終コーナーまでは二番手を行ったものの、後続に追い越され、九着に終わった。一着はグラスワンダー、二着はメジロブライト、女帝・エアグルーヴは五着だった。肩で息をしていたベルちゃんは、そのままスタンドの方を見ることがなくコースを後にした。

「では、控室に行ってください」

「わかった」

ウイニングライブをどの位置から観るかは迷ったものの、ガチガチに緊張させてしまったせいかもしれないという引け目があったので、最後方から隠れるように観た。バックダシサーを元気に務める様はさすがプロだと思った。

帰り、ベルちゃんのトレーナーから『ドーベルさんがもしかしたら今夜そちらに行くか

もしれないので、その時はよろしくお願いします』とのメッセージが届いた。まあ、来るだろうと思うし、むしろ来てほしい。食材を多めに買っておかまいと思つて、寄り道したスーパ―で二人向けのメニューを考えつついろいろと買い込み、帰宅。ベルちゃんも玄関の前に小さくなつて顔を埋めて体育座りしていた。

「お疲れ、中入れよ」

返事はなかつたけど、よろよると立ち上がったので、半ば押し込むようにして部屋に入れた。

手洗いうがいをさせ、こたつに案内すると、入ったとたんにぺたんと頭が天板にくつついてしまった。耳もへナへナ、尻尾もへナへナ、雰囲気かどんよりとしている。これはいけねえ。

「ちよつと待つてな。鍋焼きうどん作るわ」

どつちで作るか。いい感じの小さい鍋とか無いしな、デカイ土鍋で作つて取り分けるスタイルで行くか。食堂で鍛えまくつたゴルシ様の手にかかればチョコチョコイのチョコイ！

「できたぞー頭どけなー」

ベルちゃんが顔を上げた。こたつの上に置いてたコースターの上にそのまま顔をくっつけていたせいで、ほっぺたに見事にコースターの跡がついていた。鍋敷ぎを持って来させて、その上に土鍋を据えた。

「すごい……」

「へへん。料理人ゴルシの本領発揮だ」

深めの皿に取り分け、いただきますと手を合わせて食べ始めた。小さい口でちゅるちゅるとうどんを吸うベルちゃんは小動物っぽいかわいらしさであふれている。どんよりして光を失っていた目に少しは元気が戻ったか。

食べ終わった後、片付けを申し出たベルちゃんをこたつに押し戻し、綺麗に洗って片付けてからアタシもこたつに入った。近くのみかん箱から十数個みかんを出してきてピラミッドを作る。

「みかんはいいぞ。ビタミンが豊富だ。何より甘くてうまい。こたつによく合う」

「……いただきます」

みかんをむいてもくもくと食べるベルちゃんもかわいらしい。最高だね。抱き締めた。抱き締めて、そして二人して気絶して朝だわ。本当に何もあつたもんじゃない。

「今日、残念だったな」

「……………」

あ、まづい。またどんよりモードに急落してしまった。どうする？ 気絶覚悟で抱き締めてよしよししに行くべきか？ 心配半分、欲望半分で動けずにいると、ベルちゃんを口を開いた。

「もしあなたが有馬記念を走ったら、どんな結果を残せる？」

「アタシか？ いや無理だわ。走る方の筋肉じゃなくて鍋振り回す方の筋肉になっちゃまってるし、もし出ても大差シンガリ入線で大敗北するのが関の山だ」

「じゃあ、もし、あなたがずっとトレーニングして出ていたとしたら、どのくらい行ける？」

「そりゃ一着だ。アタシの全盛期のパワーならな」

適当なフカしでもなく、過去のループの結果も振り返りつつの実感だった。有馬記念にたどり着けたループでは少なくとも一回は一着を獲れた。早い時だとクラシック級の時にかつ攫ったこともあった。全盛期を過ぎてから出た時はずっと後ろでゴールすることもあったけど。

「やつぱり距離適性かな」

「もともとの距離適性評定だとマイルと中距離が高かったんだっけか」

「体型とか筋肉の具合とか見てもらったら、長距離はあまり力を発揮できないかも、というの言われてた」

「有馬はスタミナも一段といるしな」

「二年続けて同じような着順だったし、やつぱり、無謀だったかな……」

「ファンの支持を受けて、己の全身全霊をもつて挑み、全力を出し切って走り切った。何も恥じることはない」

「そうかな……」

「そうだ。ベルちゃん、ゴールした後スタンド見ずに帰っちゃったろ？ アタシらの近くにいたベルちゃんのファンがもうちよつと姿を見てたかったってちよつと残念がってたぞ」

ベルちゃんの顔が上がって、ようやく目が合った。

「ファンはちゃんと分かっているもんだ。そりゃ、推しが一着になってくれれば最高だ。でも、距離やコースとの相性が良くないかもしれないと悟っているファン、悪く言えばさ、

ベルちゃんが一着にならない可能性が高いと分かっているファンだって、ベルちゃんが走ると決めて走るから、その意志を全力で応援しようよと、人気投票で票を投じてスタンドで声を枯らすんだ」

とはいえ、アタシだってあんまり偉そうな説教はできた身じゃない。何度目からのルールで挑んだ三回目の宝塚記念で、スタート前に隣のゲートにいた奴のことが妙に癪に障つてな、つい因縁つけちまったことがある。あの時はゲートを飛び出すのが盛大に遅れた。なんとか集団の最後尾までは追いつけたけど、まあ及ばねえわな。

ゴールはドベから二番目の十五着。気まずくて三日間トレーナーから逃げたし、URAのお偉いさんからめちやくちや説教されて、反省文も書かされた。ちなみにそのルールは反省文を書き上げた夜に終わってしまったって、次のルールに飛ばされた。アタシの徹夜の苦勞を返せ。

「そうなんだ……」

「だからな、胸張って堂々としてればいいんだよ」

「……ありがと」

ようやく笑顔を見せてくれた。アタシもつられて笑顔になった。

「あー、でも、もし去年みたいにベソベソ泣いた震えるわんこになってたら、今度こそ襲ってたな」

「ヘンタイ、弱つてるところにつけ込む悪魔、そんな時でないと襲えないへたれ」

「ズケズケと言ってくれるなあベルちゃん。泣くぞ」

「泣いたところで、あたしがそこにつけ込んで襲っちゃおうかな」

「おおこわこわ」

元気になってくれたベルちゃんを送り出してこたつに戻り、このループでの三年目の終わりをしみじみと感じた。果たしてあと何年、このループにいられるのか。一番いいのはこのクソツタレな現象がこの回限りで終わってくれること。

ループが打ち切られる条件は、アタシ自身が走っている時は、チームメイトにマツクイーンがいるかどうかだったり、他何人かのメンバーの存在、アタシの成績との関係みたいなものが少し分かったりしていた。ほぼ確実だったのが、アタシがメイクデビューかG I レースで大敗した時。それこそさつき出した宝塚記念がそれだった。

ただ、今回は今までと違って、アタシはループの起点から一切走っていない。ベルちゃんに出会うまでは、まわりともほとんど没交渉ぼつこうしやうだった。チームメンバーもいなければ、

レースの勝ち負けも何もない。何かとんでもないことがきつかけで不意に終わってしまうかもしれないし、打ち切り条件が何もない以上終わらずに行けるかもしれない。昔はもう早く終わってしまったと投げやりになっていたけど、今はもう、永遠に終わってほしくないと思うようになっていた。とにかくループ打ち切りを回避したい。久々に初詣はつもうでに行つて、過去の悪事を全部懺悔ざんげして、せめてこの願いだけは聞き届けてほしいと土下座するしかない。

元日。日の出前に家を出て、ちよつと離れた山の上の神社に初詣に行った。人がかなり多くて、列を作つて待つたけど、思つたよりも早く順番が来た。懺悔と願い事が多い分、お賽銭さいぜんを手厚く納めた。諭吉先生ゆきち、どうか神様への取り成しを頼む。

おみくじを引くと小吉だった。説明には「願い事は叶かない難がたいが、日々神を意識し正しく生きることで、大切なものを残せるであろう」とあつた。ちよつとしよっぱい託宣たくせんだったけど、少しでも可能性があるなら頑張らないとな。

ちようどベルちゃんからあけおめメッセージが来たので、山の上から見た朝の景色の写真をつけて返信した。

『ひよつとして初詣もう行つた？』

『ああ。ふと思ひ立つてな』

『明日一緒に行けないかな？』

『いいぞ』

気分が良くなったから、ちよつとお屠蘇とそを一升しやうくらい飲んで邪氣を祓はらいに祓はらいまくるか。家の中に転がしておいたあの高い日本酒でな。ループした分実際に過ごした年数を加算したら百二十歳になるということで許してくれ。

——で、適当につまみを買って家に帰り、さつそくひとり邪氣を祓はらっていたらいつの間にか酔いつぶれて寝てしまっていた。翌朝、二日酔いでふらふらしながら一升瓶やら何やらを片付けてシャワーを浴びて証拠隠滅しやうこいんめつしたものの、家に来たベルちゃんが酒の臭においを感じ取ってカラッポになった一升瓶を見つけてしまった。

当然ながら、正座させられてしこたま説教された。あんな怖いベルちゃんは初めて見た。そしてその後、二日酔いに効く栄養ドリンクを買ってきてくれて、さらに看病もしてくれた。

「ああ、ありがてえ……ベルちゃんに看病されるのはいいもんだな……」

「反省が足りないようね。次やらかしたら二十四時間監視するから」

「SP張りつけるのは勘弁してくれ」

「何言ってるの？ あたしが直接監視するに決まってるじゃない」

「ベルちゃん、お酒のニオイにあてられて酔っ払ってない？」

「酔ってない。このバカ」

「ごめんなさい」

昼過ぎには頭痛が収まったので、午後には神社に行くことができた。ベルちゃんが何やら熱心をお願いしていたけどその中身は教えてくれなかった。

「改めて、あけましておめでとう。今年もよろしく」

「おめでとう。こちらこそよろしく」

ベルちゃんがシニア級二年目を迎えた。

まずは二月末のG II・中山ウマ娘ステークスに出て、その後G I・安田記念に出る構想だとベルちゃんから聞いた。現時点で中山ウマ娘ステークスに出ると表明している顔ぶれを見ると、ベルちゃんの力であれば安定して勝利できることが見込まれた。全力を發揮で

きるようコンディションを整えていく方に比重を置くらしい。アタシは仕事半分、トレーニングの見守り半分といった形で参加した。

見守りついでに、今回のループでは初めてコースを走ってみたりした。何もしないままもう五年近く経ってしまつていたため、基礎トレーニング相当のところから始めた。

当初は、頭の方は走るときに筋肉の使い方を覚えていたものの、身体の方がついていかない感じだった。半月くらいするとベルちゃんの併走相手として、強めの併せにも付き合えるようになった。

「くやしい……もう一回!」

「今日はここまでです。ゴールドシップさん、短期間でここまで伸びるとはすごいですね。今からでもトウインクル・シリーズに出てみませんか」

「遠慮しとく」

アタシはもうこのループでは公式レースには出ないと決めている。併走は頼みがあれば誰の相手でも引き受けるつもりでいて、実際ベルちゃんと初めて併走して以降、それを見たらしい子達やトレーナー達から何件か話が来ている。このことをベルちゃんに言うと、

「いいんじゃない、やれば?」

とめつちや冷え冷えとした口調で返された。耳が絞られていて、目に見えてむっすーと
している。

「も、もちろんベルちゃん最優先だぞ？」

「当然でしょ？」

言葉こそつつけんどんだったけど、尻尾を見たら機嫌が直っているのは分かった。会っ
てから三年でツンデレの概念を獲得したらしい。よい傾向だな。

「お疲れ様でした。ドーベルさんはこのあと打ち合わせをしたいのでトレーナー室へお願
いします。ゴールドシップさんはお仕事でしたっけ」

「おうよ。学園のカワイコちゃん達のご飯をたくさん作らねえとなア痛ッ！」

脚と脇腹に激烈な痛みがツツツ！！

「グオオオオオ……ッ」

「……うわきもの」

フィールドに倒れ伏したアタシにだけ聞こえるように小さく、ゾツとするような恨みが
ましいい声音で呟いて、ベルちゃんは去って行った。

「ゴールドシップさん大丈夫……ではなさそうですね」

「的確に人を行動不能に追い込む一撃だった……」

「恋する女性には時に恐ろしいものです」

「だな……ベルちゃんの嫉妬パワーがこれほどまでとは」

「本人は自覚してなさそうですね」

「仕方ねえ、そういう年頃だ」

「なんか人生経験豊富な姉御みたいな語り口ですね」

「言つたら？ アタシは百二十歳だつて」

「百二十歳ならもうちよつと嫉妬されないような良いあしらい方をお願いします」

「すまん、女の子を誑たぶらかす悪女歴は一年以上あるけどよ、ピュアな恋愛は経験二か月でし

かも一人目だ。デコと背中に若葉マーク貼らねえと」

「他の子の話は避けた方がいいですね。彼女は他の人は決して傷つけませんが、ゴール

ドシップさん相手だと容赦ようしやしなさそうですね」

「肝きまに銘めいじるぜ」

アタシに容赦がないのはメジロ一族ならではかもしれない。以前のループでのマック

イーンのことを思い出しつつため息をついた。

ベルちゃんから受けたダメージは癒えたものの、少々の浮気心を反省して仕事は休んだ。

中山ウマ娘ステークスの本番の日。少々野暮用があつたので、レース場に着いたのはレース直前になってからだった。関係者席でトレーナーを見つけて隣に座った。

「どうだ？」

「問題ありません」

「あとは時の運だな」

レースが始まり、ベルちゃんはいつも通りのレース運びで進む。第三コーナーで先頭に立ってこのまま駆け抜けられるか、そう思ったら後ろから来た子に差し切られてしまった。二バ身差だった。

レース後、ベルちゃんはこちらを見て、少し申し訳無さそうな表情を浮かべた後、フィールドから出ていったが……

「トレーナー」

「ええ、ほんの少しですが、脚あしの感じに違和感がありましたね。ちよつと医務室に連れて行きます」

「何かあつたらすぐ連絡くれ」

トレーナーが急ぎ足でバックヤードの方に消えた。なんだろうな……骨は折れちゃいな
いだろうが。

『けんしやうえん 腱鞘炎疑い、再検査』

トレーナーから来た短いメッセージを見て、ただちに病院に急行し、広い待合室の片隅にいたベルちゃんちゃんとトレーナーのもとに駆け寄つた。

「大丈夫か？」

「腱鞘炎になつてゐるつて。大丈夫。心配ない」

左脚に湿布とテーピングをされたベルちゃんは何でもないように振る舞つていたけど、どこことなく不安そうな表情をしていた。

「ただ、くつけんえん 屈腱炎の前駆ぜんく症状でないかどうかを慎重に見極める必要があるとのこと、当分休養せよとの診断が下りました」

「また、走れるかな……」

「この腱鞘炎がそのまま収まってくれば行けるが。屈腱炎になると、なあ」

「……あたしからレースを取ったら何が残るんだろ……」

トウインクル・シリーズで走る選手が誰も抱く不安を、ベルちゃんは口にした。

多くの選手は若いうちにその最盛期を迎え、その先は引き続きレースを走るか、トレーナーなど現役選手を支える立場になるか、別の道を探るかを、比較的早い段階で選ぶことになる。しかもその時は自分の計画通りであるとは限らない。怪我による突然の引退は頻^{ひん}繁^{ばん}にある。

ベルちゃんの場合は、どのような道があるだろうか。意外と多そうな気はする。

「ベルちゃんはさ、絵描くの得意だよな」

「得意と言つていいかどうかは分かんないけど」

「得意だ。アタシが保証する」

「うん……」

「絵を描く仕事とかでも名を上げられそうだ」

「そう？」

「画家、イラストレーター、漫画家、これでまず選択肢が三つ」

「画家は無理かも」

「次は……大師匠のこのちみっこ達に懐かれてたし、先生とか保育士とか」

「懐かれてたの？ どちらかというとなあなたの方が」

「いやベルちゃんの方が懐かれてた。アタシが保証する」

「また保証してくれるんだね」

「保証人だけ。あ、でも連帯保証人はダメだ」

「なんの話？」

「まあとにかく、道はいろいろありそうだってことだ。たぶん自分自身よりも、まわりの人に見てもらった方が意外なものが見つかる」

「そう言われると、なんかどうにかなるような気がしてきた」

「なんだったら、アタシのヒモでもいいんじゃない？」

「言い方」

「アタシが学園で食堂を仕切つてさらにコーチなりトレーナーなりしたら、ベルちゃんは食っちゃ寝してても暮らせるぞ」

「いろんな意味で嫌」

「やっぱヒモは無理か」

「完全に頼り切りで支えられてばかりなのも嫌だし、……学園は女の子がいっぱいだからうわきしそうだし、逆に取りられそうだし」

「なんかベルちゃんずいぶん嫉妬深くなつたのではございませんでして？」

「そうだね。超重い女になつたよ。あなたのでいで」

言葉に反してとてもサバサバした口調で楽しそうに言った。明るくなってくれたよかつた。

「アタシのせいかな」

「うん。責任取つてよね」

「……ああ」

高い確率で空手形からてがたになることは分かつていても、今思うその気持ちは確かにそうで、その約束が果たせるよう、運命が変わることを祈らずにはいられなかつた。

トレーナーが帰つてきたので、アタシは一足先にお暇いしますることにした。ベルちゃんが春いっぱい休みになってしまったので、アタシもベルちゃんにも時間がたつぷりできた。

せつかくなら有意義に過ごしたい。

どのように過ごそうか考え、やはり長期の休みならではの旅行をしようと決めた。ベルちゃんはどうしようか。一緒に旅行できたら楽しいこと間違いなだけど、炎症がある状態の脚で歩き回らせるわけにもいかない。今回はちよつと過酷かこくなルートを実践してみようと思ったので、まずは独りひとで旅に出ることにした。独りで遊んだら、その次はベルちゃんといろいろ回ろう。

偶然にも手に入った春休みの到来だった。

第六章 決戦旅行前夜

旅行準備も兼ねて、ベルちゃんの休養開始から一週間ほどは、食堂で勤労に励む日々を過ごした。我ながら、過去のループで保持していたハジケリストや奇想天外な危険人物という印象がどこかに行つてしまつてしまつていてるのを感じてしまつた。ゴールドシップではなくゴールドシップ Mark II と名乗つてもいいかもしれないな。

その週の週末、ベルちゃんからメッセージが入つた。

『両親、特に父が会いたい、つて』

ああ、ついに年貢の納め時が来たか。この世界ともお別れだな。せつかくベルちゃんと仲良くなれたのにな。最期に一目会いてえな、ハハハハ……

土曜日。正装に身を固め、手土産てみやげを持参してベルちゃんの住む大邸宅ていたくを訪問した。幸いにして門をくぐった瞬間に現世と今生こんじょうの別れをする事態は避けられた。メイドさんの案内で応接室に通され、ベルちゃんのご両親とベルちゃんに出迎えられた。

「ようこそ、来てくれてありがとう」

「直接お目にかかれて嬉しいです」

「は、ゴールドシップと申します。こちら、つまらない物ですが」

カクカクした動きで挨拶をして、勧められるままにソファに座る。

「どうぞ楽になさって」

ベルちゃんのお母上が声をかけてくれたけどさすがにこの状況でリラックスするのは難しい。脇に座っていたベルちゃんは、なんだかとても居心地いこちが悪そうな顔をしていた。

「……うん。良さそうな人で安心したよ」

「へ？」

突然お父上から褒めほめられて間抜けな声が漏れてしまった。

「メジロ家はトウインクル・シリーズとの関わりが深く、今現在もドーベルをはじめ多く

の子がトレセン学園にいる。もちろん、ゴールドシップさんの話も様々な筋すじからいろいろと伺うかがっていた」

やはり、その点は気になるし、調べているに違いなかった。学園を崩壊させる悪事を働いていてそれが外部に知れ渡らないはずがない。ましてや自分の娘がその張本人のそばにいるのだから。

「もちろん、娘を傷つけるようであればすぐに遠ざける意志を持っていた。でも、比較的早い段階でその必要はないと思ったよ」

「どうして……」

「ゴールドシップさんと交流するようになってから、ドーベルはとても明るく元気になった。トウインクル・シリーズで活躍するまでに成長したことも嬉しかったけど、それ以上に、楽しそうに学園生活を送っている様子が伝わってきて、本当に嬉しかった。貴方あなたにはとても感謝しています」

お父上は笑顔で述べ、頭を下げた。

「そんな……アタシはいろいろ酷いことをして回って、素行そこうも悪いし、レースにも出ないし、ベルちゃ……ドーベルさんのことだつて適当にあしらつて、あわよくば襲襲つていいよ

うにしようとしていたくらいで……ロクな奴じゃないっす」

「うん。その自己評価はちよつといただけじゃないかな」

真面目な顔に戻って、人差し指を立てた。

「マイナス面ばかりを挙げるのでは不公平なので、私からゴールドシップさんのプラスの面を挙げよう。私、妻、ドーベル、そしてメジロ家一同が、ゴールドシップさんを良き人と見定めて、共にあるうと考えるようになった理由を紹介したい。そして、それほどに良い人を、娘のドーベルが好きになったのだから、卑下^{ひげ}するには及ばない、むしろ卑下するのはやめて胸を張ってほしいと思う」

「……勿^{もつ}体^{たい}無い言葉です」

少しうるつときた。最近でこそだいぶまわりとの付き合いを取り戻しつつあるとはいえ、長い間このような温かい言葉をかけられるようなことをしてこなかった。

それから、お父上が自身の、また、メジロ家の中でのアタシの評判を語って聞かせてくれた。マックイーンが起こした二度目の事件以降はともかく、一度目の事件の頃から二度目の時までだと、アタシはマックイーンをメチャクチャにした極悪^{ごくあく}非道^{ひどう}のウマ娘として憎^{にく}まれていたのではないかと思っていた。でもそうではなかったらしい。むしろアタシに対

してとても申し訳なく思い続けてきたとのことで、逆に恐縮おそまじやくした。

「……アタシがここまで立ち直れたのはベルちゃ、ドーベルさんのおかげで」

「ベルちゃんでいいんじゃないかな。父親としてはその呼び名を使う人が新たに現れたことに嫉妬あつたしなくもないけれどね」

お父上の言葉にベルちゃんが顔を赤らめながら頷いた。

「これからも、ドーベルのことをよろしくお願いします」

「こ、こちらこそ、よろしくお願いします」

一家総出で見送られつつベルちゃんの家をあとにして、街中を適当に散歩しつつ自分の家に帰り着いた。なんとというか、展開的には相手の親から交際を認められたような状態で、今更ながら恥ずかしくていてもたつてもいられず、床の上で顔を隠して転げ回りたい気分だった。そして実際に転げ回った。そんな中、ベルちゃんからメッセージが来た。

『明日からはまたお仕事？』

『いや、休み。明後日あさってからちよつと旅行』

『聞いてない』

『先週思いついたばかりでな』

『一週間くらい？』

『一か月』

『今からそつち行ってほつぺたつねっていい？』

『……わりい』

『いい。明後日何時出発？』

『朝五時だけど』

『わかった。逃げないでよ』

『まさかついてくる気か？』

『悪い？』

『いや、りよてい旅程が適当すぎて、普通に野宿のじやぐとか、ネットカフェみたいなどこでの仮眠とか入
れてるんだが』

『問題ない』

『問題大ありでしょお嬢様。ご両親に野宿でもいいか聞いてみな。ダメって言うから
しばらく間を置いて、次の返信が来た。』

『ダメだった……』

『そりやそうだ』

『だからあなたをあたしが泊まるホテルに招待すればいいって』

『なぜこうなる』

『それか、あなたの旅行先のところどころで会うような感じにしたらどうか、つて』

『それにしよう』

断ったところでベルちゃんはついてくる。ならば、きちんと安心安全な感じについてきてほしい。

次の日、仕事は休みではあるけれど、いつもとあまり変わらないような感じで学園をぶらついていた。いや、本当は授業に出てなきやいけない時間か。サボりすぎて忘れてたぜ。相変わらずサボりに関する処分は来ないままだった。

グラウンドの土手の片隅に寝転がり、雲の数を数えていると、ふと上の方から声を掛けられた。

「……ゴールドシップ、さん」

「マックイーンか」

視線を移すと、少し不安があるような、翳^{かげ}りを感じさせる表情のマックイーンがいた。昨年久々に会って和解した時は見る影もなく瘦^やせてしまっていたけど、少しは回復しただろうか。

「^{あめ}飴ちゃんやるよ」

「……いただきます」

持つべきものは飴ちゃん。かがんで近づいてきたマックイーンの手に二つほど飴を載せると、さつそく一つを口に入れて、ころころと転がしつつアタシの横に座った。アタシも飴を取り出して口に放り込む。しばらく、話さないまま飴玉を口の中で転がしていた。

「マックちゃん、あれからきちんと食ってだいぶもちもちに戻ったか？」

「……触ってみます？」

「そこは『セクハラはやめてください！』って頭はたくところだろ」

「……貴方にはもう手を出しませんわ。いえ、出さない決意が一割、出せないのが九割と
いった方が正しいでしょうか」

「どうということだ？」

「全ては私の自業自得、人に力を振るえなくなるならばむしろちようどいいことではあるのですが、愚か者の後悔を聞き流してくださるならば、少しお話ししたいと思います」

「最初に貴方を道連れにしようとした時のこと、貴方の意識を刈り取つてすぐに、私はメジロのSPと学園の職員に取り押さえられて、特別室に送られました」

マックイーンの声はかろうじて聞こえるほどに小さく、震えるようだった。

「本来は司法により処断をされるべきところ、目を覚ました貴方がライアンとじいや——執事長に取り成してくれたこと、貴方と血縁関係にある方がなぜか特定できなかったとのことで、この一件は学園とメジロによる内々の処理となりました。ほどなくして本邸へ移動し、おばあさまと会うことになりました。何を話したのかは覚えていません。ただ、その後、医師団とともに別荘での『静養』が始まりました」

「そつか……」

「でも、恩知らずだった私は一方的に貴方への恨みをつのらせ、ドーベルが貴方と関わりを持ったことに嫉妬し、それを『ドーベルが貴方に誑かされないように』などと言いつて、別荘から脱走しました」

「……………」

「変装の必要もありませんでした。恨みにより顔も何もかも、すべてが変わり果てた私に気づく者は誰もおらず、ローカル線の乗り継ぎだったので追跡も遅れたようで、難なくあの場所へ参りました。恨みつらみを衝動のままぶつけて、今度こそすべてを討ち果たそうとしたときに、ドーベルが割つて入りました」

「ああ……………」

「私は連れ戻され、今度こそ嚴重な監視下に置かれることとなりました。もつとも、ドーベルの諫言で己の浅はかさを深く思い知った私は、もうどこにも行く気はありませんでした。愛する人を一方的な思い込みで傷つけた私に、もはや生きる資格などないと」

「それは、」

「いえ、いいのです。全てを行つたのは私です。たとえ世間的には何もなかったことになつているとはいえ、あのようなことをした私が表に出るなど許されません。長くレースの世界からも離れて衰えつつあったこの身体ごと、消えてしまえたらよかつたのに、と」

「マックイーン……………」

「……………貴方に許された後、少しは食べるようにはなりましたが、もうかつての食べ過ぎて

太るなど、どんなに無理してもできなくなりました。そして、主に精神的原因からですが、ウマ娘としての身体能力を一切發揮できなくなりました。さらに、実は……貴方ははじめ多くの人に触れるのが怖くなりました」

「！」

「私はもう全てを失いました。いえ、正しくは全てを愚かにも打ち捨てた、ですわね」

沈黙。アタシはマックイーンの腕を見た。あの時より多少ましになったとはいえ、およそ現在のループの昔の記憶や、過去のループの記憶にある全盛期にはほど遠い、不健康ともいえる痩せ方をしていた。筋肉だけでなく骨も十分でないように見え、おそらく、アタシや他のウマ娘の力があれば、容易に折ってしまうことができるに違いなかった。そんな腕に軽く触れ、持ってみた。

「ひやつ」

「……なんだか、か弱い深窓の令嬢みたいな腕になっちまって……アタシの方が泣けてくるくらいだ」

腕を優しく触る。レースに出ているマックイーンは肌が綺麗で、夏場は健康的な日焼けをしており、まさにアスリートといった感があった。しかし今のマックイーンは肌が青白

くなり、どちらかといえは病弱な印象さえ受けてしまうくらいだった。

「どうして貴方が泣くんですの……」

気がつくと、本当に自分の目から涙がこぼれていた。そして、マックイーンも泣いていた。

「わりい……」

お互いの涙が止まるまでしばらくかかった。

「なあマックイーン、アタシさ、明日からちよつと旅に出るんだけど、一緒に来てみないか」

「え……？」

「どうせ東京の屋敷でも大抵引きこもってんだろ。ちよつとは気分転換が必要だ」

「いいのでしょうか」

「ああ。来いよ」

「でも……」

「行こうぜ」

「そういうの、まずあたしに聞いてからにしてほしいんだけど」

マックイーンと言いつつ合っていると、冷え冷えとした声が頭上から響いてきた。

「え、ベルちゃんどうしてここに」

「ドーベル……」

「学園の寮や親元を離れての旅行だから、学園に届出をしないといけなくて、その手続きに行つてただけど……そうしている間にあたしの好きな人は他の女、しかもあたしの親戚にして親友にコナかけてたとはね」

「ち、違うんだベルちゃん」

「言い訳は牢屋で聞く」

「待つてください!」

か細い声で、マックイーンが割り込んだ。

「全部私が悪いのです。たまの散歩でゴールドシップさんを見かけて、ふらふらと寄つていつてしまったのが原因です。だから……」

「マックイーン」

「マックちゃん」

ベルちゃんとアタシの声が重なった。

「マックイーン。あたし、実はわりと最初の方から話を立ち聞きしてた。その点はごめん」

「全部、聞いていましたのね」

「もちろん、あたしはマックイーンのことを憐れむなんてことはしない。それはマックイーンが全てを反省して前を向こうとしているのを、この目で見て、ライアンやブライトやアルダンさんから聞いて、知っているから」

「ドーベル……」

「あたしが好きになった人のことを好きな人が弱いとなんか嫌。あと……前も言ったけど、あたしとしては、マックイーンが離れた後あと釜がまに座ったみたいなのが今もするし。まあ、その原因はこのうわきものがマックイーンに見せるとちつかな態度のせいだけだ」

「ウツ」

「だから、きつちり決めてもらおうかな、って」

「私は参加する資格がありませんから……」

「ダメ。逃がさない」

ベルちゃんがアタシ達を見据え、宣言した。

「あなたには三つの選択肢がある。あたしを取るか、マックイーンを取るか、覚悟を決めて両方を平等に取るか」

「……へ？」

「へ、じゃない。きつちり選ぶか、両方養う甲斐性を持つか、明日からの旅行で答えを出してもらうから」

アタシひとりの旅行から、ベルちゃんがついてくる旅行になり、そこにマックイーンも誘ったら、少々大事になってしまったようだった。

第七章 告白

翌日、マックイーンやベルちゃんを呼んだからには早朝出発するわけにはいかないため、集合時刻を朝十時に変えた。とはいえ朝早く目が覚めたので、寝直すことはせずに家の外に出て軽く伸びをした。勢いで呼んでおいてなんだが、全くのノープランだった。野宿のじゆくやネットカフェでの仮眠はもちろんだメ。ベルちゃんの泊まるホテルにマックイーンも泊まつてもらうか、どうしたものか。

「私は雨風あめかぜを凌しのげればそれでいいのですけれど……」

聞き覚えのある、でもこんな時間にいるはずがない人の声でした。

「あのー、まだ朝六時半なんです、マックイーンさんなんでいらつしやるんですの？ あとお嬢様お嬢様が修行僧しゆぎようそうや世捨よすて人みたいなこと言わないでくださいまし」

「口調が私みたいになつてゐるようですが……」

「ツツコミを入れたい。三分間待つてくれ」

そう、いつの間にかマックイーンがうちの前に来ていた。地味目の行動しやすそうな服や靴で整えていて、その体型ともあいまって、ほとんどの人は言われなければマックイーンだと気がつかないに違いない。もつとも、行動ししやすい服とは裏腹に、今のマックイーンは痩せ細つていて、さらにウマ娘としての力を全く出せない以上、病弱なヒトの少女そのものだ。だから行動力の化身けしんみたいに、あまり強行軍きやうこうぐんで行くわけにはいかない。

「三分経ちましたけど……何かを構えつつ答えを聞いた方がよろしいのでしょうか」

「自滅じめつフラグはやめたまえマック君。それはさておき、あー、まず、ずいぶん荷物が小さいように見えるが、残りの荷物はSPが運んで来るのか？」

マックイーンの荷物は小さめのポストンバッグひとつきり。アタシの偏見へんけんとして、お嬢様は大荷物でキャリーバッグの一つや二つは引き連れて行くものだと思ひ込んでいた。確かに学園の合宿だと結構荷物は小さめにはなるが、それと比べても荷物が少ない気がした。

「最低限の着替えがあれば、たぶん大丈夫ですわ。別荘から脱走して貴方のところへ行つ

た時は、恥ずかしながら着替えのひとつも持たず、それどころかほとんどお金も無い中、何日もかけて旅をしましたし……」

「さすがにそのある意味極限状態だった時と比べて旅行の装備を決めてもな……とりあえず上がってくれ、座つて考えよう」

「お邪魔します……」

おずおずと腰掛けたマックイーンにお茶を勧め、その向かいにアタシも座つた。

「さてと、もともと一人旅だったから予定も何も決めてなかったんだが、ベルちゃんがくつついてきて、マックイーンもアタシが誘つたからには、多少なりとも行程を決めて宿を押さえなきゃいかん」

「かえつて気を遣わせてしまつて申し訳ありません」

「いや、誘つた奴を適当に引き連れ回してさあ野宿だ、なんて、相手がトレーナーでもなきややらねえよ。ベルちゃんのトレーナーだつてそうだし、アタシの元トレーナー相手に……あいつと別れてもう何年だ？ 六年くらいだったか？」

「あの騒ぎの前でしたら、おそらくそのくらいかと」

「ずいぶん遠くへ来ちまったもんだ。まあ、これもあとどのくらい続くか分かんねえけど」

「……? どこかお引越してもされるんですの?」

「あ、いや、まあそんなとこだ」

遠くへの引越しどころか別の世界にお引越して、二度と戻ることができない一方通行なアレだけだな。

「さて、アタシはざっくり西に進むことだけを考えた。朝五時から普通電車乗り継いで行くと長野に昼前に着くから、そこで適当に観光して……みたいな感じだった。十時に出てのんびり行くと長野は十七時前か。湯田中ゆだなかにでも泊まるか」

「旅館に泊まるとなると、当初予定より旅費りよひが大きく膨らむのでは……?」

「今考えてる新しい計画だと、三倍くらいにはなるな」

「やはり野宿……」

「ダメだつつつてんだろ、アタシとて学園食堂でたんまり稼いでんだ、引き連れていくお嬢様に不便な思いをさせたら今度こそボスからシメられる」

「そうですか……」

七時を回ったところで朝ごはんにした。長期間家を空けるから冷蔵庫はからっぽにしていて、保存食以外は今朝の自分の分しか家に置いていなかったの、近所のコンビニから食糧を調達した。マックイーンしよくりまうの分に加えて、何となくベルちゃんの分も買っておいた。そろそろご飯を食べずに来そうな気がしたので。

果たして予想通り、七時半前にベルちゃんが来た。こちらは小さめのキャリーバッグを持ってきていた。

「やっぱりマックイーンも来てたね。何時くらいに来たの？」

「六時半、ですが……」

「六時半!？」

口をあぐりと開けて驚いたベルちゃんが、すぐにアタシの方を睨にらんできた。

「なんですぐ知らせなかったの」

「え？ いや……」

「マックイーンとあんなことやこんなことをするつもりだった？」

「あんなことやこんなことって？」

「あたしの口から言わせないでヘンタイ」

「自分の口から言えないようなことを想像してたのか!？」

大変重症かもしれない。ベルちゃんをカレンチャンの弟子にして滝行させ、カワイイを体現たいげんできるよう改造してもらったほうがいいかもしれない。

「その、ドーベル？ ゴルドシップさんとは決してそのようなことは……」

マックイーンはベルちゃんの言う「あんなことやこんなこと」をいかがわしい方向性で想像してしまつたらしく、顔を真っ赤にしてあたふたしていた。

「……ふふつ、冗談」

ベルちゃんがおかしそうに笑つて言った。

「マックイーンもあなたも、何があつても天然記念物級のピュアなお付き合いにしかかなりそうもないつて知つてるから。もちろんあなたしも」

「ピュアなやつが自分の口から言えないような妄想もうそうをするわけなあ痛ッ！」

「旅の途中、街中まちなかで『捨てないで』つて泣き叫んであなたの社会的立場をゼロにして、あたしにしか頼れないようにして服従ふくじゆうさせるのつてどうだろう？ いいと思わない？」

「自爆攻撃はよくない。ベルちゃんは冷静かつ賢明けんめいだからそのような蛮行ばんこうはしないと固く

信じている」

我ながら奇妙な言い争いになっているなと思っていたら、マックイーンが痛恨の一撃を加えてきた。

「やはり、今のゴールドシップさんとドーベルは『一心同体』と言えますわね」

「どこか!？」

マックイーンの言葉に同時に反応してしまい、ベルちゃんとアタシは顔を見合わせて赤面するより他なかった。

ベルちゃんも朝ご飯を食べ、全員揃ったということで予定より早いけれども出発した。

お嬢様御一行を遠慮なく普通電車乗り継ぎツアーに強制連行することにしたが、音^ねを上げたらその時に特急に乗り換えればいいのか。

駅に向かつて歩いている途中、ベルちゃんがアタシたちと自分の服装を見比べて、居心地悪そうな感じでつぶやいた。

「なんかこの一行^{いっしやう}であたしだけが浮いている気がするんだけど。服装的に」

「そうか？」

「そうでしょうか？」

「だって二人とも登山にでも行きそうな地味で行動しやすい服なのに、あたしだけなんかひらひらしたワンピースで……」

「メジロのスイーツ問屋の主人と付き人二人だな。アタシが印籠を掲げて見得を切ると、みんながベルちゃんのもとにひれ伏すやつ」

「時代劇ですわね」

「はあ……まあいいけど」

乗り継ぎ行程が早まったので、せっかくなら休憩がてら途中で降りて、諏訪大社の四社まわりと洒落こむことにした。でも、思いつきでサクツと調べたら、交通機関の問題的に時間が結構かかりそうだった。ウマ娘らしく文字通りの駆け足で回る案は、その力が全く出せないマックインがいる時点で却下。これは下社の方しか行けないか？

「大丈夫。うちの車を茅野駅に回したから」

「いやさすがにそこまで迷惑は掛けられないし回さなくても——ん？ 回し『た』？ もう頼んじやつたのか？」

「護衛を兼ねた車が、あたし達が乗ってる電車とつかず離れずくらいで高速道路を走って

るんだつて。今ちようど小淵沢こぶちざわのあたりみたい」

「ええ……」

学園内でもきつちり護衛をしていたくらいだし、S Pが来ることは十分考えられた。とはいえ、まさか電車と同じくらの場所を走るところまで移動行程を揃えているとは思わなかつた。もし車で並走する方法を選ばなかつたら、電車の中がS P団で一杯になつていたら違ひないので、そうならなくて良かったと言ふべきか。

ベルちゃんが車を呼んでしまった以上、マックイーンのこともあるし、無碍むげに断るのも良くないなと思つたので、思いきり甘えることにした。

茅野駅に着いた後、駅前にもちようどやつて来た高級車に乗り、諏訪大社かみしやを上社の方から順に巡つた。上社から下社への移動では諏訪湖に沿うように走つてくれて、さらに景色を楽しめた。

巡つた後は下諏訪駅しもすわで降ろしてもらい、そこからさらに普通電車で乗り継ぎをして進んだ。さすが朝早起きで少々疲れたのか、ベルちゃんとマックイーンが眠りに落ちて、それぞれアタシに寄りかかつてくる役得やくとくがあつた。

まつもと
松本駅まつもとでさらに乗り換え、次の電車の通り道にある途中の姨捨駅おはすてというところで降りて

壮大な景色を眺めた。夜に来るともつといいらしいのでまた来たい。

長野駅で最後の乗り換えをして、さらに電車で揺られて湯田中ゆだなかに着いた時には、ちょうどいい時間になっていた。

「ごゆっくりおくつろぎくださいませ」

旅館に着いて部屋に案内された後、三人そろって畳たたみの上に寝そべった。

「あゝ疲れたぜ」

「普通電車でゆっくり行くのも大変良い経験ですが、ちよつと腰が痛くなりました」

「レースとは全く違う体力を使ったみたい……」

「……温泉行くか」

「「さんせ〜い」」

夕食の時間までもうしばらくあるので、ゆっくり温泉に浸ひたかり、疲れを癒いやした。いい湯だ。

湯上がりにちよつと涼すずんで、夕食でビールを一杯……というわけにはいかない歳なので、ジュースで乾杯して、豪勢な食事したつぷみに舌鼓したつづみを打った。部屋に戻ると布団が用意されて

いて、みんなして倒れ込むように寝てしまった。

気がつくと、何か変な空間にいた。夢か？ しばらく立ち尽くしていると、何者かに名前を呼ばれた。

『——ゴールドシップ』

慌ててあたりを見回したが、何も姿が見えない。

「どこだ？」

『姿はない。だがここにいる』

「お前、何者だ？」

『名はない。存在意義は定義されていない。だがあえて言えば、世界そのもの、あるいは
観察者』

「どうしてアタシのところに出てきた？」

『自発的意志ではなく、引き寄せられるようにお互い邂逅かいこうした、という方が適切かもしれない』

「用事が無いならアタシは帰るぞ」

『——伝えるべき事があるとしたら、それは貴殿が百数回、体感でのべ百二十年にわたり体験している数奇な事象、その先のことか』

「！ オマエ知ってるのかこのメチャクチャな事態のことをッ！」

『感知している。私の力では介入することができないが、仮説を提示することは可能』

「教えてくれ。この際仮説でも何でもいい」

『承知した——』

『結論から言うと、この世界が外部から干渉を受けているのではないか。私は各種の状況を総合し、そのような仮説を立てた』

「どういう事だ？」

『外部の存在が、何らかの意志により時間を過去に戻している。あるいは時間だけでなく、世界をも転移させているかもしれない』

「……わけが分からねえ」

『それを感知できているのは、私と貴殿だけであるかもしれない。あるいは、そもそもこ

の事象に巻き込まれているのは貴殿だけであり、私はそれを観察しているに過ぎないのかもしれない』

いきなり流し込まれた大量の情報と理解困難な説明に、アタシの頭は拒否反応を示した。

「だめだ、頭がまとまらない」

『非常に難しく、荒唐無稽ことうむけいとしか言えない話だ。もつとも、私の存在自体が荒唐無稽であるかもしれないが』

「外部の存在が干渉して、アタシがそれに巻き込まれているとして、その存在の目的はなんだ？ アタシだから巻き込まれているのか？ それともたまたまなのか？ いつこんなクソツタレな事態から抜け出せるんだ？」

『——思うに、外部の存在は、貴殿について何らかの条件を満たそうと操作しているのかもしれない。その仮定の下では、干渉の発生は貴殿を対象にしてこそ起きることであり、その条件が満たされない限りは抜け出せない、かもしれない』

「なんだよ……それじゃアタシは永遠にこのままになるかもしれないのか……？」

『その可能性はゼロではないが、かなり低減されている可能性がある。……貴殿はすで

に、時間が戻されず長く続く時の条件をいくつか把握しているのではないか?」

「……ああ。なんとなくだが。そのひとつが、マックイーンと一緒にすることだと思う。その時は比較的長い時間を過ごせた」

『だが、今回はメジロマックイーンと一緒にいるとはいえ、今までと状況が大きく異なる』

「最初に仲違なかつたいしてしまって、アタシもマックイーンもどちらもトウインクル・シリーズに出走しないままここまで来てしまった。どうにかまた一緒になることはできたものの、今からデビューするのはさすがに遅すぎるし、マックイーンはもう走れない」

『貴殿が一回もレースを走っていないなかった世界は過去何回かあったが、いずれも数週間程度で時間が戻されていたため、六年目に入ってしまったのは今回が初となる』

「もしかして、アタシが何もしないことが条件達成のカギのひとつなのか?」

『その可能性は極めて低いと考えられる。貴殿が何もしないことによつて条件のひとつが達成されるなら、今までに貴殿が何もしなかった時の世界の持続期間がいずれも短過ぎる』

「じゃあ今回の何が起きているんだ」

『外部の存在が何らかの理由で干渉していない、あるいは干渉できていない。ただ、先述の理由から、この世界が持続する可能性はやはり低い。いずれ、干渉によりこの世界は打ち切られると考えられる』

「その時がいつか、つてのは分かんねえよな」

『不明。今この時かもしれない。もつと先かもしれない』

「そっか」

『貴殿には、おそらく今までの繰り返しの中で、最も大切に思う人が現れたと見受けられる』

「そうだよ……最初はもうさつきと次の繰り返しに飛ばしてくれって思い続けて、どうせ飛ばされるならと学園を壊して、最低最悪になった自分を救ってくれたのがベルちゃんだった。ここまで深い仲になるとは思ってたなかった。この世界がずっと続いてほしいって思うようになったけど、これだと、それも叶いそうにないんだな」

『長らく観察してきたが、今はこの世界の不条理ふじょうりとも言うべき事象に介入できないことを口惜くちおしく思う。私にとつても初めての感情だ』

「どうしたらいいんだろうな」

『極めて陳腐で、ある意味救いのない回答であるかもしれないが、悔いのないようこの世界を謳歌するしかないかもしれない』

「……そうだな」

いつ永遠の別れを迎えるかもわからない以上、一日一日を悔いなく生きるしかない。それはこのような事象が無くても当たり前かもしれないけれど。

『大切な人ができること。もしかしたら、これもこの事象を抜け出すための重要な鍵かもしれない』

「なるほどな」

『私が話したこと、私と貴殿が対話したことで多くの知見が得られそうだが、残念ながらこの空間を抜けると記憶として定着されないまま消えてしまう可能性が高い。今までがそうだった』

「せっかくいろいろ知識が得られたのに、忘れてしまうのは痛いな」

『断片としては残るかもしれない』

「分が悪い賭けだな……ところで、アンタはどのくらいこうやってアタシに会えるんだ？」

『過去に五回接触でき、今回が六回目になる。しかし過去五回のことを貴殿は覚えていないようなので、実質常に一回目かもしれない。私が出る余裕がないままに次の繰り返しに移行することも多かつた』

「ままならねえな……」

『——残念ながら、時間のようだ。何もできないのがもどかしいが、健闘けんとうを祈いのる』
「ありがとうな」

目が覚めた。長い夢を見ていたようだったけど、実際には眠りに落ちてから一時間も経つておらず、日付が変わる前だった。何か世界に関する重要なことを対話して知ったはずだったが、残念ながらほぼ全て記憶から抜け落ちてしまった。

かすかに覚えているのは「世界を脱出するには、大切な人と一緒にいるのが条件」——だったか。となると、今の世界ではそれ以外の条件がすでに満たされていない以上、この世界でのベルちゃんみたいな子と、次の世界で出会うしかない。

布団を抜け出し、洗面所でコップに水を一杯分汲んで、広縁の椅子に腰掛けた。満月の光が差し込み、夜中ながら部屋の中は明るい。こうして旅に出て、大切な人と一緒に過ごして、そして旅から帰って、またレースでの活躍を見て、それから――

「この世界にずっといてえな……」

月を眺めながら物思いにふけり、もつと近くで見ようと、そつと窓を開け、身を少し乗り出した。

「もうすぐ、おしまいになるかもしれないねえんだな……」

視線の先、庭園の池が見える。満月は水面にも姿を映していて、まるでどこか別の世界へと誘う門が開いているかのようだった。

吸い寄せられるように身体が傾く。

でも、その傾きは、一人の優しい手によってそつと止められた。

「だめ。行っちゃいけない。……さつきの話、聞かせて？」

「ベルちゃん……」

静かで、迷うような、言葉を選ぶような語り口。平静へいせいを装よそおっているものの、動揺と困惑がない交まぜになっていることは明らかで、目も潤うるんでいるようにも見えた。

お互い広縁の椅子に座り直した。最初の言葉を何にしようかしばらく迷っていたが、その間、ベルちゃんは辛抱強しんぼうく待ってくれた。

「……この世界の六年前には、アタシは存在しなかった、って言ったら信じるか？」

「え、だつてあなたは十八歳でしょう……？」

「だが、六年前には『いなかった』。あるいはいたとしても、それはアタシとは『別物』だ。そして、アタシの主観的には六歳でもなければ十八歳かどうかも怪しい。体感的にはもう百二十歳近くだ」

「……ごめん、何を言ってるか意味がよくわからない」

「そう、意味がわからない。自分でもな」

「六年前までこの世界にいなかったことは……あなたは、別の世界から来たってこと？」

「そうとしか考えられないことを今まで経験してきた。デビュー前の四月を起点に、同じ

ような時の流れを何度となく繰り返してきたんだ。もう百回以上メイクデビューに出て走っているし、ある時には無敗でクラシック三冠を獲ったし、宝塚記念を連覇したこともあった。もちろんウイニングライブも数えきれないくらい出た。ベルちゃんがセンターを務めた曲の中だと『Special Record!』なんかはどのパートでも空で歌って踊れるくらいに演った」

「そうなんだ……まだまるで分からないけど、その話だと、ここじゃない世界では結構レースに出たの……?」

「ああ。いっぱい出た。もつとも、いつでも三年間とか走ってたわけじゃない。繰り返しの回によつては、初っ端の皐月賞で惨敗して、そのまま次の皐月賞に飛んだりしたこと何回もあった。今回みたいにそもそもレースに出ずに別なこととした回も何回かある」

「何がなんだか、わからなくなってきた」

「アタシも未だによく分からないままだ。バカみたいで、嘘みたいで、でもアタシにとっては本場で、現実だ」

そこまで喋ると、話すことが見つからなくなった。お互い、しばらく沈黙していた。

次に沈黙を破ったのはベルちゃんからだった。

「あなたが別の世界に行っちゃったらどうなるの。あなたが消えて、あたし達の記憶も何もかも消えちゃうの？」

「その可能性が高いな。少なくとも、このような繰り返しを終わらせるために必要らしい条件は、もうこの世界では揃えられなくなった。つまるところ『詰み』だな。悔しいが」

「そんな……やだ……」

ベルちゃんの目から涙がこぼれていた。椅子から立ち上がってこちらによろよると来て、胸に顔をうずめてきた。静かに肩を震わせて泣く姿に対して、背中をなでてなだめることくらいしかできなかつた。

「ごめんなさい……」

「いい。アタシは嬉しかった。この世界で、今までアタシが消えて喜ぶ奴はきつといたけど、アタシが消えて悲しむ奴はいなかつた。みんなから嫌われて、疎まれるようなことをやって孤立したアタシに、生きる希望をくれて、まわりとの付き合いを取り戻すきっかけをくれて、好きになってくれて、こうして泣いてくれている。それだけで嬉しい」

本心の吐露^{とろ}だった。アタシがこの世界できちんと生き続ける最大にして唯一の理由、世界から弾き飛ばされることを初めて恐れ、呪い、神様に縋^{すが}つてでも止めたいと思った、それだけ愛しい人になった。

「いつ消えちゃうかは、やっぱり分からないよね」

「分からない。もしかしたら今すぐかもしれないし、あるいはこれから何年も続くかもしれない」

「百年続けば、実質逃げ切り勝ちだけど……」

「まあ、そこまでの奇跡は起きてくれないよな」

「あなたが消えちゃった後も、何とかしてあたしはあなたのことを覚えていられないかな」

「アタシが最初からいなかったことになったら、何もかも消されるかもしれない。でも何かの拍子に欠片^{かけら}が残るかもしれない」

「欠片……それはこうした思い出もかな」

「そうだな」

「今回の旅行でもっと思い出を積み上げていけば、あなたのことを覚えていられるかも」

「その可能性はある」

ベルちゃんがしばらく顔を下に向けて何事かを考えていたけど、何かを決心して顔を上げた。

「……あたしとあなた、この二人の間で、とても強く印象に残る思い出つて、なんだと思う?」

問いかけのようでいて、その答えはもうベルちゃんの中にある。アタシの想像とベルちゃんの意志は一致しているに違いないという確信があった。それは諸刃もろはの剣つるぎだ。いくらここまで親密にしてきたとはいえ、ベルちゃんが望み、アタシも応えようと心が揺らいだそれは、二人の仲を決定的に変えてしまうことになる。

お互いにお互いのことを身体と心に刻きみつけ合うといつてもいいくらいのそれは、もしかしたら社会的に許されないうちもかもしれない。メジロの一族やベルちゃんのトレーナーは許してくれるかもしれないけど、駆け落ち同然になる可能性は高かった。

もう散々迷って思い浮かんだ返しが、決してベストでなければベターでもなく、考える限り最悪のものだった。もしかしたらこれでベルちゃんとの関係が壊れてしまうかもしれない。でも、もし損そとなつてしまうのなら、ベルちゃんを傷物にしない方向性で関係を切

らねばならないと思った。自分勝手な振る舞いとは自覚しているけど、でも、そうするしかない。

「ねえ、聞いてる？ ……多分もうあれしかないと思う」

さつきよりさらに近づいたベルちゃんに、呻くような声でなんとか返した。

「……金を賭けたレース？」

アタシが考えているうちに浴衣の帯に手を掛け、今にも解こうかとしていたベルちゃんの手が止まり、目を丸くし、一瞬の後に表情を無くし、そして目に怒気が籠もった。

「茶化さないで」

「申し訳ない。最悪な返しだと分かったが、それはいけないと思って全力で話を逸らさざるを得なかった」

「逸らさないで」

「ウマ娘なのにチキンなアタシをいくらでも罵つてくれ。今ならその言葉も悦びに変えられそうだ」

「罵られて悦ぶとか究極のヘンタイじゃない」

「あざす」

「勢いを削がれちゃった。……でも良かったかもしれない。前のめりなあたしを護つてくれたんだよね？」

「護る気持ちが無かったわけでもないが99%は自己保身だ。世間から後ろ指を差されたくないがためだけに茶化して話を逸らそうとした間抜けの具現だ」

「……本当はどうだった？ 何もしがらみが無かったとしたら」

「そうだな……一線を越えた勢いのまま駆け落ちしたいところまであったけど、学園の門のところまで晒し首になりたくないし、何よりマックイーンが」

「私が、どうかしましたか？」

驚いて部屋の方を見ると、身体を起こしたマックイーンがこちらを半分呆れた顔で見ている。

「あの、マックイーン様はどこから聞いてましたか？」

「様づけなんて変な呼び方はよしてください。……ええと、ゴールドシップさんの身体がふらりと傾きかけて、ドーベルに止められたあたりから、ですわね……」

「見事に全部じゃねえか」

「はい。盗み聞きしたことは謝ります。……このまま寝たふりを続けて、何も知らなかったふりをして、ドーベルとゴールドシップさんの仲を応援して身を引こうと思つていますが、私の名前が出てきたので、思わず声を上げてしまいました。」

「マックイーン、これはあの、違うから、ちよつと親睦しんぼくを深めるためのゲームとか何とか」「隠さなくてもいいですわ、ドーベル。私もそうした気持ちになりますし、……実は今、少しばかり、捨てると決めたはずの感情を抑えられなくなっています」

「かつて貴方を傷つけた身、たとえ貴方が許したとして二度と、永遠に言うまいと思つていましたが、それを果たせなかつたことをお許しくください」

「……ゴールドシップさん。貴方をお慕したい申し上げております。返事はいりません。こちらを振り向いてくださる必要もございません。ただ、私の心の全てが貴方で占められていくことだけは伝えずにいられませんでした——」

「——好きです。ゴールドシップさん」

第八章 西への航海

「——好きです。ゴールドシップさん」

その言葉に頭が真っ白になった。口をパクパクと開いたり閉じたりして、何か言わなければと無理やり言葉を継つごうとした。

「ま、マックイーン、アタシは」

マックイーンは首を振ってアタシの言葉を遮さへつた。

「今は何も言わないでください。答えは分かっています。……分かっているのですが、私は覚悟かくごができておりません……勝手な言い分で申し訳ありませんが、返事を私に聞かせな

いでください……貴方から言われぬ限りは、まだ……縋すがつていられますので……」

正座の姿で、膝ひざの上に置かれて固く握られた両手から力が抜けるのが見えた。それを見たら、もうアタシからは何も言えなくなってしまった。

そんなアタシに代わるように、そばにいたベルちゃんが口を開いた。

「マックイーン、ありがとう。きちんと想おもいを言葉にしてくれて。……これであたしとマックイーンはようやく対等になれた。勝負するなり、一緒になって責任を取らせるなりできるようになるから」

「ドーベル……」

「……もちろん、マックイーンを遠とほざけたまま、あなたを一生離れられないよう束縛そくばくする重い女になってしまえば、簡単に独ひとり占めじてきたと思うんだけど、この世界からいなくなっちゃう話を聞いちゃったらさ、いくら束縛したってダメじゃん。そんな時に、あの世界のメジロドーベルは危ない女だったって記憶に残ったまま別の世界に行かれたら、あたしは一生後悔こうかいするから」

それで、とベルちゃんは続けた。

「あなたは どうする？ あたしとマックイーンはこんな感じだけど」

「アタシは……」

我ながら情けない。かつてはぞんざいな扱いをしてマックイーンを傷つけ、今は優柔不断な態度を取ってこの体たらく。覚悟を示したベルちゃんやマックイーンに対して、弱々しい返答しかできなかった。

「……少し、考えさせてくれ。ごめん」

「うん。まあ、あまりスパッと決められても、マックイーンが言うみたいに心の準備がでないから。スパッとフラれたら、あたしは一生引きこもって暮らすと思う。……G I 覇者が引きこもりニートになっちゃって、ぼさぼさの髪と尻尾、ジャージ姿で部屋の片隅にうずくまつて、過去の栄光とあなたとの思い出に溺れる日々——」

「ベルちゃんの想像がやけに生々しいんだが」

「ドーベルは絵だけでなく、ストーリーを組み立てる力もありますから……」

「トウインクル・シリーズ引退後は漫画家になるといいかもしれん」

「……口が滑った。でも本心だから」

堂々と言いきったベルちゃんをすごいと思い、煮えきらないままの自分が情けなく感じられてしまった。

「その居心地悪そうな若干一名以外は準備が整ったけど。そういえば明日からの旅程は聞いてなかったね。どうする？」

「お、おう……ベルちゃんが来ることになってから一旦白紙にしてそのままになるな」

「じゃああたし達が決めていい？」

「あの、私ですか？」

「もちろん」

「……わかった。ベルちゃんとマックイーンに任せる。それで、もう真夜中だが今から行程を組み立てるのか？」

「目が冴えちやつたから眠くなるまでちよつと案を練ろうと思った。マックイーンはどう？」

「私もちよつときつきのでドキドキしてしまって、しばらく寝直せそうにありませんわ」

「決まり。早速アイデア出してこよう。あたしとマックイーンで行程を組み立てるから、あなたはそこで天井てんじやうのシミでも数えてて」

「その表現が使われがちなシーン、分かかって言ってるよな？」

「さあ？　どんなシーンかわせようとしたらヘンタイって罵倒するから」

「やっぱり分かってるな？　かわいく純情だったあの少女がどうしてこんなことに」

「うわきものをつなぎ止めようとして、過激なことを言うめんどくさい女になったんじゃない？　責任取ってよね」

「十数分前に言ってた『束縛したってダメじゃん』を秒で引っくり返してませんか女王様」

「気が変わったのかもね」

アタシとベルちゃんとの間で益体やくたいもない言い争いが始まったところで、横で置いていかれ気味だったマックイーンが不意に笑い始めた。

「ふふつ、やはりとても息が合っているしやいますのね」

「どこが!?!」

「ほらこの通り。とても楽しそうで……ちよつと、いえ、かなり羨ましいです。かつては私とゴールドシップさんとの間も……すみません、口を滑らせてしまいました。聞かなかったことになってください」

「マックちゃん……」

アタシには無くて、マックイーンにはある記憶。それを知ることはおそらくできない。聞けば全部話してくれるとは思いますが、実感はできないに違いなく、喋るだけ喋らせてその始末ではマックイーンに申し訳ない。

「昔のことに浸^{ひた}つても仕方ありません。今から思い出を積み重ねていけばいいのですし、ゴールドシップさんとはそれができそうな気がします」

「マックイーンと同意見。こんないい人だもの、よくモテるし、あたしが嫉妬^{しつと}するのは当然」

「さらつと嫉妬心を正当化したねこの子」

ついさつきまでのしんみりとした雰囲気はすっかり吹き飛び、結局アタシも旅程作りに参加しているいろいろ案を出し合った。

それで、いつの間にか寝てしまっていて。

「えー皆様おはようございますゴルゴルモーニングの時間です。ただいま何時でしょ

うか」

「九時です……」

「チェックアウトは」

「十時です……」

「やつちまつたぜ……」

一応朝食の時間は九時半までだったが、身支度を整えるにも時間がかかるため、果たしてどちらを取ったものか。三人で三十秒考え、若さの特権を生かしてご飯の方を取ることにした。髪と尻尾を適当に揃えればあとはうまい感じにごまかせる。

手持ちの服から一番ラフなものを選んで着替えて朝食会場に出向き、おいしい朝食を急ぎ目に食べるという、とても勿体無いことをした後、あわただしく歯磨き、洗顔を済ませ、そして荷物をまとめてチェックアウト。朝風呂の野望は別の温泉地に持ち越しになった。特急列車に乗って長野に着いたのがすでに昼前で、そしてここから飛び道具を使うことになっていた。

「はい。新幹線で金沢へ行きます」

「アタシの当初計画では新幹線には乗らないはずだったんだがな……」

「よろしかったのでしょうか。もし旅費に不足等ありましたら少しくらいは出しても……」

「いや。初めに出してほしいと言った分以上はアタシに任せろ。……あー、やつぱちよつと怪しいな。後で足りなくなったら頼むかもしれん……」

「遠慮しないで。あまり大きな声で言うことじゃないけど、二人ともお金ならあるからさ」

「へい。恩に着ます」

さすが新幹線の力。一時間かそこらで長野から金沢まで着いてしまった。改札を出ると人でごった返していた。平日の昼過ぎとはいえ、まだ学生の春休みなのと、外国からの観光客のおかげでかなり賑わっていた。これが土日になるととんでもないことになりそうだ。

バスに乗るための行列はそこそ長そうで、バスを待つよりも他の手段を考えた方がいい。いろいろな観光地へはウマ娘の脚なら歩いて回れそうだったので、マックイーンのことを考えてのんびり楽しみつつ、歩いて行くことにした。

ウマ娘三人組でそこそ目立つためか、外国からの旅行者を中心によく声を掛けら

れた。

『おお、美しいウマ娘のみなさん！　こんなところでお見かけするとは。もしやそちらの方はこの前……』

『おつと、シークレットな旅さ。内密ないみつに頼むぜ』

『これは失礼。よい旅を』

『じゃあな！』

「さっきのフランス語みたいに聞こえたんだけど……あなた喋れたんだ」

「そりゃあ別の世界ではフランス遠征もしてたしな。全然勝てなかったけど」

「ちなみに、さきほどの方はなんと？」

「アタシ達が美しくて見惚みとれてたつてさ」

「あら……」

「ちよつと恥ずかしい……」

なんだかんだいろいろと巡つて楽しみ、今夜はビジネスホテルに泊まった。需要が大きいせいかちよつとお高めで、この値段なら、アタシひとりだったらインターネットカフェ深夜六時間パックで夜を明かすか、夜行バスで移動しようかというところだった。

翌日は電車の乗り継ぎでさらに西へ。出発点の金沢駅で京都・大阪方面の乗り場に行こうとしたら、行先案内の看板の下にデカデカと「Notyoto ✓」と書かれていて、これなら間違えないと思ったりした。

今日の行先は特急なら一本で行けるところ、またしても普通列車の乗り継ぎを選んだ。それでもついてきてくれるベルちゃんとマックイーンは強い。むしろアタシの方が若干疲れてきたくらいだった。ちなみに今回は京都は素通りして、大阪は大師匠・タマモクロス大先輩のお宅訪問ほかちよつと散歩するくらいになっていた。理由は簡単で、三人揃って『レース場に行った前後にたつぷり観光できるよね?』だった。

「ゴルシひさしぶりー! かのじよさんも! あれ? そつちはかのじよさんのしんせき?」

「にじょうさん?」

「こらチビどもどこでそんな言葉覚えた!? スマンなベルちゃんとそつちの嬢ちゃん、うちの妹がいらんこと言うて」

「あ、いえ、妹さんが元気いっぱい何よりです」

「お邪魔いたします。メジロマックイーンと申します」

「マックイーンさんか。タマモクロスや、よろしゅうな」

「師匠、お世話になります」

「ゴルシもずいぶんたくましくなったなあ。やつば守るべき人が増えたからか？」

「つす」

「まあ何人守るかは甲斐性次第として、一人でも泣かしたら水泳大会やで。東京湾・大阪湾・博多湾から選ばしてやる」

「それ、絶対おもりが十トンくらいついている水泳大会じゃありませんか？」

「ベルちゃんのようなカンのいいウマ娘は大好きや」

水泳大会への誘いは丁重に断りつつ、大師匠一家の歓待を受けた。今日は大師匠のお父ちゃんもいて一層賑やかだった。ベルちゃんとマックイーンも楽しそう何より。ちなみに今回は三人まとめて風呂場に蹴り入れられることはなかった。三人だとさすがに狭いし、二人と一人の場合はアタシの側が一人にならないと多分いろいろな意味で気まずくなりそうだったので助かった。

夜の雑魚寝。ベルちゃんはおなじみだけど、マックイーンの方はどうだったか。

「この感じ、メジロの一回でキャンプに行った時のことを思い出しますわね」

好評なようで何よりだった。心地良い疲れがあつたのですぐに眠りに落ち、朝までぐっすり寝ていた。

「おはようさん。よう眠れたか？」

「はい。ぐっすりでした。とても安心するおうちで、自分の家や学園の寮よりも眠れたくらいです」

「そりや良かった。うちからトレセン通うか？」

「いや師匠、さすがに無理っしょ」

「どこでもドアでもあればええんちゃう？」

「ふふっ、ここでもゴールドシップさんはとても面白いんですね」

「せやな。コンビ組んで頂点極められるくらいや」

「次の仕事それにしたいっすね」

今日の予定は夕方まで大阪に滞在して、夕方に大阪南港を出る九州方面、北九州・新門司港行きのフェリーに乗ることになっていた。どこかを観光するか、それとも大師匠の家で駄弁るか考えた結果、後者になった。学校がある弟ちゃん妹ちゃんを送り出し、大師匠の部屋で四人車座になった。

「さてゴルシ、いきなり下世話な話でなんやが、どつちが正妻や？」

「ゲエツホゴホゴホッ!!」

「大丈夫？」

「大丈夫ですかゴールドシップさん」

クリティカルヒット。世を謳歌した女・ゴールドシップ、大阪の地で敗れたり……

「いやな、これ聞いてみよう思ったんは、前はマックイーンと仲良かったよな、つて思い出したからでな……いや、忘れてや。余計なこと聞いた」

大師匠がアタシの方を見た瞬間、話を引つ込めてしまった。よほど酷い顔をしていたのかも知れない。

「あの時の事をどこまでご存じかはわかりませんが、私はかつて、ゴールドシップさんに大変酷いことをしてしまいました。今は二人に許されてここにいる身、その……どちらが

主であるかなど明白——」

「どつちもだよ」

ベルちゃんがしつかりとした口調で断言した。

「うん。あたしも、マックイーンも、どちらも。もちろんまだ二日前にしたばかりの話で、どちらを選んでもくれるか、両方選んでもくれるか、両方フラれるかはまだわからないけど」

「その意気いきやよし。じゃあ次はゴルシゴやな。一流の女の矜持きやうぢ見せや？ 慌てることはないけども、きつちり示すのが一流つてもんや」

「押忍おす」

「ベルちゃんの脚の様子はどんな感じなん？ 夏くらいまではかかるつて前言つとつたやろ？」

「はい。痛みとかはなくて、何日か前の検査では問題は起きていないみたいでした」

「そりゃよかった。じつくり養生ようじやうしい」

「ありがとうございます」

「そういえば師匠、最近はどんな感じですか」

「ここ最近お互い忙しかったので、メッセージでのやり取りもわりと少なめになっていて、近況きんきょうをほとんど聞けていなかった。

「せやなあ、引退してからこつち大阪にずっとおったけど、最近は西日本あたりにちよくちよく呼ばれていろいろやつとる」

「漫才講座まんざいこうざの師匠ですか？」

「ちがわい！ レースのトレーニングコーチや！」

「キレイのある一秒ツツコミをもらった。その横ではベルちゃんとマックイーンがとても感心した様子で目を輝かせていた。」

「すごい……」

「だいたいはこの近所やけど、たまには四国や九州に呼ばれて先生やつてちびっこ達を鍛きたえててな」

「正統派師匠だ……」

うっかりもらした言葉がぼつちり大師匠に聞こえてしまっていたらしく、満面の笑みを浮かべて振り向いてきた。

「ゴルシ、今日はいい天気やなあ。泳ぐには最高の日やと思うで」

「すみませんした」

いのちだいに。

なんだかんだしているうちに昼時ひるどきを過ぎ、フェリーターミナルへ向かうにはちょうどいくらいの時間になった。

「なんや早い方の便で行くんか。あれ朝五時半くらいに向こうに着くんやろ？ やたら早はよないか？」

「行程が直前に決まったので空いている方を選んだのと、早い方だと割引が大きいのでこちらにしました。あと、早朝から活動もできますし」

「うんうん。さすがベルちゃんやな。節約できるところを節約していく心掛けがあれば、どこでもやっていけるで」

「ありがとうございます」

大師匠が次にマックイーンの方を見て、ふと何かを思い出したかのように机の引き出しを開け、紙を一枚取り出して渡した。

「マックイーン、これ持つてき」

「これは？」

「うちのトレーナー直伝じきでん、食が細くてもいい感じに食えて体を作るメソッドちゅう奴やつや」

「貰もらつてよろしいのでしょうか」

「おう。トレーナーからは『タマモクロスと同じ食の細さの悩みを持つ子にどんどん広めろ』って言われとるさかい。マックイーンにも試してみてほしくてな」

「ありがとうございます」

「いやな、マックイーンが健康なウマ娘には程遠ほどとおい痩せ方ちゅうか、やつれ方とか、まあいろいろあったんやろけど、骨と皮だけはさすがにアカン。家族親戚ゴルシ、そしてうちとお父ちゃんお母ちゃん、チビどもが泣く。それだけやない、泣くのはまだいっぱいおる」

「……そう、ですわね」

数日前のことを思い出した。あまりにも衰えてしまったマックイーンの腕に思わず涙がこぼれたことを。

「次会う時にはもうちょいもちもちになつとるのを期待しとるで」

「はい……」

ちょうど学校から帰ってきたちみつこ達にも見送られて、電車を乗り継いでフェリーターミナルへ向かった。

「いつ見ても大きいね……」

「そうですわね……」

ベルちゃんが大きなフェリーを見るのは何年前かにアタシを大洗まで迎えに来てくれた時以来で、乗るのは初めて。マックイーンは別荘を抜け出してからアタシのところに来るときに乗ったことがあつたみたいだった。

「さて、一応個室取つたんだっけか？」

「はい。ちょうど三人向けのお部屋が空いておりましたので」

値段を見てため息がもれた。一番安い部屋と設備の倍だぜ倍。グループじゃなきゃ乗れねえ。

「このフェリーってやっぱり揺れるのかな」

「フェリーに詳しい奴に聞いたら『ベタ凧なぎ超快適、初心者にうつつけ。外洋がいように出るのに乗ったことがあれば楽勝』だつてさ。とりあえずほとんど揺れないらしい」

「よかつた……」

「ベルちゃん船は苦手か？」

「家族旅行で小さいフェリーに乗ったんだけど、たつた数十分の距離なのに見事に船酔いしちゃつて、あれ以来船には全然乗つてない」

「そうか。船酔いつらいもんな。マックちゃんは？」

「津軽海峡を渡るフェリーに乗った時は悪天候でかなり揺れたので死を覚悟しましたが、あの時は執念しゆうねんと言いますか、狂気きやうきに取り憑かれておりましたので、船酔いを意識することもありませんでした……」

「おう……」

「あなたはどうかだったの」

「アタシは今までに一回だけ酔つたな。過去のループで鹿児島かごしまから屋久島やくしまに行った時だけだ、四時間の航路のうち外の海に出た二時間の間のちよつとした揺れに完全にやられてさ、吐きはしなかつたけどカーペット敷きの船室から微塵みじんも動けなかつた」

「大変……その時はどうやって帰ったの？」

「それが帰りは全然平気でき。甲板かんぱんに出てずっと海見てた。トビウオが綺麗だったぞ」

「行ってみたいな」

「それじゃ行くか。ちよつとこの後の予定組み替えて目的地に加えるぞ」

「賛成！」

待合室に人が集まってきた、遠くに車やトラックが船に乗り込んで行くのが見える中、乗船改札が始まった。まさに旅の始まりの気分だった。

船内の案内所で鍵を受け取って部屋へ行き、荷物を置いた。

「すごいね。家に普通にあるような感じのお部屋が船の中にあるなんて」

「なんだかわくわくします」

「だな。でも救命胴衣きゅうめいどういが棚にきちんと用意されているのはまさしく船だ」

「ほんとだ」

ちよつとくつろいでからデッキに行くと、ちよつと出港の時刻だった。船が岸を離れ、ゆつくりと向きを変えていく。

「いいね、この感じ」

「ええ……」

「まさに旅の始まりって感じだ」

汽笛とともに、船は西へ進み始めた。北九州・新門司港到着は約十二時間後、早朝五時半頃らしい。

第九章 世界の架け橋

平日夜のフェリー船中は、学校の春休み期間中ともあつてかなり賑わつていた。部活動の遠征合宿団体らしき姿もいくつか見受けられ、団体貸切扱いの船室もあつたりした。

「さ、ご飯食べようぜ」

「ゴールドシップさん、なんかバイキングのお皿の上が茶色風味のようですが」

「野菜もつと足したら？」

「いいじゃねえか、普段は品行方正ひんこうほうせいな食生活なんだからよ」

「本当？ 今年の初めに酔い潰れていた時の冷蔵庫がすつからかんだつたから、一人の時の食事は雑だと思つてた」

「あれは年末年始だからたまたまだ。ベルちゃんに何か作る時のメニューを作り置き前提

で作ってるぞ。だから声を掛けてくれたらいつでも用意できる」

「そう？　じゃあこれからちよつとお邪魔しようかな」

「うっかり流しかけましたが、酔い潰れていたというのはどういふことでしょうか？　本当に飲酒を？」

「二十歳だから問題なし」

「……あなたの誕生日は三月六日、つまり一月一日の時点では十九歳よね？　あたしの休養開始もろもろで祝い損ねていたけど」

「君のような勘のいい娘はこの世で一番好きだぜベルちゃん」

余計なことを言つて逆に墓穴を掘ってしまった気がする。

「飲酒がバレたら学園から処分されるのでは……あれ？　ゴールドシップさん今二十歳なんですの？」

「百二十年生きてたらいい加減年齢が分からなくなってきたんだが、生徒手帳見て計算したら二十歳だったぜ」

「でも貴方は高等部……」

「あれだ、留年だよ。アタシはもう長いこと授業にも出てなければ、定期試験も受けてな

い。本なら退学処分というか、六年前にもう退学になると警告されたんだが、ちんちくりん理事長の一存いちぜんですつと学園にいる。名目上高等部三年まで進級してからの留年だな」

「そうだったんですね……でもやはり二十歳になっていない段階での飲酒が明るみになったら下手するとスキヤンダルというか処分されるというか……実際に処分相当の傷害事件を起こして貴方を酷い目に合わせた私が言えた義理ぎりではありませんが……」

マックイーンがしゅんとなった。さらに墓穴が追加されてしまい頭を抱える。席がお通夜モードになりかけたのを無理やり打破することにした。

「学園のほとんどを崩壊させてもどうにかなったんだ、もし処分されそうになったら今度こそ学園を支配する魔王になつてやるさ」

「あなたが言うのと冗談に聞こえない……ふふっ」

「もしゴールドシップさんが追放されたら、メジロの一同が迎え入れますわ。貴方が暇だと思つた時は、いつでも私が話相手や遊び相手になります」

「そつか、まあその時は……」

「マックイーンから抜け駆け宣言来たね、負けないよ」

「えっ、あ、そのようなつもりは……」

「いいの。そのくらい積極的でないと戦い甲斐がないから」

「えー、コホン、ご飯冷めちまうぞ！ さ、食べよう食べよう」

仕切り直して今度こそ食事を始めた。バイキングメニューの中に郷土名物も用意してあつたりして結構良かった。

「あーいいお湯だった」

「大きな船だと結構大きなお風呂があるんだね」

「国内の船旅でこのような経験ができるとは思いませんでした。これからもし旅行することがあつたら、船も選択肢に入れてみたいと思います」

「それは何より。でもあれだ、知り合いいわく、外洋に行くような航路のところだと、大荒れの日は危険だから風呂が閉鎖されることもあるらしい」

「そうなんだ……」

「さてどうするか、いつもならまだ夜の始まりといったところだが、これは朝早い時間に到着するしな」

「今日はずっとタマモさんのところにいたし、あまり疲れがないからあと二、三時間は起

きててもいいんじゃない？ 旅程も決まったようであまり決まってないし」

「そうですね」

部屋に戻って、予め持ってきていた全国道路地図や大きな時刻表などを広げた。

「ずいぶんいろいろ持ってきてたんだね」

「もともと行きあたりばつたりの旅だったからな。山の中で道路探すことも考えて道路地図にした。歩く時も車やバイク運転する時も使えるし」

「免許持ってたの!？」

「暇を見つけて行ってた。もちろん、いくら立場がアレでも行く日は休暇の届出をしてたぞ」

「いつ取ったの」

「ちょうど一年前くらいか。練習がてら時々乗ってたから、いきなり二人を道連れにして事故ることは無いと思うぞ」

「ふうん……三人でドライブもいいかもね」

「そうだな」

ドライブ。確かにいい選択かもしれない。二人の脚に負担をかけないようにしつつ、か

なり広い範囲を巡れる。

「さて明日、九州に着いたらまず何する？ 食い倒れに走るか、温泉で溶けるか、海を眺めるか、山を極めるか。もちろん屋久島行つてついでにトビウオを見るのはマストな」

思いつく限り挙げてみたけど、この中から選ぶか、それとも全部やるか。そもそも旅行を何日間にするかも決めてなかった。アタシ一人なら一か月でも二か月でも気の向くまま、途中でバイトして稼ぎつつ旅行もできるんだが、二人を連れ回りつつコンビニでバイトしたり、商店街で店番したり、牧場で牛の世話をしたりはできないしな。

「うーん……山？ 阿蘇山あそさんとか」

「いいですね」

「よし、トビウオと阿蘇は決まり。次は温泉か、一緒に食い倒れもできるな」

「結局全部になってない？」

「いいってことよ。ちなみに行程はどうする？ 超詰め込み強行軍コースなら三日、のんびりコースなら時間と資金の許す限りどこまでも。ベルちゃんは学園に何日休暇って提出したんだ？」

「一応、旅行日数は二週間くらいって書いたけど、必要だったらトレーナーに連絡して延

長することはできるよ。あなたの年齢なら学園の規則にある保護者にもなれるし」

「なるほど。マックイーンは？」

「私は無期限の休養扱いとなつていますので、親の許可と保護者の同行があれば随意に」

「ふむ。じゃあひとまず明日、ベルちゃんのトレーナーに聞くか。もし期間を長くするなら、脚の具合を診てもらつたりだとか、次のレースに向けての復帰計画なんかもあるだろうし」

「わかった」

日数に応じて巡る場所をいくつかリストアップして、続きは明日以降に決めることにした。一か月コースになると、リストアップどころか、リストに入っていないほうが珍しいくらい、九州内と近くの離島があらかた入っている盛りだくさんな旅程になった。

一か月コースの旅費問題は、すつたもんだの末、それぞれ出すというところで解決した。全額メジロの家で出す、いやベルちゃんとマックイーンの貯金から出す、アタシが全額払うなどやり合つた結果だった。

「計画はこんなところかな」

「飽きる暇がないくらい盛りだくさんになりましたわね」

「お土産みやげがトラック三台分になりそうだ」

「心配しとく？」

「いや、まだいい」

いい時間になったので寝ることにした。諸々の準備を考えると、朝起きるのは四時くらいがいい。バリバリ活動するためには睡眠時間の確保が大事。

「じゃ、アタシは畳敷きに布団敷いて寝るわ。二人はベッドな」

「あたし畳の方で寝たい」

「そうか。じゃあアタシがベッドに……」

「あなたがいなきや意味がない」

「ええ……？」

「その、私も……」

「さすがに狭いから無理だつて、な？」

二人をベッドに押しつけていつて寝かせた。

布団に入つて、なんかこんな風に女の子に囲まれるゲームがあるつて、何個か前のループで一緒だったトレーナーが言つてたな。ギャルゲーだったか、なんだつたつけな。あい

つ画面の向こうに入れ込む割には、現実のウマ娘たちを指導こそすれ恋愛対象には絶対にしないまともな男だった。ゲームみたいに女の子に囲まれるつていいことなのかかんねーけど、ただ、この世界から結局は弾き出されるとなると、ちよつと虚しさも感じた。

——この空間。たつた数日前に来たばかりの場所だった。前は声しかなかった空間に、今度は誰かがいた。しかも二人。そのうち一方、長身のウマ娘らしき外見の人物が話し始めた。

「ゴールドシップ、数日ぶりだな。覚えてるか。今回は人の姿を取ることができた」

「この空間に来るまでほぼ完璧に忘れてしまつていたな。残念ながらここで学んだことは外にはほとんど持ち出せないみたいだ」

「そうか。できるだけ頻繁に会えば、もしかすると記憶に残る割合が増えるかもしれない」

「そうだな」

「さらには、こちらの娘を介すること、この空間で得られた知識を外に引き出せる可能性が高くなるかもしれない」

「彼女は？」

「数多の世界を見通し得る存在。すべてを同時に観測することはできないが、最も近い別世界の自身を見ることが可能」

「……もしかしたらアタシのこの変な現象も、彼女の力を使うとループ二回分を同時に観測して、しかもその状況を外の世界で記憶や記録として持ち越せる可能性があるのか？」

「さすがだ、ゴールドシップ。どの世界でも明晰なだけはある」

長身のウマ娘からお褒めの言葉を頂戴しつつ、横のウマ娘の方を向いた。

「よろしくな。えつと……」

「——『わたし』は、多くの宇宙では、ネオユニヴァース、と呼ばれている。『わたし』はそれを受け入れている」

「ネオユニヴァースか、壮大な名前だな」

「アフアーマティブ。この名前は、とても気に入っている」

「——彼女の話と総合して事象を検討し直した結果、ゴールドシップ、君は世界を転移している可能性が高い」

「単なる時間のループだけではない、と」

「今のところ、転移が発生する条件は新たに判明していないが、彼女の力によりその解析が進むことが期待できる」

「なるほどな」

少しは希望が出てきたと言つてもいいのだろうか。

「ネオユニヴァース、外の世界では君にいつ会えるんだ？」

「この世界では、そうだね。すぐに会ってみたい。だから、着いた先で『待っている』」

「翌朝までに？ 九州までどうやって？」

「問題ない。ランデブーポイントは、小倉レース場に」

「わかった」

アタシの疑問は半ばスルーされたが、今はとりあえずこの問題を早く解決したい。すべてはそこから。

「私はまだこの事象に手を出せないままだが、できる限りのことはしたい」

「ありがとう」

夢から覚めたのは午前三時半だった。今度は一部だけはつきりと記憶が残っていた。ネ

オユニヴァース、彼女に会う。そのためには小倉レース場に行かなければならない。もう一眠りするには少々時間が短く、売店が開くまでにはあと一時間ほどある。二人を起こすのも悪いので、もう少し待つことにした。

四時。二人とも熟睡じゆくすいしている。まだ時間があるし、もう少し待つ。

四時十五分。よく寝ている。このまま二人の寝顔を見ていたいが仕方ねえ、起こすか。まずは一人目、最近じやつかん若干ほわほわしているツンツン女王様の耳元みみもとで囁いた。

「……大好きだぜ、ベルちゃん」

「……あたし……も……大好き……」

寝言で返事が来て、とてもこっ恥ばずかしくなった。……声では目覚めそうにないので、普通に肩を叩いて起こすことにした。

「起きろ、朝だぞ」

「——はっ、夢？ ……ひやつ！ なななんでこんな近くに」

「大声で起こすのもアレだなと思って」

「そう……ひよつとして、耳元で何か囁いた？」

「いや、そんなことはない、ぞ？」

「……わかった。夢に出てきたのは忘れる」

「おう」

次はもう一人。ベルちゃんの前で囁き攻撃を使うわけにもいかなかったので、最初から肩を叩いて起こした。

「おはようございます。まだ四時二十分……ああ、そういうば五時半に港に着く予定でしたわね。朝ご飯はどうしましょうか？」

「なんか通常進行のマックちゃんでちよつと助かった。一応四時半から入港二十分前まで営業してくれるらしいけど、ここで食べるか、下船げせんしてからどこかで食べるか、どっちがいい？」

「そうですね……せっかくですし、地元ならではのものを頂きたいと思います。朝早いのでお店が開くまで時間がありそうですが」

「ま、なんとかなるだろ。じゃあご飯は着いてからということだ」

簡単に身支度を済ませ、入港案内の放送が流れてからロビーの方へ向かい、鍵を返却してから下船口げせんぐちの前で待つ。着岸後ちやくがんしばらくして、下船口が開かれた。

「おっしや、九州初上陸だ」

「とうとう来たね」

「ええ」

到着後、ターミナルビルの前に待つ送迎そうげいバスに乗り、港から一路市街地の方へ。小倉こくら駅に着いたのは六時半過ぎだった。

第二〇章 旅路、そして日常を続ける覚悟

連絡バスから降りた後、小倉駅こくらを北から南に通り抜けて少し歩き、商店街の中にある二十四時間やつているという地元チェーンのうどん店にきた。小倉に詳しいとあるウマ娘から紹介されたうどんチェーンで、その彼女と会う約束をしていた。

「や、三人とも長旅ながたびお疲れさん。まだ旅の始まりみただけだ」

「ようネイチヤ、すっかり定着してゐるな。まるでここからここ住みだつたみたいだ」

「アハハ、みんなからよく言われるわあ。『ネイチヤんは昔からおつたもんね』つて、いやいやアタシはまだ一年かそこらしかいないって」

ナイスネイチヤ。昨年トウインクル・シリーズを引退して、卒業記念の旅行で日本全国を巡り、現役時代げんえきに立ち直るきっかけになったというここ小倉こくらの方ほうにも挨拶あいさつに来たとき、

たまたま商店街の困り事解決などに参加したりして、いつの間にかずるずると居着いてしまったという感じらしい。ちよつと前に長らく空けていた家を引き払い、本格的に移住したとのこと。

ネイチヤが勧めるお店の定番セットというメニューを四人前頼み、話の続きに戻る。

「まあ、今のところいつまでお世話になるかは分かんないけどさ、なんかこのままおばあちゃんになるまでここに居そうな気がする。母さんみたいに何かお店持ったりしてさ」

「ネイチヤはいろいろ似合いそうだな。定食屋を仕切るおかみさんとか、バーのママ、いやバーテンダーでもいいか。他にもいろいろ、お店をやってる風景が似合う感じだな」

「そつかり、やつぱそつち方面？ これもよく言われる」

「なんというか、ネイチヤ相手だと、どんなお客さんも気安く喋れる安心できる雰囲気があるな。まるで気のいいおばちゃんみたいいな」

「おいこら、同じ二十代序盤じよばんの女の子捕まえておばちゃん呼ばわりとはいいい度胸どきょうしてんねえ」

「褒め言葉として受け取ってくれ」

「はいはい。おばちゃんばかりが喋ってちゃ、そちらのうら若き乙女のおふたりさんが置

いてきぼりになっちゃうし、まあまあ、ここいらで話の主役は譲りますよー。ごめんね、メジロマックイーンさんとメジロドーベルさん」

「え、どうして私の名前を」

マックイーンが驚いた様子で尋ねた。確かに、マックイーンはかなり大きな事件を起こしたが、いずれも学外での事案で、デビュー前だったことと、メジロ家と学園、U R A の力で情報統制が敷かれたこともあり、生徒にはほとんど知れ渡っていないはずだった。

「探偵ネイチャさんの力、というわけではないんだけどね。あまり表では言っていないんだけど、一月からU R A の非常勤職員として、トウインクル・シリーズに出る選手のメンタルケアの仕事もしててさ。小倉常駐で、レースに出る子だったり、トレーニングで小倉に来る子の面倒を見てる。あとは佐賀の地方トレセンへの出張も。その過程でU R A に登録がある全員分の記録も参照したり……ごめんね、陰で秘密を調べて握るみたいな真似しちゃって」

「あ、いえ、むしろ……私自身のことを知っているのですたら、いろいろと話しやすいなと思います」

「ありがとね。そしてメジロドーベルさん。あなたの方はG I を複数回勝っているし、凜

として美しいウマ娘だっけかなり話題だから知らない人がいたらモグリ、ってレベルだけど……左脚、怪我しちゃってるんだってね」

「はい……痛みなんかはもう無くて、普通に歩く分には問題ないんですけど」

「そうなんだ。アタシも現役時代はそこそこ怪我をして、休養せざるを得なかった時期もあったね。ま、でもなんだかんだでブロンズコレクターの珍記録を達成しつつ最後は走ってから引退できたし、よかったかな。お医者さんの言う期間は負荷をかけずに歩いて、そこからはトレーナーさんと相談だね」

「はい」

ちようどうどんが運ばれてきたので、話を一旦打ち止めにして食事にした。西の方のだけがうめえな。あとぼたもち。

「ゴルシ御一行様はこれからどんなご予定で？ 温泉？」

「全部盛りだくさんだが、今日は丸一日小倉だな。小倉レース場で待ち合わせてちよつと会う人がいる」

「え？ ゴールドシップさん、それは初耳ですが」

「……うわき？」

「あ、すまん、言い忘れてた。というか急遽決まったというか……。だからゴミを見るような目で見ないでくれベルちゃん、アタシにMの気はねえ」

「そう……それは良かった。あたしの一撃一撃が悦びに変換されてたらダメージを与える意味がないものね……」

「こええよ助けてくれマックイーン、ネイちゃん」

「こういうのは二人の話し合いで解決すべきかと」

「そうだぞゴルシ、アタシたちがしゃしゃり出たって何も解決しないから。がんばれー」
万事休す。辞世の句を詠むべく紙とペンを探し始めたところで、ネイチャが取り成してくれた。

「まあまあ、こいつがいくら学園を丸ごと自分のハーレムにしたことがあつたつて、もうずつとベルちゃん一筋なんですよ？ それともマックイーンともお付き合いです？」

「あー、それは……」

「三角関係だね。まさか小説や漫画みたいな展開を親戚にして親友のマックイーンとやるとは思わなかつたけど」

「あの……私は、告白こそしましたが……ゴールドシップさんからの断りの返事を聞きたくないと拒絶きよぜつしているだけで、その……」

「なるほどねえ。……アタシが代わりに言っちゃうのもあれだけど、おぼちゃんのお節介だと思つて許してね。マックイーンさん、ゴルシは別にあなたの告白をハナから断るつもりじゃない。いくら押しに弱くても最初からその気がないならそのへんはきちんとするつしよ。ね？」

「……ああ。それだけは確實だと約束する。我ながら情けないけど、迷っているアタシを許してくれ」

「そうでしたか……」

「そういうことだから、三角関係です」

「ふふつ、まあみなさん若者ですしね……つと、話が思いきり脱線しちゃったんだけど、誰と会うの？ 極秘ごくひだったら話さなくていいけど」

「ああ、とあるウマ娘にな。ネオユニヴァース、つて言うんだけど」

その名前を聞いた瞬間、ネイチヤの顔に困惑こんわくの表情が生まれた。

「ネオユニヴァース、さん？ 誰それ？」

「いや、まあアタシも最近連絡を取ったばかりで今回初対面しよたいめんなんだが」

「いやそうじゃなくて。その子トレセンにいるの？ 中央に限らず、地方とかも含めて。

まあ、トウインクル・シリーズのようなレースの世界を目指す子ばかりじゃないから、いなくても不思議じゃないけど、少なくとも中央や各地の地方トレセンにその名前の子はいない」

「そうか……てつきりトレセンの生徒かと思ってたんだが」

「トレセンにはいないね。ところでどこで会うの？」

「小倉レース場にしてる」

「レース場か……アタシもついていっていいかな？ 邪魔にならないように物陰ものかげから見たい」

「そうだな。いや、むしろメンバーの一員として同行してくれ。そのためにはちよつとアタシの身の上話というか、込み入った事情をネイチャに話しておかないといけない。それを抜きに物陰から聞いても何も分からなくなるから」

「なんか大冒険みたいな話になってきたけど、乗りかかった船ですし、全部聞かせてもらいましょう。ネイチャさん、ちよつと頑張らせてもらいますね」

長居しすぎるのも良くないと思ったので、お店を出て公園の方へ行くことにした。少々遠い感じだったけど、腹ごなしにはちようどいい。

公園でなんとかベンチを探し出して座り、アタシのここまでの経験を洗いざらい話した。何度話しても荒唐無稽こうとうむけいな内容ながら、ネイチャは真剣まことに聞いてくれた。

「なるほど、と言つても非常に理解が難しいねこれ。正直信じがたい。この話を聞いて何らかの見解を示せそうなのは、知ってる範囲だとタキオンさんくらいじゃない？」

「そうだろうな。実はこここの前の世界で何回かタキオンに話をしたけど、今のところは十分な手掛かりになる見解は得られていない。詳しい見解と仮説をくれたのはアタシの夢の中で会う謎の存在だが、夢の世界から記憶をそのままに情報を持ち出すのが困難でな。それを打開するのが今から会いに行くネオユニヴァースつて子だ」

「そのネオユニヴァースさんという方と、ゴールドシップさんとは、まだ今のところは夢の中でしかお会いしていないのですよね？」

「だな。姿は知っているけど、現実世界では会ったことはない。今回の会う約束も、アタシ達が旅行で九州の方に向かってるつて伝えたら『ではそつちに行く。明日会おう』み

たいなノリだったし、ひよつとしてこの近くに住んでたりするののか？」

「うーん。それが早い時間だったら北九州空港に夜中〇時過ぎに着く飛行機で来た、というのもありえなくはないけどね」

「夢から覚めた時は午前三時半だった」

「じゃあ朝の飛行機？ それとも新幹線？ これはネイチャさんにも分かりませんな
……」

「そもそも何時の約束なの？」

「いい質問だベルちゃん。何時に会うか決め忘れた」

「ネオユニヴァースさんへの連絡手段は？」

「ない。ここで寝たら夢の世界で会えるかもしれない」

「……ばか？」

「蔑むさげすような視線をありがとう。ちよつとゾクゾクしてきた」

「ゴルシさんや、変な性癖せいへきに目覚めないでね」

ネイチャにわりと真顔まがおで諭さとされてしまった。

「で、どうする？ レース場が業務を始める時間から行つとく？ アタシの仕事部屋の横の控室ひかえじつが空いてるから、そこで待っててもいいよ」

「そうするのがいいか」

「その必要はない。ネオユニヴァースは、ここに来た」

「!？」

夢で聞いたその声の方に振り向くと、ひとりのウマ娘が立っていた。透すき通るような姿、何か不思議と壮大そうだいさを感じさせる雰囲気をもとっていた。

「あなたが、ネオユニヴァースさん？」

「アフアーマティブ。ネオユニヴァースは『わたし』の呼び名。よろしく」

「よろしく願います……？」

「まずは、謝罪しやざい……黄金ゴールドの船シップとの約束で、時間を言い忘れた。着いたタイミングで、そこに『来る』つもりだったから」

「アタシ達が着いたタイミングで、つて、ネオユニヴァースはレース場の近くに住んでい
るのか？」

「ネガティブ。今のネオユニヴァースは、どこにも住んでいない」

「へ？」

ネオユニヴァースは、その後驚くべきことを付け加えた。

「みんなに分かりやすく言うなら、さしずめ：タイムトラベラー。『わたし』は、未来から来た」

「未来人!？」

「アフアーマティブ。その認識が一番明快にして妥当。ネオユニヴァースがここに来るために、主観的には時間を遡った感覚がある」

「てことは、アタシの、アタシ達の未来がわかるのか!？」

「断言はできない。すべての『わたし』にとつて、これは初の試み。時空を旅することによる時間的前後関係の変動は、何が起きるかわからない」

「可能性でもいい。現状の突破口にしたい」

「わかった」

結論から言うと、ネオユニヴァースが見てきた「未来」は、デッドエンドだった。「未来」に、アタシは存在しなかった。考えられる可能性はいくつかあるが、いずれもアタシがこの世界に居続けることができない見通しをより確実にする材料にしかならなかった。

マックイーンは北海道にいたらしい。ネオユニヴァースいわく、すべてが抜け落ちてしまったかのような姿であったということ。そして、ベルちゃんは、かつてベルちゃん自身が冗談交じりに言った「すべてを捨てた引きこもり」と化してしまっていたという。

その「未来」の惨状さんじょうに、アタシ達はしばらく言葉が発することができなかった。

「可能性とはいええ、今までのそれぞれの経験から行くところなりそうなりそうなり可能性が高い、という感じだな……」

「そつか……やっぱりいなくなっちゃいそうだね……」

「ゴールドシップさんがいなくなったら……そうですわね……確かに……」

「この世界せかいの行方は流動的。世界せかいを大きく改変する黄金の船ふねの寄港きこうが起きた。その寄港は、『わたし』が見てきた世界さえも不確定の混沌ケイオスの海に沈め、拡散させるかもしれない」

ネオユニヴァースの言葉は所々難解だったが、未来がネオユニヴァースの見てきたものと変わる可能性がある、という意味であるらしかった。

「未来を変える方法はないの？ あつたら教えて」

ベルちゃんがネオユニヴァースに問う。その手は膝の上におかれ、小さく、きつく握られ、小刻みに震えていた。横にいるマックイーンも、不安な表情を浮かべながら、すが縋るような目でネオユニヴァースを見ていた。

その問いに、ネオユニヴァースは目を閉じ、軽く首を横に振った。

「『ケイオス』が支配する世界は、すべての物事があらゆる結果を生む。『バタフライ・エフェクト』、蝶のわずかなはばたきが、最後は大きな嵐を巻き起こすかもしれない、という喩えがある。……これは『ぼく』からの伝言、『精一杯、一緒にいると、あるいは叶うかもしれない』と」

「精一杯、一緒にいる、か」

もちろん、アタシは元からそうするつもりだったし、ベルちゃんやマックイーンもそうだろう。特効薬も何もないにせよ、それなら、せめて最後は円満に、決して避けることができない大きな悔いが、少しでも小さくできるよう、日々を過ごしていかなければなら

ない。

「わかった。ありがとう、ネオユニヴァースさん」

「私も覚悟を決めました」

「これから、何かが分かったら、いつでも望む場所に呼んでほしい。すぐに行くから」

「ありがとな。どうやって呼んだらいい？」

「テレパシーでもいいけど、こっちが確実」

そう言うネオユニヴァースはスマートフォンを取り出し、ネイチャを含むみんなと「お友だち」になった。瞬間移動みたいな真似ができて、コミュニケーションは普通の人々と変わらないものを使つてできるみたいだった。

「じゃあ、またね」

ネオユニヴァースはアタシ達の死角になるところに移動し、振り向いたら姿を消していた。まさに神出鬼没しんしゅつきぼつだった。

「……やつぱり、あなたがいなくなったら、あたしは引きこもりのニートになつてたんだね。ひたすら走ることに、あなただけを見てきたけど、どちらも一体となった大切なもの

だったから、ひとつを失ったら、もうひとつも捨ててしまったんだと思う。……正直、そう遠くない未来にもしあなたがいなくなったら、どの選択肢をとつても最終的にはそうなってしまうかも」

「しかし、そのような未来は決してはねのけなければいけません」

「そうだな」

やれることは少ないが、それでも何かをやる。三人それぞれお互いを見て、頷いた。

「さて、お三方さんかたの決意を見届けたし、ネイチヤさんとしてもできることがあれば微力びりよくを尽くすつもり。もともとかなり自由度が高い立場だし、出張の名目でいつでも駆けつけるよ。むしろ呼べ。困った時に三人だけで勝手に悩んで勝手に決めたら許さないから……なんて」

ネイチヤが笑いながら勇気づけてくれた。

「ネオユニヴァースさんとの話がひとまず終わつたけど、これからどうする？ 予定通り今日は小倉にいる？ それとも予定変更さつそくして早速旅行の続きですかね？ もし小倉にいるならアタシがいろいろ案内するよ」

「そうだな。せっかくだし案内してもらうか。どうだ？」

「賛成」

「ぜひとも」

「とういわけで、よろしくな」

「あいよー」

その日はネイチヤに引率されるまま、北九州のエリアや隣しものせきの下関のエリアなどを片っ端から巡った。関門かんもんかいきょう海峡を船で渡って、人道じんどうトンネルを歩いて戻ったり、市内を一気に西の方へ行つて皿倉山さらくらやまから景色を眺めたり。途中から完全に観光をほっぽり出して謎のグルメレースになつていた気がするが、それもまた一興いっきやう。

夜、小倉駅近くのホテルで宿泊。そこそこ高めだが快適そうな部屋で、一つ特設のベッドを用意してもらつて三人一部屋にした。例によつて譲り合いが起きて、なぜかアタシが選んだ特設ベッドに残り二人が入り込もうとする本末転倒な事態がまた起きた。

翌朝、九州を時計回りで行くようなコースで本格的な旅行を始めた。そこに観光地あれば立ち寄り、観光地がなくとも立ち寄り、早朝に出たのに次の宿の別府べつぷに着いたのは日が暮れてからだった。電車沿線でない所は、近い駅で下車するとなぜかいつもメジロの黒塗

りの車が待つていて、その場所まで連れていってくれた。ベルちゃんもマックイーンも連絡をしていないとのことなので、思いきり探知しつつ追尾ついでびしているらしい。

別府からさらに下り、二日かけて鹿児島着。前々からの予定通り、屋久島に渡る船に乗った。往路については見事に全員船酔いで撃沈してしまつて、揃つて船室で横になつたまま動けなかつたが、帰りは問題なく海のウォッチングができた。島では二人の脚のこともあつて、さすがに本格的な登山となる縄文杉じょうもんすぎ見学はやめて、島をぐるりと一周した。途中、サルの群れに遭遇そうぐうした時、群れのオスザルがベルちゃんとマックイーンには思いきりデレデレしてすり寄る感じを見せていたのに、アタシ相手にはメンチを切つてきたのでガチで対抗しようとしたら、ベルちゃんに頭をはたかれた。

鹿児島に戻つてきた後は薩摩半島さつまはんとうを南に下つて、指宿いぶすきで砂蒸すなむし温泉に入り、ぐるぐる回つて北上、熊本まで来たら阿蘇に立ち寄り、福岡の南の方から佐賀、長崎、佐世保、さらに北の海沿いを行つて福岡に到着。

「さあ野郎ども！」

「野郎じゃないでしょあたし達」

「……コホン、レディ諸君。今夜食い倒れたらちようどアタシの資金が尽きるから、明日は二人とも飛行機で帰っててくれ。アタシは半月ばかりバイトして帰るからってあ痛つつつ!!」

「却下」

「右に同じですわ」

「すみませんアタシが間違っていました」

「帰りの飛行機代くらい出すから。あるいは貸す。三倍返しね」

「高利貸こうりがしお嬢様だ……」

「そうだ、あなたの身体で払ってもらおうかな」

「……中洲なかつで接待せつたいをするお仕事を申し付けるのでして？」

「バカ言わないで。人に渡すわけないじゃない。相手はあたしだけ。何してもらおうかな」

「ベルちゃんの部屋に掛かっている大切な絵の額がくが落ちないよう支える役なら任せろ」

「わかった。24時間365日いつでも役目を果たしてね。大丈夫、必要なお世話は私がするから」

「ごめんなさい勘弁かんべんしてください。あとそれ満面の笑みを浮かべながら言われると怖い」
帰りの旅費が確保されたので、宣言通り食い倒れに走った。こういう時はいっぱい食べても平気でいられるウマ娘的代謝たishyaパワーがありがたい。とはいえ、アタシも結構気合を入れないといっぱい食べられないし、ベルちゃんも人並み、過去の世界ではスイーツをパッキングしてはすぐにまるまるツクイーンになっていたマックちゃんも食がヒトの一般よりも少ない状態。まるで無理にダイエツトしようとする少女みたいな食の細さが常つねだった。

というわけで、アタシに比率がかなり偏かたよったシエア状況になった。こういう時はちよつと多めに食べられる子がいれば……オグリとスペはいかん、店まで食われる。ライスとウラがいいか。かわいくてちよつぴり多めに食べてくれて、さらに場ばがほっこりする。良い。

「……うわきの波動を感じた。今度は誰？」

「いや、いろいろなもの一杯食べるなら、ここにライスとウララがいたらいい感じにシエアできそうだなって思ったところだ」

「なんだ、良かった。東京に帰ったらみんなまでピクニックに行くのはどう？」

「いいですわね。楽しそう」

「この先連休もあるし、おでかけにはもってこいだな」

ちよつと未来の予定が決まると楽しくなった。あとはそれが実現できるよう、特に、アタシがその日その時まで無事にたどり着けるよう願うしかなかった。願うならやはりあそこか。

みんなで腹一杯になったところで締めめのラーメン——はさすがに無理だった。大人しくホテルに帰り、旅先での最後の夜を楽しんだ。

旅行最終日、地下鉄の駅に行く途中にある榎田神社くしだじんじやに参拝した。一世一代いつせいいちだいいの御礼と願う事なので、賽銭さいせんを奮発かんぱつしようと思つたら財布がカラッポだった。仕方がないので、小銭入れにあつた中で最大の額面がくめんだった百円玉を入れて祈つた。少ない賽銭さいせんであれもこれも願うと強欲ごうよくだと神様に思われそうなので、一番大切なことだけをひとつ願つた。

地下鉄に乗ると、あつという間に福岡空港に着いた。航空会社からのメールでは保安検査に一時間かかるおそれがあるとかなんとかで、早く来いと書かれていたのでめつちや早く来たものの、ちょうど空いている時間を引き当てたらしい。あつという間に検査が終

わって、中に入ったエリア内で一時間以上待つことになった。せつかくなので土産物みやげものをさらに買い足しつつ、なんかいろいろな先行先があるのを見て楽しんだ。ここから遠く北海道の札幌さっぽろ・新千歳空港しんちとせに行ける直行便の搭乗とうじょうが始まっていた。

「ベルちゃん、マックイーン。あれに乗ると北海道までひとつ飛びらしいぞ」

「すごいね。九州から北海道まで飛んでるんだ」

「新千歳の文字を見ると、ついそちらに惹ひかれてしまいます」

「また行くか」

ゲート前に戻ると間もなく搭乗案内が始まった。この飛行機に乗れば、二時間足らずで東京に舞い戻ることになる。何日もかけて来た遠くの土地とて、新幹線や飛行機の力ならあつという間に着く。非日常と日常は隣合わせのようだった。……アタシは非日常の側か。

飛行機が飛び立ち、家並みの上を飛びつつぐんぐん上昇していき、向きを東に変えて一気に九州を離脱した。景色を見ると、あつと言う間に四国を通り、紀伊半島を横断し、気づけば羽田への着陸態勢に入っていた。飛行機が着陸し、キャビンアテンダントさんからの「当機は東京国際空港、羽田に着陸いたしました」という放送に、また日常、あるいは

日常に近い非日常に帰ってきたことを感じた。

「じゃあ、また明日」

「またお会いしましょう」

二人と別れて、久々の我が家に帰宅した。明日まで休みを取っていて、明後日からまた食堂で腕を振るう日々が始まる。その日常をいつまでも続けたいと思った。

第一章 高みへと至る姫

旅行翌日の丸一日で疲れを取りつつ、空っぽになっていた冷蔵庫に食材を揃え直して、明日に向けて気合を入れ直した夜。

「しれつと二人が家にいる光景を自然に受け入れてしまっているアタシがいる……」

「一緒にいられる時は一緒にいたいな、って」

「来てしまいました……」

昼過ぎくらいに二人揃って夕方に来るとの連絡があつたので、ついでに二人を引き連れて買い出しの手伝いをしてもらった。さすがに総量三倍とまでは行かなかつたが、五割増しくらいで物を買えたので、この先の買い足しの手間が少し省ける^{はぶ}。

「さ、休暇最後のご飯は手巻き寿司だ。そろそろご飯が炊けるから酢飯^{すめし}の準備するぞ」

「何手伝つたらいい？」

「ベルちゃんは土産で買って来た特上有明海苔ありあけのりを軽くあぶって手頃な大きさに切つてくれ。元の一枚を二つ折りで四枚にしてくれたらいい感じ」

「わかった」

「マックちゃんはアタシの耳元で『がんばれ♥ がんばれ♥』つて応援してくれ」

「え、その、恥ずかしいのですが……ご依頼とあらば……」

「マックイーンに何させようとしてんのヘンタイ」

「……コホン、マックイーンは皿と醤油しよゆの用意を頼む。あと小さいクーラーボックスに入れてた特売の刺身盛り合わせも出してくれ」

「わかりました」

わいわい言いながら準備をして、手巻き寿司パーティーを楽しんだ。ついでにマックちゃんとベルちゃん付きのSP団にも交代で食べに来てもらった。今回の旅行でもつかず離れずつと護衛ごゑいしてくれていたそうなので。

「いやー腹一杯になったな」

「とても満足」

「ちよつと食べ過ぎたかもしれません」

この満足な気持ちのまま、少し出てきた眠気ねむけに身を任せて寝ようかと思つたが、後片付けをしなければならぬ。眠い目をこすりつつ立ち上がろうとしたところで、ベルちゃんベルちゃんとマックイーンから止められた。

「片付けは任せて」

「ゴールドシップさんは休んでいてください」

「助かる」

今度こそ横になり、目を閉じ――

「――ん？」

いつの間にか寝ていたらしい。思いきりフロリングの上に頭を置いた気がしたが、今は頭の下に少し柔らかい感触がした。目を開けると、ちよつど目を閉じてうつらうつらしているベルちゃんの顔が目に入った。これはもしかして膝枕ひざまくらか。身体を起こそうと少し頭をずらしたところでベルちゃんが目を覚ました。

「あつ」

「おはようベルちゃん」

「……おはよう」

「膝枕ありがとな」

「どういたしまして」

「マックイーンは？」

「先に帰った。二人でゆつくりして、つて気を利^きかせてくれて」

「そっか」

「膝枕されるならどつちが良かった？」

「究極の二択だな」

「マックイーンにもしてもらったことあるの？」

「無いな。この世界でも、過去の世界でも」

「そうなんだ。マックイーンに膝枕してみたら、つて言つところかな」

「ホワイ？」

「なんで突然英語になったか分からないけど、両方体験しないと比較して選べないで

しょ？ きちんと比較して、それで選んでもらいたいから」

「ハハッ、律儀りちぎだな」

「律儀つてほどでもない。あとさ、マックイーンに同情したり、塩を送つたりするわけじゃないけど、そうしないとマックイーンに対して不公平だなつて。……あなたが知るはずはないし、もしかしたらこれはあなたがこの世界に來たことで改変された偽にせの記憶かもしれないんだけど、マックイーンはあなたととても親密だったから」

「そっか……」

「それじゃ、あたしもそろそろ帰るね。また明日からお仕事頑張つてね」

「ベルちゃんの予定は？」

「しばらく座学ざがくだけかな。五月の連休明けに検査して、状態が良かったらリハビリを始めることになつてる」

「わかった」

ベルちゃんを送り出し、アタシも風呂に入つて本格的に寝ることにした。

翌日。今日から食堂での業務に復帰し、学園の生徒・教職員のために料理を大量に作る

日々を再開した。

午後が空くシフトの時は、不定期でトレーナーがまだついていないウマ娘達のトレーニングにつき合ったり、アドバイスをしたり、トレーナー達からの依頼で併走(へいそう)トレーニングの相手を務めたりした。

六年にわたり一切走(いっさい)っていないなかったアタシがベルちゃんと走っていた姿は誰かに目撃され、また、コースパトロールカメラで撮影した映像が出回り、またたく間に学園中が知るところとなっていた。パトロールカメラの操作権限を持つのはトレーナーに限られる。つまり、

「アンタのせいだな、ベルちゃんのトレーナーさんよお」

「ふふつ、才能は活(い)かすべきです。とつくにお気づきでしょう？ 私は何でも利用する。トウインクル・シリーズ全体の底上げにもつながりますから」

「へっ、大層なことに取り組んでんな」

「ドーベルさんが休んでいるので、トレーニングが無い分暇があるならトウインクル・シリーズ活性化計画に頭と身体を貸せと、URRから仕事を押しつけられましたね」

「そりゃ大変だ。がんばれよー」

「ありがとうございます。……あと、ドーベルさんの精神安定を助けてくださってありがとうございます。今回の旅行で怪我によるショックからほとんど立ち直れたようです。連休明けに脚の診断をしてもらって、その結果次第ですね。まあ、今のところ自覚症状が再発していませんのでおそらく大丈夫そうですね」

「良かった」

「——本当に、レースに出る気はありませんか？」

「無いな。あまり詳しくは話せないが、アタシはベルちゃんの次のG I勝利を見届けてからここを去る——かもしれない。ベルちゃんにはまだ言うなよ」

「ほう？ 何か事情が？ しかし次のG Iとはわりと不確定なものを目安にしていますね。もし私が乱心して『次は宝塚記念だ』って言ったらどうします？」

「そしたらその時までだな。ちよつと引越しに手間取るかもしれないねえが」

「ずいぶん、決意は固そうですね」

「いろいろあつてな。……ベルちゃんはいつまで第一線で走れると思う？」

「なかなか難しいことを聞きますね。……健康体で選手を引退して、トレーナーなど次なる人生に向けて歩みを進めるならば、おそらく今年中がG Iを勝てるギリギリの場面

かと」

「その心は？」

「今回の全休ぜんきゅうで、ドーベルさんの身体には多少なりとも揺ゆり戻しが来ているはずで

左脚の怪我も長い目で見ると何らかのリスクとはなり得ます。あと、運動能力やトレーニング記録、レース記録を見ると、いわゆる『ピークを過ぎた』状態であると判断していただきます」

「なるほどな」

「リハビリ、基礎トレーニング、実戦トレーニングを考えると、GIは今年の秋早めが良さそうです。とはいえ、天皇賞（秋）はメジロブライトさんが目標にしていると彼女のトレーナーから聞いていますし、トライアルに使うレースとの間隔も考えると——」

エリザベス女王杯の連覇。もし今年が彼女の選手生活としてGI勝利を狙える最後になるなら、未だ誰も成し得ていない偉業いぎょうを達成したい。そうトレーナーは述べた。

まだドーベルさんには言わないでくださいね、その言葉を残してベルちゃんのトレ

ナーはトレーナー室に引き上げ、アタシは日が暮れるまでアドバイスやトレーニングの手伝いに精を出した。

シャワーで汗を流し、食堂で夕食を摂^とってから帰宅。エリザベス女王杯までは約七か月。脚の診断を受ける時期からだと言半年。決して長い期間ではない。ベルちゃんとしてGIを何回も勝ったアスリート、自分の身体のこととはよく知っているだろう。トレーナーから目標レースを聞くか、ベルちゃんから言うか、いずれにせよ、そこが目標となる可能性が高い。さて、アタシはその時期までこの世界に居続けることができるだろうか。

「その時期までではできると思う」

「そうか……つてうわっ！　なんでネオユニヴァースがここにいるんだ!？」

「早速ながら、新しい仮説を得た。ASAP、すぐ伝えなければと思つて、直接ここに来た。いわゆる『テレポート』」

「そうか……」

彼女の神出鬼没ぶりについては驚いていると一生分の驚きを使い果たしそうな気がしたので、驚かないようにしよう。

「夢の中で『あなた』が聞いたと思う、この世界が外から干渉を受けているという仮説が、補強された」

「干渉か……詳しい話を聞きたい」

ネオユニヴァースは軽く頷き、一呼吸入れてから話し始めた。

「数多くのウマ娘がトレーニングをし、レースに出走する。基本的にはトレーナーの指導で行われるけれど、このトレーナーの指導が、実は上位存在の意志により動かされているのではないか？　これが先日の仮説だった。……ここまでの記憶は“carry out”できていた？」

「おぼろげだったものが今はつきりとなったよ」

「オーケー。——前回までは、この事象があなただけに起き、あなたに対してのみ干渉されていると考えていた。今日は、その説を一部否定し、新たな仮説を提示する」

「この事象は、あらゆるウマ娘に起きている可能性がある。また、干渉もあらゆるウマ娘、そのトレーナーに対して発生している可能性が高い」

「どういふことだ……?」

「言語化が難しく、言語化できたところで説明も難しい。あなたは聡明だが、それをもつてしても理解は困難であるかもしれない。それは、世界、そのものが大きく変わり、記憶すらも変わってしまうから」

「難しい、か」

「難しい。ただ、あなたには少し『アドバンテージ』がある。おそらく、あなた自身の記憶は改変されていない。ゆえに、あなたはあなた自身を信頼できる。もし改変されていたとしたら、あなたはこの異常事態を認識できたかどうか怪しく、そうなるともはや何が正しいか、わからなくなる」

「早速難しいが、確かに自分自身すら否定したらどうにもならないしな」

「その通り。ただ、この世界に、同時にあなたと同じ事象に巻き込まれているウマ娘がいるかどうかはまだわからない。世界に同時に存在しうるか、それとも、あなたのような事象が起きるウマ娘が、各世界で一人となるよう、世界が分岐している可能性もある」

「そうか。理解するには時間がかかる感じだな。詳細はゆっくり考える必要がある」

ネオユニヴァースは一息つき、再び口を開いた。

「世界のすべてを明らかにする一段階として、まずはあなたの事象に的を絞りたい。あなたはすでに体感で百四十三回目の繰り返しとなっている。Right?」

「その通り。体感時間ではすでに百二十年くらい経っている」

「アイ・シー。その際の繰り返し一回あたりの経過時間はまちまちだった。これは正しい?」

「そうだ。短い時にはループ起点からメイクデビュー直後までの半年、長い時でもシニア級二年目の終わりまででの四年間でループが打ち切られた」

「その際に共通する条件は?」

「確実な条件はアタシが大敗たひはいした時。特にメイクデビュー戦とG Iレースの時はほぼ確定だった」

「繰り返しなが長く続いた時は?」

「アタシ自身が勝ち続けた時は長かった。あとは、他の誰かを仲間にして一緒にいた時。たとえばマックイーンとか」

「なるほど。その一緒にいた仲間の戦績せんせきとの関係は?」

「そうだな、たとえばマックイーンと一緒にいた時は、マックイーンが初っ端のホープフルステークスで負けるとほぼ確定でループが打ち切られたな。それ以外は、やっぱりG Iで負けるとダメだったな」

「ふむ。……ちなみに、今回みたいにあなたが一切走らなかったことは？」

「今回が初めてだ」

「……わかった。少し待って」

ネオユニヴァースは目を閉じ、耳を澄すませるような仕草しぐさを見せ、しばらく動かなくなつた。そして目をゆっくりと開くと、アタシを見据えた。

「仮説が固まつた」

「あなたがループを脱出できる条件、それはあなたと密接に関わる人すべて、あなた自身を含む人を、トゥインクル・シリーズで勝たせ、そして何らかのレースで最終勝利を得ること」

「……それは、達成可能なのか？」

「この仮説には条件が曖昧な部分が多い。まず、あなたと密接に関わる人の範囲を定義できていない。過去のループで常に交友関係がある人でよいのか、それ以外の人を探しに行かなければいけないのか。また、ループ脱出の要件となる最終勝利レースが何か不明。特定のG I レースなのか、それともUR Aの通常開催レースではない何か別のレースなのか、特定できていない」

「まだ分からないが、少なくともこのループではもう達成できないな……」

「正しい。黄金ゴールドシップの船ゴは、このループでは自身の勝利ではなく、愛する伴侶はたりよの勝利のためにその航海の全てを捧げた。ゆえに、この仮説が正しいならば、このループは確定的に次に移行する」

「なんかしれつととんでもない表現がされたが、……まあ間違つてはいないからいいか」

「そして、もうひとつの仮説。実はこちらが一番難解で、達成条件も不明」

「なんだ？」

「もうひとつの条件、それは、黄金の船ゴ自身がこの世界の『マスター』であること」

「マスター……？」

よく分かるようで分らない単語が唐突に出現し、アタシの頭は固まった。

「できる限り理解しやすいよう、核心以外についてあえて正確さを下げて説明するならば――」

この世界において、アタシ自身が「上位存在」から干渉・操作される対象であるべきこと。ゲーム的に喩^{たと}えるならば、「アタシ自身が『ゲーム』における主人公として、『プレイヤー』からの操作を受けている状態であること」。

「それを、アタシが知る方法は？」

「まだ見つかっていない……ごめんなさい」

「ネオユニヴァースが謝ることじゃない。むしろ感謝している。このクソツタレな世界に説明がつけられて」

「そう、だね」

「だとすると、この世界はひよつとして、ベルちゃんが『主人公』の世界なのか？」

「その可能性が高い。この世界はメジロドーベルの栄光への物語。黄金の船はその要

素。メジロドーベルをこの世界の女王とするならば、さしずめあなたは騎士」

「そうか……」

女王・メジロドーベルに仕^{つか}える騎士、か。だいぶ前にその喩えでベルちゃんと話したことがあつたな。確かにそうかもしれない。仮説に基づくならば、もしアタシがこの世界の主人公としたら、レースを放棄した時点で強制終了となっていたに違いない。でも、ベルちゃんが主人公の世界ならば、ぶっちゃけて言えばアタシの存在は究極的にはベルちゃんには関係なく、上位存在がベルちゃんの戦績に満足するかどうかにかかっている。

「今回については、上位存在がベルちゃんが主人公のこの世界に満足するか、しないかに関係なく、アタシは飛ばされるわけだが、そのタイミングは見当がつくか？」

「ネオユニヴァースが認知する『未来』では、メジロドーベルが最後に走るのは、本人にとって二回目のエリザベス女王杯。今年のレーススケジュールはすでに発表されている。すなわち、十一月十四日。この日のレース終了後から、即時かもしれないし、何らかの理由で後にずれるかもしれない。ただ、あまり長くはないと思う」

「……もし、ベルちゃんがそこまで引退せざるを得なくなつたら？」

「……おそらくは、引退決定後間もない時期に『終焉』^{エンド}が訪れる」

ふと、ネオユニヴァースが沈黙し、あたりに意識を向けた感じがした。

「まあ、いずれにせよ、ベルちゃんと一緒にいられる時ギリギリまで頑張るよ。上位存在にばかり気を取られるのも癪だ」

「アフアーマティブ。わたしたちは、この世界を全うすることが望ましい。もしかしたらそれが、次の世界で、黄金の船が繰り返しの外へと旅立つきつかけのひとつになるかもしれない……さて、『わたし』もそろそろ帰るね」

そう言うと、ネオユニヴァースがスマートフォンを取り出して何事かを打ち込むそぶりを見せた後、アタシの方に画面を見せてきた。

『メジロドーベルが外にいる。おそらく途中から話を聞いている。彼女はこの場を離れようとするが失敗するだろう。彼女を保護してやってほしい』

アタシはそのメッセージに頷いた。

「それじゃ、またね」

ネオユニヴァースは玄関の方へ向かい、しかし玄関の扉を開けることなく去った。さて、未来の女王様となるべきこの世界の主人公、今はか弱いお姫様を拾いに行きますか。

玄関を出たところには、さすがに姿はなかった。となると裏手か。

歩いていくと車の陰に女の子の姿が見えた。地面にべたんと座り込んでしまっていて、少し見える尻尾は微動だにしなかった。回り込む。彼女は項垂れ、髪に隠れて表情は見えない。耳は完全に寝てしまっていた。肩を優しく叩き、促した。

「とりあえず、中に入れよ。な？」

彼女は返事こそしなかったが、ひとまず立ち上がってくれた。身体を支えつつ家に誘導した。

家に入れ、部屋に案内して振り向こうとした時、不意にベルちゃんがアタシの身体を押した。バランスを崩して尻もちをついたところ、身体の上にもたがるように乗ってきて、アタシの肩を床に押しつけた。髪の毛の向こうにあったベルちゃんの顔がようやく見えた。その表情は、おそらく絶望だった。温かい水滴がアタシの頬に落ちた。

「……………いて……………あたしを……………」

か細い声で囁かれた言葉。絶望の果ての崖つぶち、最後にどうしても何かに縋り、アタシと一線を超え、溺れたいというその言葉。アタシの心が突き動かされようとしている。その言葉を叶えるという言い訳をしながら、欲望のままに、彼女にアタシがこの世界にい

た証^{あかし}を刻^{きざ}みつけたかった。でもそれは、決してしてはいけなかった。

「それは……できない」

「どうして……どうして……っ！ ねえっ！ ねえっ!？」

ベルちゃんが力なく叫び、アタシの胸に倒れ込むように覆^{おお}いかぶさった。とめどなく流れる彼女の涙が服に染み込んだ。

「お願い、行かないで……あたし、がんばるから、G Iで、勝つから……っ！ だからっ、お願い神様、連れてかないでよ……」

その叫びは、この世界を支配する上位存在^{じゆうゐん}に向けてのものだったか。

しばらくアタシに顔を埋^{うず}めて泣いていたベルちゃんが、不意に身体をずらし、アタシの首筋に歯を立てた。それは無意識なのか、とっさの行動だったのかは分からない。その力はあまり強くはなかった。そして顔を上げ、アタシと目が合った。直後、彼女の唇^{くちびる}がアタシの唇に押しつけられた。おそらく口を開くと舌を差し入れられて蹂躪^{じゆうりん}されるだろう。この人生でこんな局面に至ったのは初めてだったが、フィクションでの多少の学びと百二十年の人生経験による直感が告げていた。ここでベルちゃんの衝動をそのまま許し、受け入れてしまったら、おそらくベルちゃんの方が傷つく。なんとしても阻止しなければなら

ない。

彼女との声なき攻防こうぼうの果て、顔を上げた彼女の目は虚ろうつろだった。

「ごめ……なさ……」

アタシの身体からずり落ちるようにどき、後ずさるようにして逃げかけた彼女をつかまえ、抱き締めた。今のアタシの気持ちをとんとかして伝えるべく、心から少しずつ現れる言葉を、そのまま声に出した。

「アタシはさ、ベルちゃんに救ってもらったんだ。……長い繰り返してもう擦り切れて、すべてをめちゃくちゃにして、そして抜け殻みたいに過ごす日々をやつて来てくれた、一筋の光だった」

ベルちゃんの震えが少しだけ止まった。

「闇に墮おちたクソツタレを引き揚げてくれて、まともな世界に戻してくれた大恩人だよ。この四年間、とても楽しかった。できればずっとここにいたかったけど、どうやら無理みたいだ。長ければあと半年ちよつとか」

一息入れて、さらに続けた。

「このままベルちゃんが落ちぶれて、部屋の片隅でうずくまって過はごす廃人はいじんみたいには

なつてほしくない。永遠に別れるなら、その時はベルちゃんが女王になつていてほしい、そしてアタシはその栄光のもとに在る騎士を全うしたい」

彼女に、なおも語りかけた。それはアタシの思ひの丈をぶちまけるもので、あるいはアタシ自身に対する決意表明だった。

「勝手なこと言つてごめん。本当は駆け落ちみたいにこのまま連れ去りたいんだが、たぶんそれをやると別れが早まっちゃう。できるだけ長くこの世界にいたい。だから、あと七か月、最後まで走り抜いてほしい。……いや、ベルちゃん自身はそれからまだ走るから、アタシにとつての最後、だな」

「……最後だなんて、言わないで……」

「そうだな……最後だつて決まつたわけじゃないもんな」

「……………あたし、絶対勝つから。あなたが、少しでも長くいられるように」

「それでこそベルちゃんだ。……ちよつといいか」

「なに…………？」

まだ涙の跡が残るベルちゃんの頬に、軽くキスをした。

「ベルちゃんにその旅路の果てまで三女神の加護のあらんことを。そして横にアタシが仕

えることの決意を。……へへっ、アタシらしくないことを一杯しちまった」

「……ありがとう」

「今から体調を整えて、万全の状態で走れるようにしような」

泊まつていくか？ とのアタシの誘いに、ベルちゃんは軽く首を振った。

「ちよつと、心の整理をしたいの。……こんなことをあたしから言うのもおかしいけど、さつき、抵抗してくれて、ありがとう。もしあなたが全部を受け入れてくれてたら、あたしはもうダメになってたと思う」

「そっか。アタシも必死だったしな。このままだと全部めちゃくちゃになって、すぐに別れが来てしまうって思ったから、何としても一緒にいられる時間を引き伸ばそうとしてた」

「……ありがとう」

「さ、明日もアタシは仕事、ベルちゃんは授業。改めて頑張っていこうな。トレーナー室に顔を出すよ」

「うん」

憑き物が落ちたように元気を少し取り戻したベルちゃんを送り出し、寝ることにした。さすがに少々疲れたしな。

翌日、ベルちゃんのトレーナー室でゴロゴロしていた時にベルちゃんが来て、脚が良くなっていたら秋のG Iで勝つと決意表明した。トレーナーが提示したエリザベス女王杯連覇のプランに乗ると決め、その前哨戦ぜんしゅうせんとして十月のG II・毎日王冠まいにちおうかんを目指すことになった。

時は流れ、ゴールデンウィークになった。もちろんレースに出るウマ娘達には休みは無いが、アタシ達とトレーナーは思い切り休み、ちょうど休んでいたライスシャワーやハルウララも一緒になってピクニックに出かけた。トレーナーは仕事をしたそうだったが、無理やり机から引きはがして連行した。和氣藹々わきあいあいとした感じで、特にムードメーカーのハルウララのおかげでみんな明るくなった。

連休明けの診断で、ベルちゃんの脚に危険な兆候ちやうこうは無いとのこと、まずは体力の再確認も兼ねた基礎トレーニングから再開することになった。まずはジョギング程度でコー

ス一周。

「どうですか？ 痛みや違和感いわかんなどはありませんか？」

「ありません。大丈夫です」

「よし。今日はあと一周したら引き上げます。次はトレーニング室で少しずつ負荷ふかを掛けていった状態での脚の筋肉の状況を見ます」

「はい」

「ゴールドシップさん。ドーベルさんの走りを見ていて違和感はありませんでしたか？」

「問題はなさそうだ」

「ありがとうございます。少しずつ前進ですね」

トレーニング室でのモニタリング結果も問題なく、トレーニングを計画通り進めていけそうだという見通しが生まれた。

六月に入ってからレースを見据みすえた強度でのトレーニングを再開した。梅雨つゆ時じを活用した悪いバ場状態での調査を集中的にできる。ただ、こちらの方はまだ上々じょうじょうとは言えなかった。

「どうだ？」

「少しですが、左脚の側の踏み込みが浅いようです。上着に取り付けたセンサーでリアルタイムモニタリングをしていますが、少し走る姿勢のバランスが取れていないことを示唆するデータが得られています」

「無意識に力をセーブしていいような感じか」

「その可能性は高いですね。可能であれば雨が続くうちに調整したいところです」

「……ハアツ、ハアツ……どうですか？」

「左脚の踏み込みにまだ課題がありそうです。ただ、経過は順調なので、フォームを見直しつつ、月末までにはそれが定着できるのではと見ています。ドーベルさんなら十分間に合わせられます」

「はいっ！」

七月頭、トレーナーの力とベルちゃんの努力により、フォームが整った。ここから次の段階、アタシや他のウマ娘との併走トレーニングに移る。今回はアタシはモニタリングに回り、併走相手には特別ゲストを呼んでいるとのことだったが……。

「久しいな。ドーベル」

「エアグルーヴ先輩!？」

「げっ!」

「げっ、とは何だゴールドシップ。別に今さら説教したりはしない。……いい顔になった」

「……あざす」

エアグルーヴはこの春からURAで選手育成を担うことになり、学園にも週一〜二回のペースで顔を出している。トレーナーがダメ元で打診したところ、逆に併走トレーニングに参加したいと言ってくれたらしい。

「怪我の一報を受けた時は肝を冷やしたが、大事に至らなくて良かった。そして、ずいぶん成長したようだ。私も全身全霊を懸けて挑もう」

「よろしく願います!」

「では本日は、このメニュー表における強度レベル一を目標に行きます。ドーベルさんもエアグルーヴさんも力を細かく制御してもらおう感じになります。よろしいですか?」

「承知した」

「はい！」

アタシの合図で二人がスタート。芝2000m・右回りのコースに沿って二人が遠ざかる。トレーナーが状況を直接目で追う中、アタシは半分姿を見つつ、ベルちゃんのバイタルモニタリング、コースパトリールカメラのチェックを並行して進めた。……途中問題無し。

二人が戻ってきた。さすが、エアグルーヴは体力もレースのセンスも超一流、息を乱すことなく、強度レベル一の範囲を厳密に守って併走してくれた。一方、ベルちゃんはかなり呼吸に乱れがある。少しつくとそのまま倒れてしまいそうだった。

「ドーベル、大丈夫か？」

「……だい、じょ……」

「——うぶじゃないですね。ゴールドシップさん、スポーツドリンクを」

「あいよー」

クーラーボックスからスポーツドリンクを取り出し、ベルちゃんの元を持って行く。エアグルーヴにベルちゃんを支えてもらい、アタシが少しずつ飲ませた。

「どうだ、トレーナー」

「そうですね……六月にバ場状態重く不良のコースで集中的に調整しましたが、実戦に対応するスタミナはまだ取り戻せていないようです」

「スタミナトレーニングを中心に組むか」

「……すみ、ません……」

「謝ることはない、ドーベル。これは課題洗い出しの第一歩だ。これで次のステップが見えた。力を取り戻し、高みへと登るといい」

「ありがとうございます……」

全員でトレーナー室に引き上げ、スケジュールを新たに組み、次のエアグルーヴとの併走トレーニングを半月後に設定して解散した。

帰り道、ベルちゃんは見えてしよげていた。確かに、体力や併走トレーニングの結果は、前回のレースの時と比べたら全く及ばない。四か月以上ものブランクはやはり大きかった。

「ま、これからスタミナつけ直そうぜ。ブランクがあるとやつぱり結構落ちるっていろんな奴が言ってるしな」

「でも、あなたは冬場、五年近く何もしてないのにすぐに走って、あたしを軽々と抜いちやっただじゃない……」

「アタシはスタミナお化けだし、何より天才だからな」

「……むー……」

「あれだよ、アタシは百二十年生きてんだ。今回みたいに五年も何も走ってないのは今回が初めてで、それまではよく走ってるから、頭の方が走り方を覚えてる。確かに身体は全く鍛えてはいないんだが、毎日夜に十キロジョギングしていたのが良かったか」

「それ、普通は鍛えてるうちに入るから。……努力する天才相手に『何もしてない』なんて思い込んで、恥ずかしい……そっか、気づくべきだったよね……前のエリザベス女王杯の前夜に、あなた普通に二十キロ走って逃げようとしてたね……」

「ああアレは逃げじゃないぞ、結局逃げずにお互い自爆しちまったから逃げじゃない、ないぞ……たぶん……」

「……ごめん……時間差で思い出してとても恥ずかしい……」

お互いに恥ずかしい場面を思い出してしまい、しばらく何も喋れなかった。その沈黙を破ったのはベルちゃんだった。

「……あの頃は襲うの襲わないの、事あるごとに言ってた気がするけど、結局あたしの方から襲っちゃったし……」

「マックちゃんとベルちゃんの両方に襲われたから、やつぱアタシはメジロの恋心を狂わせる魔性の女、つてな」

謎の空気を打破すべく全力で茶化しに行ったが、ベルちゃんの反応は予想に反して重かった。

「……そうかも。あたしとマックイーンはあなたに強く惹かれて、その強さであたし達は狂った。狂ったのはあたし達の責任。……昔のあなたは学園の多くのウマ娘を狂わせた。でもこれはそうじゃない。むしろあなたはあたし達にきちんと向き合い、責任を現在進行形で取ってくれている。そんなあなたをあたし達は傷つけた。……許されることではないし、償えることでもない。せめて、あなたと少しでも長く一緒にいられるように、そして、あなたが安心して、次の世界へ旅立てるように。それだけは、きちんとしたい」

「ベルちゃん……」

「だから、まだまだいっぱい頼って、甘えて、傷つけて、ひどいことをいっぱいすると思う。ごめんなさい。でも、……あなたに、あたしが勝った姿を見てもらいたい。あなたが

仕えるに足る女王だったって思ってもらいたい。だから……だから……ら……」

肩を震わせたベルちゃんがしゃくりあげ始めたので、そつと包み込むように抱き締めた。これまで幾度となく泣いたベルちゃんを慰めてきたけど、これもあと何回できるだろうか。

今日の彼女は、いつもより長く泣いていた気がした。

七月後半からは、ベルちゃんは本格的な復帰トレーニングのため函館に長期遠征に出た。例によってアタシも完全同行した。食堂で働こうにも最強のおば様にまた追放されるのは確定だったし、何よりベルちゃんと一緒にいたかった。マックイーンも北海道での静養という名目で来ていた。マックイーンはだいぶ健康体に戻りつつあり、ほっぺももちもちだった。

函館レース場の宿泊研修所に三人＋トレーナーの分の部屋を取り、日々ベルちゃんの練習に付き合った。マックイーンはもう走れないものの、後方支援では八面六臂の大活躍をした。ベルちゃんの食事管理、水分補給、トレーニング計画などをしてくれて、もしマックイーンがトゥインクル・シリーズに出ていたらきっちり自己管理していたんだろうなと

思わせる徹底ぶりだった。……だが陰に隠れて頭への糖分補給と称して饅頭まんじゅうをパクパクしている姿をアタシは見たぞ。でも嬉しかった。過去の世界で見たマックイーンが戻ってきたかのようにだったから。

練習の合間にはメジロの本邸に挨拶に行ったり、その帰りがブライトと一緒に戻り、ちよつと札幌で遊んだりした。ある種の思い出作りのようなものだった。

二か月を経て、かなり力を取り戻したベルちゃんは、いよいよ復帰緒戦しよせん・毎日王冠へ向けての最終調整に入った。フィジカルは可能な限り高めたので、あとはメンタル面だった。一昨年・昨年のアタシとトレーナーは、ベルちゃんに念を送り過ぎて勝たせられなかったことから、念を送るのではなくあらかじめ念を込めることにした。

十月十日、東京レース場。気持ちのいい秋晴あきばれで、もちろんバ場状態は良となっていた。毎日王冠に出走するのは十人、その中には昨年の馬記念で戦ったグラスワンダーやキングヘイローもいる。ベルちゃんはその時に両者の後塵こうじんを拝したこと、また、長期離脱が不安視されたこともあり、七番人気の支持にとどまっていた。今日は一枠一番、最も内からのスタートだった。

ゲートが開き、選手が一斉に飛び出した。マイル戦ゆえ展開は比較的速い。ベルちゃんは中団につけていた。近くにはグラスワンダー、やや後方にキングヘイローが陣取る。すぐに勝負所にかかるも、同時にスパートしたグラスワンダーに少し離され、一旦追いつくもさらに引き離されてしまい、後のキングヘイローにも差されて六着に終わった。

果たしてこれで来月のエリザベス女王杯に行けるのか、その不安を隣で一緒に見守っていたベルちゃんのトレーナーにもらすと、トレーナーは自信を持って「大丈夫だ」と言った。トレーナーが言うなら、おそらく大丈夫だろう。その日の夜はマックイーン共々、思いきり沈んだベルちゃんを慰めるのに費やされた。

大一番まであと一か月ほどとなり、ベルちゃんの走り一本一本で徹底したデータを取りつつ調整に取り組んだ。積極的に併走をし、ベルちゃんが急速に力を取り戻しつつあるのを感じた。十月三十一日、京都へ向けて出発する前日、ブライトが出る天皇賞(秋)の応援のために東京レース場に出向いた。必死の応援むなしく、ブライトは十一着に終わった。

十一月の京都は朝晩に冷え込み、昼間も少し涼しくなってくる。怪我をしないためには入念にゆうねんなストレッチとウォームアップが欠かせない。トレーニングの終わりにはクールダウン、そして温泉、おいしいごはん、暖かい布団。それで、

「なんでベルちゃんは布団の中でアタシにくっついてるんでしょうか？」

「ん。充電じゆうでん」

本当にぴったりくっついてる。なんかいろいろと柔らかい。お風呂上がりのいい匂いがする。鼻血が出るかもしれない。

「あー……ベルちゃん、アタシの死因が『脳のオーバーヒートおよび大量の鼻血による昇天』になりそうなんだが」

「大丈夫。生き返らせるから。あたしがキスをしたら生き返ってくれと信じてる」

「生き返った勢いでまたあの世に飛んで行きそうだな」

「それは困る」

ベルちゃんが少し離れた。アタシも一旦起き上がってコップに水を汲み、広縁ひろえんの椅子に座った。ちょうど一年前、この旅館でアタシとベルちゃんはなし崩しの恋仲こいなかになった。

この一年間、そしてその前、ベルちゃんと出会ってからの四年間はとても楽しかった。

ネオユニヴァースの見立てだと、最も短い場合は、もう二十四時間後にはアタシはこの世界からいなくなる。もし明日でないにしても、おそらく年末は迎えられない。これが最後に違いなかった。すべてをやり抜いた。あとはこの世界の「上位存在」が何をするか、こちらからは介入ができない。できることは、最後の一瞬までベルちゃんとともにあることだけだった。

いよいよ最大の決戦。

アタシ達にとっての二回目のエリザベス女王杯が始まる。

第二二章 騎士離任

十一月十四日、朝。

「忘れ物はありませんか？」

「大丈夫だ」

「大丈夫」

旅館を出て三人でタクシーに乗り、京都レース場へ向かう。車内は静かで、それぞれが未来に向けて精神統一せいしんとういつしていた。今日はベルちゃんのおおいちばん大一番、そしてアタシがこの世界にいられる最後の日かもしれない。なかつた。

「頑張ってください」

「ありがとうございます」

初老の寡黙な運転士さんから声援を受け、タクシーを降りた。まだ朝早いレース場は静かながら、入場ゲートにはすでに人が三々五々集まりつつあった。ベルちゃんを集合点呼に送り出し、アタシ達はトレーナー控室に入った。

「いよいよ……ですね」

「そうだな」

「ドーベルさんは、勝ちます」

「もちろん」

「私としては、今日の勝利後も、引き続きゴールドシップさんがドーベルさんとともに歩み、また、可能であれば私とともに未来のトウインクル・シリーズを、さらにはウマ娘たちを率いる役目を担ってほしいと思っています」

「残念だが、それはできない」

「やはり、翻意はしてくださらないのですね」

「……本当はずつといたかつたんだが、どうにもならない事情は動かなかつた。早ければ今夜には発つ」

「そうですか。慰勞会いろうかいも兼ねてあなたと飲もうと思つていたのですが。お酒が飲める年齢になつたそうですし」

「悪いな」

「……これが最後かもしれませぬし、少々の知的好奇心からお尋ねたずします。ドーベルさんとはどこまで？」

「聞かれると思つたよ。大師匠に続いてこれで二人目だ」

「そこは思いきり顔を真つ赤にしてせき込むのがお約束だと思つたのですが、余裕の表情を見せるところまで進んだとみなしてよいのでしょうか」

「厳密には違ふんだが……ぶつちやけて言うのと、半年くらい前にいろいろあつて……まあ、襲われた」

「ほう……だとすると、ゴールドシップさんはその日、ドーベルさんの荒れ狂う感情をうまく収め、関係の破綻はたんを防ぎ、むしろドーベルさんの心身を改善したことになります。私の好奇心はまだまだ聞きたいと訴えています、これ以上聞くと命が消えそうな気がしますね」

「自分が担当している子が人を押し倒したと聞いて『ほう』の一言で収めたお前が何を怯おび

えたふりをしてる？ そうだな……まあ、組み敷かれてキスはされたんだが、それ以上は
されないように防衛ぼうゑいしたところだ」

「ありがとうございます。もしそれをしてくださらなかつたら、きつとドーベルさんは致
命的に壊れてしまっていたと思います。彼女が今日、こうして走れるのもあなたのお陰
です」

「そうだな。アタシもこのレースにきちんとして立ち会えて良かったよ……そろそろ一旦ベル
ちゃんの控室に行くか。もう点呼は終わつてる頃だ」

「そうですね」

ベルちゃんと選手控室で再合流して、スケジュールを再確認した。レース前の再集合時
刻に遅れると下手したら一発アウト。気を抜かずに行きたい。

「まだ第一レースも始まってないし、再集合時刻までも五時間はある。まあ、昼までは
自由にしても問題ないな。どうする？」

「せっかくだし、ちよつとレースを観てみたい」

「よしトレーナー、席確保よろしく」

「手配しています。ではあちらから」

トレーナーに連れられて、関係者向けの席へ移動した。間もなく今日のトウインクル・シリーズのレースが始まる。先週・今週・来週の三週開催の回のレース場は東京・京都・福島の三場、まず九時五十分の福島第一レース・未勝利戦から始まる。次いで九時五十分、次に東京レース場、最後に十時五分から京都レース場で第一レースが始まる。

「ドーベルさんは第一レースから観るのは初めてですか？」

「うん。だいたい観に行くのがメインレース前後だったし、自分が走る日のこの時間帯はウォーミングアップに費やしてたから」

「アタシは結構観てたな。なにせ学園に居場所がなかった。ベルちゃんに会ってしばらく経つまで、本当はアタシの人身保護の名目でレース場は当分出禁になってたんだが、家に引きこもってても仕方がなかったから、こっそり行つた。入場ゲートのおっちゃんはいつても何も言わずに通してくれた。なかなか勝てないけど、それでも人生を懸けて、栄光を目指して必死に走り続ける同年代のウマ娘達の姿を見て、アタシは一体何やってんだろ、って思ったことも多かつた」

学園を「崩壊」させたその年の秋を思い返した。部屋を一步外に出れば籠絡ろうらくしたウマ娘に迫られ、その元恋人のウマ娘からは責められ、時には襲撃され、レース場でも隅っこで背中を壁に押しつけて、背後を守らないと命を狩られるおそれが高かった。いつそそのまま襲われて命が果てれば良かったかもしれないが、学園やURAが徹底的に事件を処理・隠蔽いんぺいして回ったため、その機会が訪れることはなかった。

「そんなある日、スケッチブックを拾った。それを取りに来た子は『ベル』と名乗った。実はあの時すでに『メジロドーベル』だつて気づいてたんだが、名乗りたくないのには理由があるんだろうと思つてずっと聞かずにいた」

「あの時、もう気づいてたんだ……」

「すまんな。結構早い段階でライアンとも話をしたことがあつてな、ベルちゃんのことをよろしく頼まれた記憶がある」

「ふふつ、ドーベルさんは愛されてますね」

「トレーナーが他人事ひとことみたいに言うなよ。前言つてたじゃねえか、ベルちゃんがアタシのことを探してキョロキョロしてるから、さりげなくアタシが隠れていた菜園の片隅に誘導

してたって」

「え、トレーナー……知ってたの……?」

「ええ。私はドーベルさんが安心してのびのびと活動できることが一番大事だと考えています。そのため、ゴールドシップさんには大変ご協力いただきました」

「最初のうちは勝手に協力させられたがな。いくら巧妙こうみょうに隠れてもベルちゃんにあつという間に見つかるから何だと思つたら、トレーナーが誘導してやがったつてオチだ。……途中からは自発的に協力したが」

「そう……」

ベルちゃんが顔を真っ赤にして俯うつむいてしまった。レース前まえにあまり動揺うごゆさせたらまずかったかもしれんが、もうこれが最後だと思つたと、つい饒舌じょうぜつになつてしまった。

十時五分、本日最初のファンファーレが鳴り、第一レースの選手たち十二人がゲートに入っていく。まだ二回目のレースの子、すでに何回も走り続けている子、さまざまいるけれど、この中で勝利できるのはたった一人。残る十一人は次の未勝利戦を戦うか、あるいは地方トレセンに移籍いしきよして武者修行むしやしゆぎょうをするか、潔いさぎよく引退して別の道を進むか、いずれにせ

よ選択を迫られる。

メイクデビューを勝ち上がり、数々のGIで勝ってきたベルちゃん、あるいは過去の世界でのアタシは、トウインクル・シリーズの選手全体で言えば間違いなく上位一握りの強さだった。そんな恵まれたウマ娘だつて、ちよつとしたきっかけで修羅の道に墮ちたり、あるいは怪我で季節丸ごと休まざるを得なくなつたりする。選手人生はままならない。

今まさに選手達がゴールを駆け抜けた。マイル戦は二分かからずに結果が出る。一着の子は歡喜の涙を流し、わずか半バ身差で勝利を逃した二着の子は悔し涙をにじませる。後の方の子達はもう走り切るのがやつとだつたり、もはや泣く余裕もなく呆然としていたりも多い。非情な勝負の世界がここにある。

「すごい……気迫があつて……自分がレースに出る時と変わらない『怖さ』を感じた」

「そうだな。トウインクル・シリーズのレースは昨日今日で七十二レース、およそ二〇〇人の選手が走る。ベルちゃんもその一人だ。先週も七十二レース、来週も七十二レース。多くの選手が走り、ほんの一握りだけが勝ち、あとは負ける。多くの涙の果てに、GIの勝利がある。今日、ベルちゃんはそこに立つ。……応援してるぞ」

「うん……」

レースは三十分ごとに招集しょうしゅう、パドックでの選手紹介、入場、ゲート入り、スタート、レース、そしてゴールが繰り返される。芝コースのレース、ダートコースのレース、応援、喜び、悲しみが入り交じる。第四レースまで開かれると、五十分ほどの昼休みを挟んでメイクデビュー戦がある。

メイクデビュー戦の選手紹介の時間。はじめてトウインクル・シリーズの舞台に立つウマ娘達がおっかなびつくりパドックに現れて挨拶をし、フィールドへ入場していく。四年前、ベルちゃんは新潟にいがたの地でメイクデビュー戦に挑み、見事初勝利を飾った。今回走る子達の中から勝てるのはただ一人のみ。レースが始まり、そして二分ほどで初勝利か、初にゆうちやく入着か、初敗北かが否応いやおうなく決まる。

アタシも過去のループで何回かはメイクデビュー戦で二ケタ着順の大敗きつを喫きいたことがある。気落ちする暇もなく翌日はもう新たなループに飛ばされていた。勝ちも負けも知っているし、大泣きに泣いたことも数知れず。

そうこうしているうちに、目の前でメイクデビュー戦の勝負がついた。ベルちゃんはその様相ようそうを静かに見守っていた。

メイクデビュー戦が終わったところで三人揃って控室に戻り、上等な弁当を食べた。このくらいの時間なら、ちょうどお腹が落ち着いたあたりで第十一レース・エリザベス女王杯の招集がかかる頃合いだった。

「いよいよだな、ベルちゃん」

「うん」

「ここまで見届けられて良かった。残念ながらその先は無理だったが……」

「これが最後なんだね」

「本当に残念です。せっかくゴールドシップさんをこき使……コホン、精力的に活動して頂いて、ドーベルさんを、学園を、URAを、そしてウマ娘が関わる世界すべてを底上げして豊かにしたいと思っていましたが、これでは私一人が働くしかなくなってしまう」

「しれつときき使うって言いかけたな？ 年俸五百億円寄越しな」

「ウイニング・ライブ関係の年間収益を全部ガメる気ですか」

「代わりにアタシ一人でライブでも何でもやってやるよ」

「ゴールドシップワンマン劇場ですか。確かに稼げそうですが、たまに盛大にスベってチ

ケット代返還要求騒動が起きそうですね。百二十億円くらい」

「ケッ、なんだその具体的な数値は」

「なんとなくです」

「……二人つて、結構仲良かったんだ」

「おう、世界一の盟友だ。ほんと今日限りで今生の別れになるのが惜しいぜ」

「まったくです」

「……なんかあたしより仲がいい……うわきもの……」

「ベルちゃん頼むここで嫉妬して精神を乱さないでくれ何でもするから」

「……ふふつ、冗談。後で何でもしてくれるなら許しちゃう」

ベルちゃんの凍てつく視線もこれが最後だったかもな、と思ったりしつつ談笑していたら、あつという間に招集時刻になった。ベルちゃんを集合場所に送り出し、アタシとトレーナーは地下バ道に移動した。

「——お待たせ」

「いいねその気迫。必ず勝つぞ」

「必ず勝ちます」

「もちろん」

京都レース場、第十一レース。芝2200m・右回り・外、エリザベス女王杯が間もなく始まる。

今日の淀は文句なしの快晴で、バ場状態はもちろん良の判定。選手十八人の気迫は十分だった。ベルちゃんは先週、先々週のトレーニングのタイムが好感されたことと、連覇に期待するファンの後押しとで二番人気を得た。最後は一番人気を獲りたかったがまあいい。いつでも変わらず全力を発揮するだけだ。

『六番、メジロドーベル、二番人気です』

『最高の仕上がりですね。連覇がかかっていることもあり、かなりの支持を集めています』

『好走が期待できます』

発走委員が台上がり、旗を掲げて振って、ファンファーレの演奏が始まった。演奏に

観客の手拍子てびょうしが合わさり、熱気が一気に高まる。演奏終了とともに、あたりに歓声たんせいが轟とどろいた。

選手が順にゲートに入り、時を待つ。

——スタート。全員揃ってゲートを飛び出した。ついにエリザベス女王杯が始まった。ベルちゃんは中団ちゆうだんにつけてコースを進んでいく。集団ひとかたまりになって大混戦となり、ベルちゃんはその内うちよりいにいた。この先うまく抜け出せるか。向正面むこうしょうめんを双眼鏡で見ると、ベルちゃんに若干焦りあせが見られたので念を送る。まだだ、まだ焦る時間じゃない。これから勝負だ。第三コーナーまで順位の変動はほぼなし、まだベルちゃんのまわりは空かない。最終直線、よしそこだ行け！

「がんばれーっドーベルー！」

「ドーベルちゃん頑張つてー！」

「行けー！ ツツツツツツ！」

全員が最後の力を振り絞ってゴールに向けて全力疾走する。ベルちゃんの前が空き、どんどん進出、どうだ、行けるか、行ける……行つた、よしそのまま走れ！ 走れ！

そして——

『メジロドーベル！ メジロドーベル！ メジロドーベル快勝だ！』

勝った、勝った……

「いよつしやあああああああああ！！！！！！」

隣にいたトレーナーを力一杯抱き締めた。ちよつと後になってトレーナーの骨をバキバキに砕いてしまったのではないかと慌あわてて放したが、咳せき込むだけで済んでいた。結構骨が頑丈だったらしい。

ゴールしたらほどなくして優勝者インタビューがある。ウイナーズサークルヘトレーナーが移動するのにしれつとくつついていったけどそのまま通行を許された。

「なんかアタシも入れちゃったんだけど」

「ドーベルさんに仕える騎士として有名にしましたからね」
「有名に『した』？ 『なった』じゃなく？ オメーの差さし金かねかコラ」

「今後の布石ふせきというやつでしたが、それを活かせたのがこの一回きりになりそうで残念です」

「ケツ……まあ、そのおかげでここにいられるから感謝しねえとな」

「どういたしまして」

ベルちゃんに抱きつこうとしたら、汗びつしよりになつてからと抵抗されたけどお構いなしにぎゅつといつた。その瞬間を大量に写真に撮られた。というか撮らせた。もしこの数多くの写真がアタシが消えた後も残ってくれたら、ベルちゃんがアタシを^{しの}偲ぶ材料になりそうだと思うた。

控室に戻り、ベルちゃんは勝負服から今日のウイニングライブ用特別衣装に着替えた。

もちろんトレーナーは外に出されたが、アタシは珍しく部屋に引き留められた。着替えの場面を見ていると、

「全身を舐めまわすように見ているヘンタイさん？」

「すまん」

「まあ、別に見ても減るもんじゃないし、見ててもいいよ」

「そうか」

どうせならと汗を拭き取る手伝いをした。こうして背中を見るのは、だいぶ前に大師匠

の家で二人まとめて風呂に蹴り入れられて背中を流し合った時以來か。

「ベルちゃん、お疲れさん」

「ありがとう。この後のウイニングライブを頑張ったら今日の活動は完了ね」

『『Special Record!』でセンターを務めるのも一年ぶり、ちょうど昨年のエリザベス女王杯の時だったか』

「うん」

「何回も練習して、本番のステージにも立って、もう身体が覚えてしまってるだろ」

「うーん、どうだろ。あなたみたいに一番から四番のどこでもソラで歌って踊れるところまでで行ってないけど」

「一着を続けるとセンターだけ覚えればいいんだぜ？」

「ギャンブルはやらない主義なの。……結局二回ともセンターだったけど」

「良かったな。今回も投げキッスをくれたりするののか？」

「どうしよつかない、まあ、期待せずに最前列で待ってて」

「アグネスデジタル直伝じきでんのうちわとサイリウムフォーメーションで応援するぞ」

「わかった……ありがとう」

着替えが終わり、ライブ控室へ行くベルちゃんを見送って、アタシはライブ会場の最前列に向かった。今日は特別ライブということで一階客席が指定席扱いになっており、血で血を洗う争奪戦に飛び込む必要がなかった。

ライブが始まり、いくつか曲をやって、大トリが『Special Record!』だった。センターに立つベルちゃんは凛々しく、それでいて可愛く、見ていて改めて感動して涙が出た。こっちに視線をくれた時にはうちわを掲げ、アドリブの振り付けである投げキッスをくれた時にはサイリウムで応えた。

すべてが終わった夜。京都でもう一泊ゆっくりしたいところだったけど、最後の準備のために夜の新幹線で東京に戻ることにした。名古屋から新横浜までノンストップで走り続ける区間、ベルちゃんはすっかり寝入ってしまった。窓の外は暗闇で、街の光は分かるものの、景色はよく見えなかった。アタシがこの世界から飛ばされるまであと何時間保ってくれるか、せめてアタシの家までは保ってほしい。

府中に着き、家まで戻ってきた時には二十三時を回っていた。家に荷物を置き、最後に水をコップ一杯飲んだ。アタシが消えた後、この部屋はどうなるだろうか。中身もろとも消えてしまうのか、超常現象で中身だけが消えるのか、それとも持ち主不明の荷物が大量に置かれた空き部屋になるのか。

寮に荷物を置いてアタシの部屋に戻ってきたベルちゃんと一緒に、学園へ移動した。門は守衛しゅゑいのおっちゃんに開けてもらった。長い間土手にねそべってウマ娘たちのトレーニング光景を見てきた場所、その後併走トレーニングやアドバイスで走り回った場所、そんなグラウンドを眺めた。空には月の姿はない。今日はまだ上弦の月には早いくらいで、まだ新幹線に乗っている時間のうちに沈んでしまっていた。

たった今感じた身体感覚から、思ったよりも「終わり」が早いことを悟った。月明かりの下で永遠の別れ、そんな物語みたいな巡り合わせにはならなそうだった。次に月の姿を見る時、次に日の出を拝む時、もうそこにベルちゃんはいない。

「ベルちゃん」

呼びかけに返事はなかった。

「残念だが、神様は一秒たりとも猶予はくれなかったみたいだ。もうすぐお別れだ」

これにも返事はなく、しばし静かな時間が過ぎた。

「……この世界でベルちゃんと出会えて、仲良くできてよかったよ」

この言葉に、ようやく返事があった。

「……ありがとう」

「ベルちゃんに騎士として仕えるのも今日限りだ。ちつとも騎士らしくなかったけど」

「ううん。ちゃんと立派な騎士だったよ……あ、そうだ」

「どうした？」

「騎士の退任式をやるつか。やり方は知らないけど……」

「適当でいいんじゃないか」

「そう……じゃあ、そこに立って」

「おう」

立つといいつつ、ベルちゃんの前で膝ひざをついて頭こゝろを垂れた。

「今日までの長き務め、御苦勞様でした。今日をもって、騎士の任を解きます……ゴールドシップ」

「ありがたき幸せ。……へへっ、ベルちゃん初めてアタシの名前を呼んでくれたな」

「そう、だったね」

「ベルちゃんが名前を呼んでくれた記念だ。だから泣くのはよせ」

「だって……」

立ち上がり、ベルちゃんの目尻の涙なみだを拭う。

「ごめん……最後は笑顔で見送ろうって思ったのに」

「ありがとな。ベルちゃんに見送ってもらえてアタシは幸せ者だよ。今まではたった一人
で世界から飛ばされてたからさ」

二十三時五十九分。

この感覚。間もなくその時が来る。

「じゃあ、さようならだな」

「待つて」

ベルちゃんがアタシにしがみつくようにして自分の身体を持ち上げ、唇に軽くキスをした。そして、涙をぽろぽろこぼしながら、アタシに笑顔を向けて、はなむけの言葉をくれた。

「また、『いつか、どこかの世界で』。それまで、さようなら」

最終章 前編 Trial #144 : —— 新たな世界で ——

(Trial #144 : Side Gold Ship)

目覚まし時計のアラームで目が覚めた。時計を見ると、アタシの最後の記憶から五年前、その年の四月の日付が表示されていた。予想通りだったと思うのと同時に、とてつもない虚無感きよむかんに襲かわれた。あの長く甘い日々は、もう二度と手の届かない場所へ行ってしまうのだと悟さとった。

薄暗い部屋の中、ベッドから起き上がることもできず、ただ完全に崩れてしまいそうな心と身体をこの世につき止めることで精一杯だった。涙さえも出なかった。涙を流すと、全てが終わってしまいそうだったから。

おそらく昼過ぎ、不意にスマートフォンが鳴った。画面には『トレーナー』の文字。アタシの知らない、アタシの関係者。そのままやり過ごそうかと思っただけ、全く鳴り止まないで、残りかすのような力を振り絞って電話に出た。

「……………もしもし」

『新年度初日からミーティングぶつちとは中々やりおるのう、ゴールドシップ黄金の船よ』
電話口から聞こえたのは、元気な爺じいさんの声だった。

「……………わりい。ちよつと調子が悪い。三日休みをくれ。頼む」

『ふむ、承知した。…………四日目の昼までに来なかつたら、警察と消防と救急隊とたづな殿とともに突入する。ゆつくり休むが良い』

「あざす」

爺さんを何かを察してくれたのか、あつさり休みを了承してくれた。

その日、アタシはベッドから動けなかった。

次の日、たとえ悲しみの底にあつても腹は減る。キッチンの保管庫にあつたパンを一個かじって、その日は終わった。

三日目。風呂に入つて、飯を食つた。久しぶりにスマートフォンを見たら、ジョーダンやナカヤマ、シリウスシンボリから矢のようにメッセージが入っていた。なぜかフラッシュやファル子、ファインモーションからも入っていた。この世界のアタシは結構な人気者らしかった。とりあえず全員に簡単に返信して、この三日間の新たな親友であるベッドにもぐり込んだ。……明日は絶対行かねえとな。

そして四日目の朝。制服に袖そでを通し、学園の門をくぐってからトレーナー室に直行ちやうじやうした。部屋の場合は頭では覚えていなかっただけでも身体が覚えていた。扉はすでに開いていて、まるでアタシが来るのを待ち構えていたかのように、トレーナーの爺さんが気迫のある笑みを浮かべてこちらを見ていた。

「久しいな、ゴールドシップ。三日ぶりだ。ふむ……その目、まるでどこか遠くの世界か

ら来て、ワシに初めて会ったような感じの顔だな」

「爺さん……分かるのか？」

「少々カマをかけたただけだったが、そのままかだったか。そもそも『ここ』のゴールドシップはワシのことを一貫して『くそじじい』と呼ぶしな」

気がついたら、何かを見透かしたかのようなこの爺さんに、前の世界のことを洗いざらい話していた。その荒唐無稽な話を爺さんは黙って聞いてくれた。

「ワシには難しい話は分からんが、でもお前さんは嘘はつかない……とりあえず涙を拭け。美しい顔がメチャクチャだ」

爺さんが投げて寄越したタオルで、涙ですっかりガビガビになった顔を拭いた。

「ありがとな……話を聞いてくれただけでだいぶ楽になった」

「それは重畳ちゆうじやう。それで、だ。お前さんの想い人おもだった『メジロドーベル』という娘こだっ
たか、彼女はこの中央トレセン学園にはおらんようだ」

「そうか……」

「ただ、どこかで聞いたような気がするんだがな、ちょっと待ってくれ。……あーもしもしメイちゃん？ 『メジロドーベル』ちゆう娘を知つとるか？……うんうん、あーありが

とさん。いい酒手に入れたから今度持つていくぞ。じゃ、また」

爺さんがどこかに電話をかけ、何かを得られたらしい。

『メジロドーベル』さんは、トレセン学園じゃのうて美術系の学校に行つて、昨年漫画家としてデビューしたそうじゃ。ペンネームは『鈴田^{すずた}めじろ』、同人作家時代は『どぼめじろう』と名乗つていたこともあつたらしいが、やはり響きの問題じゃろうか」

「漫画家になつてるんだな、ここでは」

「来週近所でデビュー一周年記念のサイン会があるらしいな。行つてみるといい」

「あざす」

「……丁寧なゴルシは何か落ち着かんの。ワシはマゾではないが適当に暴言^{ぼうげん}を吐いてメチャクチャな行動をしてくれい」

「無茶言うなよ……」

その後、来週からのトレーニング計画、チーム編成計画などを話し合つて別れた。どうやら今日はアタシは授業全休の日らしい。ナカヤマからの誘いのメッセージに乗つて屋上に顔を出すと、昨日メッセージをくれた奴らが勢揃いしていた。

「ようゴールドシップ、三日休んだ原因が腹痛か、失恋か、シリウスとちよつと勝負して

んだ。やんごとなきお姫様が用意してくれた高級スイーツが報酬だ」

「そのシケた顔、失恋に違いないな。この勝負は私がもらった」

「シリウスにしちや軽はずみな判断だな、アタシは腹痛に賭けるぜ……！」

「ゴールドシップさん、ごめんね。変な勝負しちやつて。お詫びにゴールドシップさんにはこれを一個先にあげるね♪」

「おいちよつと待つてくれよお姫様。私らの報酬を削るのか？」

「大丈夫、追加がもうすぐ来るから」

「ファインがそう言つて間もなく、SP団が箱を何個も持つて来た。……これ人数分あるんじゃないね？」

「チツ、これじゃ賭けても仕方がねえ。勝負は持ち越しにするぞ」

「ひざまず跪いて私に服従を誓う練習をしておくといい」

「いいねえ、アタシの心が疼く……勝負が続くのは良い。それで、だ。本当のところはどうなんだ、ゴールドシップさんよ？」

「……シリウスの勝ちだ」

「え!? マジ? ゴルシが失恋? いつの間に誰と付き合つてたし!? ……あーごめん、

ちよつと聞き過ぎたわ……」

「いや、いいぜジョーダン。今日は蹴りは勘弁してやる……」

「マジでごめん……」

「えーと、ここはファル子が元氣チャージのライブパフォーマンスを入れたほうがいいのかな……?」

「ファルコンさん、今日のところはひとまず待ちましょう。時間が必要な時もありますので」

「そうだね……」

「ところでなんだが、お前らみんな授業は休みなのか?」

「理事長に『お願い』してこのみんなを公認欠席にしちやつた♥」

「おいおい……」

とはいえ、お姫様の職権濫用しよつけんらんようのおかげでみんなに会えて、心持ちがかなりマシになったから感謝しないとな。

週末、この世界のベルちゃん、鈴木めじろ先生のサイン会に行ってみた。当日でも先生の本を買おうとサイン会に参加できるとのことだったが、非常に人気だったので、アタシが本を買えた時には在庫ギリギリになっていた。長い行列に並ぶ待ち時間で本を開き、漫画を読んでみた。

その作品は王道のウマ娘青春スポ根ものだった。主人公の少女が、ドロップアウトしてやさぐれていた先輩ウマ娘に出会って、トレセンでぼつぼつ交流しつつ、時々教えを受けたりしていき、少しずつ成長する。その過程で先輩にあこが憧れるようになる。第一巻ではそこまで描かれていて、続きが非常に気になるところだった。

サイン会のブースに入る順番が来た。前にはまだ三人ほどいる。入口を通り、作家席の方を見た。ショートヘアのウマ娘で眼鏡をかけている。あの耳飾りは……

「——の方、次の方？」

気がつくともうアタシの順番が来ていた。彼女の前に来てもう一度その姿を見て、

「——ッ！」

視界が霞み、気がついたら涙がこぼれていた。驚く彼女と心配そうに見るスタッフ相手に、かろうじて返事をした。

「すみません、先生に会えた嬉しきで、つい」

その言葉に安堵あんどするような、苦笑するような笑みを浮かべて、彼女が口を開いた。

「ありがとうございます。嬉しいと言って頂けて光栄です」

とても聞き覚えのある声にまた涙がこぼれそうになったがどうかこらえた。本にサインをもらって受け取り、握手をして離れた。その手はアスリートだったこれまでのいくつもの世界のベルちゃんと違って、絵を描き続けたがためのペンだこがあった。

家に帰ってもう一度本を開くと、ひらりと一枚のメモが落ちた。そのメモは先生……この世界のベルちゃんからのものだった。

『こんにちは、ゴールドシップさん。この手紙はもしかしたらあなたが来てくれるかもしれないと思って、ずっと前に作っていたものです。本当はこんなことをしたら編集さんから怒られてしまうんですが、あなたにお礼を言いたくて、手紙を書きました』

『私は、親戚と同じようにトレセン学園に行くか、昔からの夢だった美術系の道に進むか迷って、美術を学ぶことにしました。絵を学ぶさなか最中、親戚の勧めもあってトレセン学園を

訪問見学して、ゴールドシップさんの姿を見ました。ありきたりな言葉ですが、レースに打ち込む姿がかっこよくて美しいと思いました。その時にこの作品のアイデアが浮かび、描いて応募して、賞をもらってデビューできました

ゴールドシップさんの活躍はテレビやレース場で見てきました。これからも頑張ってください！

P.N. 鈴田めじろ（メジロドーベル）』

「ベルちゃん……へへっ、そう言われたらもう頑張るしかねえな」

ここの世界のベルちゃんと会えて、メッセージまでもらえて、とても嬉しくなった。週明けから仕切り直して、この世界で勝って、ループ脱出を目指して頑張らないとな。

週明けの朝。

「朝一番のラジオ体操の時間だぜ爺さん！」

勢いよくトレーナー室に飛び込んだが誰もいない。どこ行っただらうなと思った瞬間、不意打ちで脚を触られて咄嗟とつぎに蹴り飛ばしてしまった。

「ぐおお……………」

「あ、おい、大丈夫か…………？」

「フツ、元気は超一流に戻ったな」

「な、いきなり何しやがるこのくそじじい！」

「おーいいぞ、やつぱりゴールドシップはそうでなくちやな、ホッホッホ」

「つたくよー、せっかくのゴルシちゃんポイントが超マイナスだぞくそじじい」

「もともとマイナス 5000 兆ポイントだったのが今更どれだけマイナスになっても知らんの」

「食えねえくそじじいだ」

「フッフッフ、さ、確か新しいメンバーとして決め打ちで勧誘したい娘がおるんじゃないかな？ 次の選抜レースに登録が出ていたから獲りに行くぞ」

「おう！」

新たな一歩を踏み出した瞬間だった。

(Trial #144 Started.)

最終章 後編

Trial #143 : —— 遠い世界への手紙 ——

(Trial #143 : Side Mejiro Dober & Mejiro McQueen)

ゴールドシップ様

拝啓

もう永遠に届かないあなた宛での、はじめての手紙です。書くのが遅くなってごめんなさい。

あなたと最後のキスをしたあと、しばらく記憶がありません。気がつくと、自分の家の

ベッドの上において、両親とマックイーンが不安そうに見つめていました。目が覚めてすぐに病院で検査を受けましたが、特に異常はありませんでした。

あなたのことを覚えていたのは、あたしと、マックイーンのたった二人だけでした。ナイスネイチャさんもあなたのことを覚えていませんでした。ネオユニヴァースさんなら覚えていられるかもしれませんが、まだ会えていません。

学園じゅうから、あなたの存在だけが消えていました。食堂には誰が考案したか分からない人気メニューがあり、そのメニューを求めて殺到するウマ娘達にそれを出すための戦力が急に足りなくなつたと、食堂のえらい人が嘆いていました。いろいろな子のトレーニングを見てアドバイスして、その子達を上達させた先輩ウマ娘のことも、みんな忘れていました。

——気が狂いそうでした。あなたのことを誰も覚えておらず、あなたのこととも結果だけが残ってあなたの存在は全部消えてしまっていて、まるであたし達が間違っているかのようにでした。シヨックで二週間引きこもりました。それこそ、あなたに向けて昔言ったかのように、パジャマ姿で部屋の片隅にうずくまり、薄暗い部屋の中でただひたすら、夢

なら覚めてほしい、ただあなたに会いたいと、そう思い続けました。

告白しますと、引きこもりの最中^{さなか}、あたしの視線が机の上にあるハサミに留^とまって、そこから動かなくなってしまうました。この世を離れてしまえば、もしかしたらあなたが行った世界に行けるかもしれない。別れの時に強がったけどやっぱり無理だった、もう楽になりたい、と。でもあたしの身体は一步も動きませんでした。

二週間たったある日、なぜかあたしの手元に、ひとつのお守りが落ちてきました。それはしばらく行方不明になっていた、あなたが買ってくれたものでした。手に取り、眺めて、不意に涙がこみ上げてきました。かなり泣いたと思います。母さんとマックイーンが扉をこじ開けて中に入ってきて、抱き締めてくれました。そして悟^{さと}りました。もう、あなたには二度と会えないと。

その後、髪を思いきって切りました。家族から何度も確かめられましたが、本気でしました。でも物語でよくあるような、失恋を断ち切るためではありません。むしろ逆かもしれません。髪を切ったという思い出を刻^{きざ}むことで、決してあなたを忘れないようにするために。ちなみに、髪を切ってから初めてマックイーンに会った時、マックイーンがあたしの

ことを分からずに「どちらさまでしょうか……？」と首をかしげていたのには思わず笑ってしまいました。一生の思い出です。

トレーナーと話し合っているいろいろ考え、エリザベス女王杯を最後にトウインクル・シリーズを引退しました。もともと、幼いウマ娘向けの教育やトレーニングに興味があったので、残る時間を入試の勉強にあてて、スポーツ科学と教育を同時に学べる大学に進学しました。入学式のときは有名人だったのもあつて遠巻きに見られていましたが、すぐに友達のできたのでほっとしています。

最初の連休のとき、あなたが話してくれたマグロ釣りのエピソードを思い出して、マックイーンと一緒に大間まで行きました。残念ながら、そこでもあなたの存在は記憶から消えてしまっており、ただ変わった豪快なウマ娘が仕事を手伝って、自分の銅像を建てて帰ったという話だけが残っていました。そのウマ娘像は、確かにあなたの姿そのままでした。存在の証がすべて消えてしまった世界で、唯一残ったあなたの痕跡でした。

それ以外にも日本各地をいろいろとまわり、「謎のウマ娘」による偉業の数々を聞いて回りました。あなたって、本当にいろいろなところで愛されていたんですね。それが少し誇らしく、一方でとても寂しくもありました。

あなたとの恋が、あたしにとって最初で最後の恋です。もしかしたら、今後誰か他の人と結婚したりすることもあるかもしれませんが、でも、恋はこの一度きりのような気がします。あなたのことを一生想い続けて生きることを思います。……ね、重い女でしょう？でもこんなに重くても、世界の理不尽りふじんによつて動かされるあなたをつなぎ止める重石おもしにはなれなかつたね……

これからも、あなたに恥はじない人生を送れるよう頑張ります。伝えたいことができたらかまた手紙を書きます。それまで元気でね。

じゃあ、また今度。待ってます。

〇〇〇〇年十月十日

敬具

メジロドーベル

ゴールドシップ様

拝啓

先日、ドーベルから、貴方宛てに手紙を書いてみないかと提案を受けました。貴方が新たな世界へ旅立つて早一年近く、私とドーベル以外の皆がゴールドシップさんのことを忘れてしまった世界を生きてきました。

今までにも、貴方と別れに至ったことが二回ありましたね。あれはすべて私の愚かさが招いたこと、今でも思い出しては後悔を繰り返しています。貴方を幾度いくどとなく傷つけたことは悔やんでも悔やみきれません。でも、思い出すことによつて皮肉にも貴方のことを忘れずにいられるのです。一回目は私の暴走により面と向かうことになり、二回目は貴方の赦ゆるしによつて会うことができました。でも、三回目はありませんでした。ドーベルとともに貴方の手掛かりを探して、しかし何も得られず、一度は心が折れました。

ドーベルがふさぎ込んで二週間部屋から出てこなかった頃、私はずっとドーベルの家に寝泊まりしていました。部屋は固く閉ざされ、中を窺うかがうことは容易ではありませんでした。あの時、私もドーベルのご両親も口にこそしませんでした、ドーベルが思い余つ

て自らに刃を突き立てる一大事があつてはならないとかなり不安に思いつつ、声かけを試みていました。

二週間経つた頃、突然部屋の中から大声の泣き声が響いてきて、慌てて部屋に駆けつけました。私の力のリミッターが一年ぶりに外れて、ウマ娘としての力で扉を蹴り破つて、お母上とともにドーベルのもとに駆け寄りました。こもりきりだったドーベルの姿は少々お見せできるものではありませんでしたが、目に輝きが取り戻されているのを見て安堵しました。

次にドーベルに会つた時、髪をばつさりと切つてショートヘアにしてしまつていたので大変驚きました。ずっと長い髪を見慣れていましたし、メジロの中でショートヘアに近いのはライアンくらいです。ライアンのはむしろベリーショートに近いものですが。でも、意外とお似合ひでしたわ。世界の壁を越えて貴方の元に届けられたら良かったのですけれど。

それから、ドーベルとともに各地を巡つて、貴方が活躍した痕跡を探しました。ほとんどの所で名前こそ忘れ去られていましたが、謎のウマ娘の功績として語り継がれていて、改めて貴方の偉大さを感じたものです。特に、大間に建てられていたゴールドシップさん

の像は、写真すらも消えてしまった貴方の姿をこの世界に残す唯一の存在でしたので、丁寧に写真を撮って飾っております。

貴方への告白の返事を何度もしようとしてくれたことは存じております。それから逃げてきた私は、最後まで貴方の返事を聞くことができませんでした。言葉で明確に断られなければ、ずっと望みを持っていられる。かつての私の狡い逃げの言葉でした。貴方は誠実でした。でもそれを受け入れる度量が私にありませんでした。

今にして思えば、たとえ貴方が告白を受け入れても、受け入れて頂けずとも、私の恋心は決して変わることはありませんので、きちんと返事を聞き、それから改めて恋をすれば良かったのだと思います。

貴方のほかに恋をする相手が現れるかどうかは分かりません。もしかしたら、これも過去の一枚になるかもしれません。貴方への想いを一生貫くと告げたドーベルと比べて、とても軽薄で、相変わらず逃げを打ってしまう弱いウマ娘です。でも、その弱さを自覚できたのも貴方のおかげです。

今、私はメジロの家の采配をすべく、祖母のもとで日々修行をしております。一切の

レースに出ることなく、かつて不祥事^{ふしょうじ}を引き起こした者が次期当主となることに不安や批判の声も聞かれました。私は全てを懺悔^{ざんげ}し、永遠に同じ過ちを繰り返さないと誓いました。最後の後押しをしてくれたのは実は貴方でした。貴方が私の名をあちこちで広めてくれたおかげでしょうか、各地からの励ましの言葉を頂き、信任される運びとなりました。もしいつか奇跡^{しきせき}が起きて、貴方に相見^{あいまみ}えることが叶いました時に、胸を張って私自身を自慢できるよう精進^{しやうじん}いたします。

次はさらに良い便りを届けたく思います。それまでお元気でお過ごしくださいませ。

敬具

〇〇〇〇年十月十日

メジロマックイーン

(Trial #143 To be continued...)

あとがき

お久しぶりです。麦（穀物P）です。

『ウマ娘プリティーダービー』が好きで、ゲームをしたり、pixivで二次創作ファンアートや漫画、小説を読み漁ってきました。ある時、もともと執筆している『ご注文はうさぎですか？』の小説が行き詰まりかけた時に、気分転換と称して久々にウマ娘二次創作小説を書いたところ、あつという間に筆が進み、本編『訳ありなゴールドシップ』のスピノオフ的位置付けとなる本作品が生まれた次第です。

ゴールドシップさん（お馬さん）とメジロドーベルさん（お馬さん）は、史実では競走馬として活躍した時期が大きくずれており、また、繁殖はんしよくの任を務めている（務めていた）時期も重なっていないため、共通点も接点もありません。ゆえに、カップリングとして思

い浮かべたのは完全なる私の突飛な妄想であり、元ネタも何もありません。当作品内のゴールドシップ（ウマ娘）は、実質「ウマ娘としてのパワー、また、ヒロインと密接な関係を有するトレーナー役」と言ってもいいかもしれません。

当初は、この話はここまで長くなる予定はありませんでした。もともと本編中のゴールドシップの独白「エピソード分を、前後編構成で少し広げて描き、三月中に終わらせるつもりでした。しかしながら、諸々の欲望により、前後編構成が前中後編となり、後編が上下に分かれ、ついには単なる章番号に変化してしまいました。全十四章とここまで長く書いたのは久々で、しかも完結させたのは初めてのことです。

今後、『ご注文はうさぎですか？』と『ウマ娘 プリティーダービー』の両方の作品の二次創作小説を書いていきたいと思えます。どうぞよろしく願います。

麦（穀物P）

Trial #143 — 空位の騎士 —

著 者： 麦（穀物P）

発行元： 麦之穂

サイト： <https://muginoho.ehoh.net/>

連絡先： circle_muginoho@aotake91.net

発行日： 二〇二三年（令和五年） 七月 一日（初版）

二〇二四年（令和六年） 二月 四日（第三版）

印刷所： ちよ古つ都製本工房 (<https://www.chokotto.jp/>)